



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ある仕上工の生活史と造船業労使関係：面接の記録と解説
Author(s)	大山, 信義
Citation	北海道大学人文科学論集, 21, 59-126
Issue Date	1984-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34373
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_PL59-126.pdf



ある仕上工の生活史と造船業労使関係*

— 面接の記録と解説 —

大 山 信 義

はじめに

0. 本稿は、〈生活史と労使関係〉という研究主題にむけて実施された面接記録の一部である。

この記録は、面接における口述の順序を若干組み換え、必要に応じて語句を追補して語調を整えたことを除けば、実際の対話をほぼそのまま再現してある。考察の対象は、宮城県石巻市の石巻工業港西浜町に立地する山西造船鉄工所であり、話者は、昭和53年4月にこの造船所を希望退職した都沢^{みやこざわ}学さんである。この面接記録のなかに登場する人物・会社名等は、関係者の承諾を得て、実名で記載することができた。この点は、口述記録の編集作業を話者と聴き手とが共同して行ったこととあわせて、生活史研究としては特異な事例になるものと思われる。

1. 筆者が本稿のような、ほとんどなまのまの生活史口述記録の一部を発表することについては、生活史研究・労使関係論・現代社会学の

三分野にわたり、相互に錯綜しあう理論上の含意がある。生活史研究を焦点にその事情を敷衍すると、まず、これまでの経験社会学は、生活史のような未分析の調査資料それじたいを先科学的な第1次資料とみなしてきた¹⁾。すなわち生活史資料は、素朴な実証主義においても、厳密な反証主義・モデル主義においても、解体・再構成されるべき第1次資料としての地位しか与えられなかったのである。これにたいして最近の生活史研究では、現象学的社会学やエスノメソドロロジーなど主観的＝解釈的パラダイムの影響もあって、たんなる第1次資料という以上の理論的な意義を認めるようになっていく²⁾。それはおよそ、以下のような理由にもとづくものと考えられる。

第一に、生活史資料とりわけ口述記録は、話者によって生きられた主観的現実がどのように秩序化されているかを明らかにする。ここで秩序化とは、話者じしんによって生きられた主観的・内的経験の総体を、同じく話者じしんの生

* 本稿は、昭和57・58年度文部省科学研究費（一般研究B）による研究成果の一部である。

i) 生活史資料の位置づけについては、桜井厚「社会学における生活史研究」『南山短期大学紀要』第10号、1982年、参照。

ii) 生活史研究への現象学的社会学の影響について中野卓は、A. Schutzの“Don Quixote and the Problem of Reality”をあげて、「まるでシュッツが、トカラのこの話者と私の本のために書いておいてくださったかのような気が、私には、してならなかったほどびったりであった」と述べている。中野卓編著『離島トカラに生きた男I』御茶の水書房、1981年、233頁。

における重要性の規準に照らして再構成することをいう。ⁱⁱⁱ⁾一般に話者は、話者じしんの生の経営と生への投企をつうじて、〈重要な他者〉〈重要な出来事〉との相互行為を重視し、自己の生活史を整序化するものと考えられる。客観主義・科学主義の立場からいうと、〈重要な他者〉〈重要な出来事〉を決定するのは社会学者の役割とされるのであるが、主観的整序化過程を重視する立場からいうと、その決定権は、もっぱら当の話者に委ねられることになる。そこにおける社会学者の役割は、話者の整序化する主観的現実がどのように構成され、そのばあい話者が、どのような生きたパラダイムに依拠しているのかを発見することにある。筆者がこの面接記録において、通常の社会調査で用いるような調査票はいっさい準備せず、また明示的な作業仮説の採用を敢えて差し控えたのも、そのためである。

第二に、話者の口述による生活史は、聴き手との相互行為を媒介することによって、はじめてひとつのリアリティとして構成される。すなわちそれは、話者と聴き手との共同行為として、また共同行為の結果として織りなされたものと考えることができる。ふつうの日常的な生活世界では、〈重要な他者〉〈重要な出来事〉は、社会学者の調査の意図とは無関係に、潜在的な隠れたリアリティとして、行為者の生を規定しているものと思われる。これにたいして、話者と聴き手との対話という相互行為の場面では〈重要な他者〉〈重要な出来事〉は、そうした共同行為

の過程でたまたま浮上し、面接過程を主導する。言い換えれば話者の生活史は、単純に一元的・等質的なリアリティとして定在するわけではなく、聴き手と出会うことによって自己を流動化し再構成するのである。同じ生活史でも、自伝や日記は厳密な意味での共同行為を欠くのたしいし、口述生活史は、そのまま話者と聴き手との共同行為の所産といえることができる。^{iv)}

第三に、聴き手との相互行為に媒介された話者の生活史が、生活世界の主観的整序化という事態をふくんでいるとすれば、そのばあいに暗黙裡に採用される生きたパラダイムと、社会学者が所有している明示的なパラダイムとの距離は、認識論的にみて決定的な差はないということである。いま話者によって生きられ・支持されているパラダイムを〈第1パラダイム〉、社会学者が科学的認識のために採用するパラダイムを〈第2パラダイム〉と呼ぶ。話者の生活世界には、話者じしんの生活経歴や「関連性体系」^{v)}によって捉えられている主観的現実のほかに、話者の生活とは独立に動いている客観的現実が絡んでいて、〈第1パラダイム〉の所在はきわめて視えにくい。他方〈第2パラダイム〉は、研究者によって理念化されたパラダイムとして明証性の水準がはるかに高く、両者の距離の大きさは明らかである。その距離の大きさは、話者の日常実践的な文脈に即して語られたパラダイムと、社会学者の主観情報（認識関心・理性動機・バースペクティブ）に照らして創られた知のパラダイムとの差と言い換えることができよ

iii) ここでいう〈重要性の規準〉という考え方は、Peter L. Berger, "Alternation and Biography", *Invitation to Sociology; A Humanistic Perspective*, Doubleday & Company Inc., 1963より示唆された。

iv) 中野卓編著『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』（御茶の水書房、1977年）は、そうした共同行為の所産といえよう。

v) 「関連性体系」system of relevance に関しては、Alfred Schutz, "On Multiple Realities," *Collected Papers I, The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, The Hague, 1973, 参照。

う。そうした知のパラダイムは、話者の日常実践的な生のパラダイムとくらべて価値がある、すなわち真であるという保証はどこにもない。知のパラダイムは、むしろ、生のパラダイムによって批判に晒され、あるいは補強されるという関係にある。この関係を無視するならば、両パラダイムの認識論上の距離は極大化していくのみならず、生き生きした体験に満たされている〈第1パラダイム〉を破壊することになりかねないのである。^{vi)}

2. つぎに筆者が、この面接記録の話者と出会うに至った経緯に若干触れておきたい。筆者はかつて、函館ドック函館造船所の総務部人事課にいた江縁廣さんの、また日本セメント上磯工場総務課労務係の野復雅之さん、それに両社の労働組合のお世話を受けて、労使関係の比較調査を行うことができた。^{vii)} 昭和50年代に入り、いわゆる石油危機と造船不況によって、函館ドックは人員・設備を大幅に縮減し、労使紛争が長期化したのを機に、筆者は、再び函館ドックに目を向けることになる。函館ドックの会社と組合は、鎌田慧氏のルポルタージュにもあるように、^{viii)} 昭和54年1月30日に「再建=関スル協定書」に調印し、ほぼ2年にわたる争議は、いちおうの落着をみた。たまたま筆者は初期シカゴ学派あるいは民族学的な手法によって、^{ix)} いわゆる〈反合闘争〉のモノグラフと造船労働者の生活史を創るべく、全造船函館分会の清水正徳君

と相談し、協力を得ることになったのであるが、その際に清水君の執筆した『日魯造船反合闘争の記録』(昭55)を入手し、筆者の関心は東北地方の造船所にも及ぶことになった。

日魯造船は、昭和40年7月に、函館市の日魯工業と石巻市の太平洋造船鉄工所とが合併して創設され、函館に本社造船所を、石巻に工場において、親会社である日魯漁業株式会社の北洋漁業を推進するため漁船の建造・修理、缶詰機械・冷凍機製作を主たる業務とした。石巻工場は、石巻市では山西造船鉄工所、村上造船所につぐといわれる太平洋造船を買収したものである。日魯造船は昭和52年8月、造船不況の波を受けて倒産するのであるが、その再建は労働組合による会社更生法申請という異例の対応によって進められた。これに呼応するように、山西造船鉄工所では昭和52年7月に仙台地裁にたいして会社更生法の手続き申立てを行っているが、これは組合員にとって寝耳に水の事態であったという。話者の都沢さんは、その後の昭和53年4月に181名の第2次希望退職に応募した一人である。

筆者が石巻の山西造船鉄工所の人びとと接触できたのは、かつて全造船函館ドック分会に勤務し、現在は全造船本部の中央執行委員長をしている久保健三氏の労による。久保氏は筆者の面接記録の意図を了解され、久保氏をつうじて山西分会の川並秀五郎氏と高橋健治氏の協力が

vi) 拙稿「社会学と科学的世界——循環構造モデルの転換——」『社会学研究報告／理論研究2』北海道大学文学部社会学研究室、1983年、26-27頁、参照。

vii) 拙稿「経営イデオロギーと労使関係——比較事例的考察——」『日本労働協会雑誌』118、1969年。また、その理論的背景については、拙稿「日本の労使関係と共同体秩序」『日本労働協会雑誌』139、1970年で展開した。

viii) 鎌田慧『労働現場——造船所で何が起ったか——』岩波書店、1980年、1-30頁。

ix) 産業社会学におけるシカゴ学派の位置については、人間関係学派との関連で論じたことがある。拙稿「Human Relations Approach <の展開と思想的意義>」『人文科学論集』11、北海道大学文学部、1974年。

ちとなっている（図1、参照）。

面接の記録は、都沢さんが涌谷尋常小学校高等科を卒業する直前の旧正月、涌谷町を流れる江合川で、少年同士の乱闘事件があったことから始まっている。この喧嘩は、どうやら隣接部落の少年たちが日頃抱いていた対抗心が爆発し、都沢さんが率先して喧嘩に加わったらしいのであるが、この出来事は都沢さんの口述のなかで、くりかえし影を落すものとなっている。この出来事が直接の契機となって、都沢さんは涌谷を離れ、石巻市の鉄工所に弟子入りすることになるのである。鉄工所の師匠は佐藤和市といい、都沢さんは旋盤工として師匠の家で住み込みの生活を送るのであるが、師匠夫婦に子供がいなかったこともあってほとんど実の子のような処遇をうける。佐藤鉄工所は、山西造船が軍の管理工場として指定されたのを機に、その下請け負的な存在となり、やがて買収される。都沢さんの籍も必然的に山西造船に移ることとなり、昭和17年春に第二造機部の旋盤工として配属された。都沢さんは昭和20年2月に師匠の家から兵隊に赴くことになるが、召集の際に一度だけ涌谷に帰郷しただけであった。

昭和22年8月24日に復員した都沢さんは、佐藤和市師匠から、石巻市の④伊藤貞之助氏の経営する「不動丸」に乗り込み福島県四倉港で仕事をするように勧められる。師匠の意を汲んだ都沢さんは、同年10月31日付をもって山西だ船を退社し、26年3月まで四倉に滞在するの

である。山西造船に復帰するのは、26年3月5日のことである。

面接記録は、1. 鉄工所における人間関係、2. 山西造船鉄工所の職場と経営、3. 造船所における労働組合と労使関係、の三部で構成されている。1では、江合川での格闘事件にはじまり、佐藤鉄工所に入職するまでの経緯、師匠との関係、兄弟子たちのこと、鉄工所の買収から四倉時代までを収める。2では、都沢さんが所属していた職場の人間関係と、同族経営である山西造船を支えてきた西條一族と経営陣について口述される。また3では、労働組合の結成と分裂という初期の事態にはじまり、山西造船が倒産するまでが焦点になっている。

本稿では、都沢さんの生いたちと少年時代の記録は削除せざるをえなかった。また上記1, 2, 3についても、紙幅の都合で割愛した部分が多い。なお、この面接記録の収録にあたって、聴き手であった筆者による解説を脚注のかたちで挿入し、口述内容やその背景等について理解が得られるようにした。

以下の話者の口述のなかには、年号・人名・社名等について部分的に記憶違いもありうる。聴き手として可能なかぎり調査を行ったが、その点は了承願わなければならない。以下、面接記録のうちくゝは聴き手の質問、（ ）は聴き手による追加、〔 〕は追補注、他はすべて都沢さんの口述である。

1. 鉄工所における人間関係

河原での格闘事件

〈都沢さんは、高等科を終えたあと、どうされたのですか〉

石巻に行きました。石巻に行くきっかけというのが、卒業する前に、よその部落（の子供たち）と喧嘩やったもんでね。あれは、旧一月の一日でしたね。当時、元朝参りとか八八幡^{やばちまん}かけに行くとなると、部落の人たち十人か十五人くらいで行ったもんですが、たまたまそのグループで元朝参りやったときに、ほんとうに生命をかけたというで大袈裟になりますけれども、たいたいした喧嘩になりましたね。

〈喧嘩って、なにが原因か……〉

学校（の勉強）でも、スポーツでも、なんか（の機会）に負けたとか勝ったとか、そういうのが尾をひいておったわけですね。運動で負けでも、喧嘩で負けないぞといったようなことでしてね。私たちね、よその部落と対抗意識が、ほんと、激しかったんです。その当時は、なにやるにもよその部落に負けてはだめだというような——（喧嘩は）たびたびやっておったんです。あったかい時期には、江合川を挟みまして、川でやったもんです。川に河川敷がありまして、水が少なくなると砂が出てくるんですね。それで、水が少なくなったときは、どちらともなく、一対一でも二対一でもやりましたね。多いときは三十人くらい来て、むこうも三十人くらい、

こちらも三十人くらい。（対立しあうのは）川を挟んで、隣り部落と、あるいは隣り村なんだということなんでしょうね¹⁾

〈それで卒業の前には、決定的な喧嘩をしたわけですか〉

大乱闘になってしまったんですよ。川のむこうに、^{しも}下町で部落（の子）と喧嘩しましたね。私も尺八吹いておりましたから——早い人で十歳くらい、遅い人でも十二、三になると、横笛とか尺八なんか吹きましたね。そういうところも昔の城下町というところから来てるんじゃないですか——、その尺八が武器に変わるわけですね。

尺八というのは、竹の根っこを切るもんですから、根がこう巻いてあるんです。あれで叩かれたら、ほんとうに、頭が大変なことになる。私より一級下で、近所におった星 隆司くんという人は、（相手の尺八で頭を殴られ）意識不明に陥ったですね、三日ほど——。

そのときに、私のおふくろが、たまたま通っておったお医者さん——このかたは涌谷のお城の城代家老をしておった脇澤という人の子孫ですね——その先生のところに馳せて行ったんです。旧の一月元日ですね。当時、内科やっておったんだけど、私もたまたま（おふくろに）連れて行かれたりした記憶あるもんだから、ほんと、お医者さんに行きましたらね。

「呼吸してんのが？」

っていうから、

「息はついてるようだけでも、まだ死んではい

1) 宮城県遠田郡旧涌谷村は、昭和 23 年 12 月 1 日に元涌谷村を編入して町となり、30 年 7 月 15 日に^{のだけ}篋岳村と合併して今日に至っている。涌谷町は、市街地の中央を流れる江合川によって二分され、国鉄駅側は涌町、川向かいの下町といって、下町は元涌谷村に属していた。ここでいう「隣り村」は、旧元涌谷村字下町をさしている。都沢さんによると、柔道・剣道・野球などで「隣り村」とはつねに対抗し、しばしば喧嘩騒動を起しており、「犬猿の間」になっていたという。

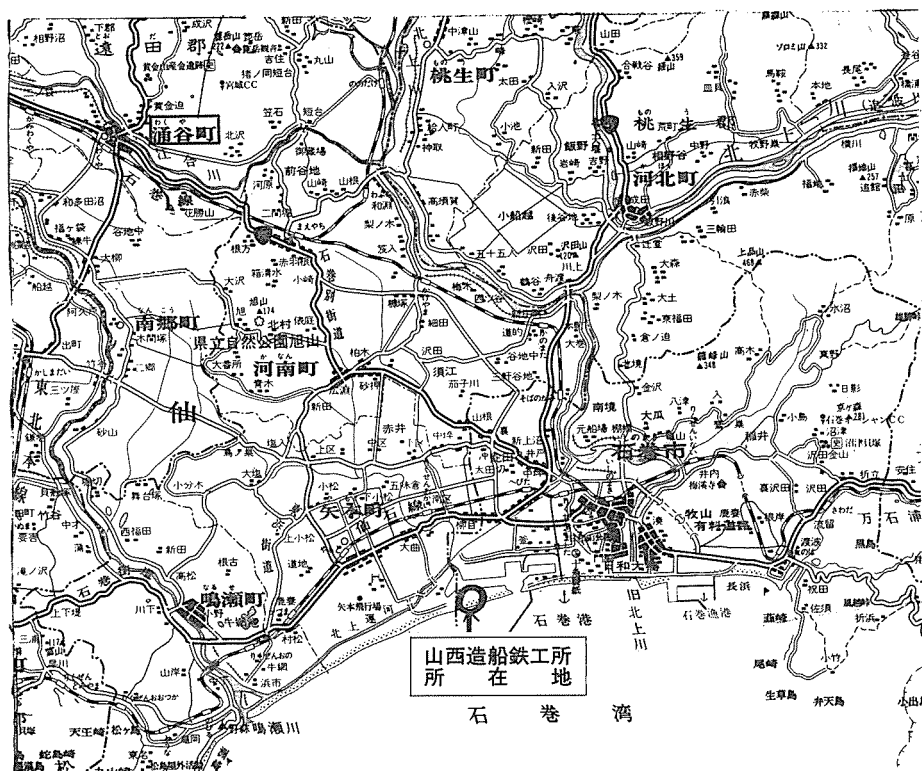


図2 涌谷町と山西造船鉄工所の位置

ない。ただ、返事をしないんだ」

と言いましたら、

「それでは、俺サ来るよりも、和尚さんサ行け！」

て言われたこと、いまでも頭サ入っておりますね。「もう死ぬから、医者ではだめだから、和尚サ行け」って。私は、えらくがっかりして、「どんなことになってしまうんだろうかな」って、こういうふうに思いましたね。

〈その喧嘩は、結局、勝ったんですか、負けたんですか〉

うちの方は、負けたですね。で、私が年長者なもんだから、学校に呼ばれて、もう徹底的にやられたことあるんですね。むろん警察にも呼ばれました。意識不明でしたからね。

それでも敵討ちということを考えたんですけども、なにせ、うちの兄き〔次男の長門〕が警

察官なもので、うちの親たちの監視つきで、もう一步も（外へ）出てはならないということで、うちから出さねぐなってしまったですね。むこうでも敵討ちされるだろうという気持ちをもっておったしね。当時、兄きは満州に行っておったんです。19師団に3年ほどおって、現地除隊しましてすぐ警察に、満州国安東省の安東で警察官です。それで、たまたまお嫁さんもらうなんてね、涌谷サ帰ってきておったんですよ。そのときに、この事件が起きましてね。兄きも、私が警察に呼ばれて行ったときに、警察さんに顔見せたようでしたけども。そんでほら、「(学に)涌谷サおられたんでは、たまたまもんでない。すぐ、どこさか行かなきゃ——」、とね。

石巻に行くきっかけが、そこに出たわけなんです。

〈都沢さんは、先頭切って喧嘩したほうですか〉
そうですね。当時のガキ大将だったんですね。
体はこまかったんですけど、太くてね、柔道な
んかに通っておったね。そういうことは率先し
てやりましたね、悪いことは——。

私は、べつに（涌谷に）居づらくなったとい
う気持はなかったんですけど、親とか兄きたち
が、どうも涌谷においたんではまずいというの
で、それじゃ石巻に知り合いがいるというので、
佐藤鉄工所のほうにやられちゃったんですね。

〈ほかの子供たちは、卒業してどうしましたか〉
ほかの子供たちは、みな満州あるいは朝鮮に
行きましたね。当時の就職は、満州の鉄道と大
連の国際運輸というのに行きましたね。

その、涌谷町のろくでなし者、つまり荒い若
いひとたちは、ぜんぶ外国サやっしまえとい
うのが、役場とか町会議員とかで決まってお
たらしいんです。あとはみな、兵隊サやれと。
ここに置いたんでは、まずい。そういう荒いひ
とは兵隊に行っても、外国に行っても、人一倍
働くわけだから、って言われて……。温厚な人は
残ったんですね。そういう政策も国内ではあっ
たということを、終戦になってから十年くらい
たってから聞きましたね。

それで、その当時の喧嘩相手の人とは、いま
は無二の親友ですわ。元涌谷村の先生したひと
の子供で、森 郁夫ていうのがおるんですけど、
このひとなんか一月一日の喧嘩やったときも、
最高にやったんですけども、いまは釜石市の市
役所で厚生課長やってるんですがね。私たまた
ま、船舶の関係で出張したときに電話やるんで
す。そうすると、たいそう喜んでね。

それから、（当時喧嘩した仲間には）いまふう
でいえば暴力団、ヤクザの道に入って、刺され
て死んだ人が二人いますね。私ね、その亡くなっ
た人には、毎年春の彼岸とお盆と秋の彼岸は、
だいたいお墓参りしますね。

そういう友だち、戦死した人、小さいときか
ら喧嘩相手だったひとたちは、いまでも懐しい
し、お墓に行っても、そのひとに、声はむこう
では出さないけれども、私のほうで声かけて、
まあ、十五、六分そこでしゃべってくるんです。
いつも——。

鉄工所へ弟子入り

〈その佐藤鉄工所というところは……〉

石巻の仲瀬〔現・中瀬〕というところにあっ
たっただけです²⁾。

〈なにか、ツテがあったんですか〉

私もわからないんですけども五、六代前の
遠縁ですね、遠縁に当たっているというので、こ
こにやられたんです。その佐藤和市というひと
の、弟子入りになったわけです。

〈どういう鉄工所だったんですか〉

船のエンジンを専門にやっておったんです。
たまたま船のエンジン（の注文）がないときな
んかは、風呂屋さんの水タンクを作ったり、修
理したり、それから石巻方面は加工場が多かつ
たもんで——魚加工、水産加工ですね——そこ
で使う機械とか、道具関係を作ったり、修理し
たりしてましたね。

〈学校を出て、すぐ鉄工所に入ったわけですが
ど、仕事はどうやって覚えたんですか〉

私の親戚で、おやじ〔久内〕のおふくろの出

2) 石巻市の中瀬地区は、市内を流れる旧北上川河口に位置し、山西造船・村上造船・大脇造船・日魯造船・
奥田造船など中小造船所のほか鉄工関連の町工場が林立し、造船工場地帯を形成していた。

た家なんですがね。荒さんという鍛冶屋がこの地元〔涌谷町河原町〕におったんです。鉄砲を作る鍛冶屋、鉄砲鍛冶ですね。荒鍛冶、荒鍛冶でいっておりましたがね³⁾

ここに私、学校の帰りだとか、いろんなときに見ておったもんですから、だいたいとこが頭に入ってわかっておったんです。それに、船の名前、エンジンの名前でも、このへん(石巻)に発動機があったもんで、そういうのが好きでだいたいところはわかっておったんです。その荒鍛冶のあるところの東側が、俗にいうボンボン船の着き場だったんです。

私の親戚の荒さんは、涌谷藩⁴⁾の鉄砲作りしておったようですね。大東亜戦争にも、鉄砲、小銃作りに呼び出されたんです。

くで、最初はどんな仕事からやらされたんですか

片づけ方でしたね。十日ぐらいしてからは、ごはん炊き。朝ですと、まず米を研いで、当時は雑木、檜木の薪で火を入れますとね、ごはんを炊きながら、(他方では)機械に油をさしてね。むかしの機械ですからカウンター・シャフト〔伝導軸〕というのありまして、モーターからベルトでもってカウンターをまわして減速するわけなんです。これからボール盤なり、旋盤なりにベルトで回転を伝えておったんです。この機械は、モーターの何分のなんぼ回転させなきゃだめだと、いろいろな計算をしましてね。当時は油さしといいまして、モーターだとかそのカウンターに油をさす。朝はごはん炊きかたわらにね——毎朝このくりかえしでした。

それから冬場であれば、薪をストーブに焚き、みなさんが、兄弟子たちが出てくるのを待つわけなんです。起きるのは、五時ころでした。私、いちばん小さかったから、起きてごはん炊く、その間にこんどは油をさす。だいたいみなさんが起きてくるころに、こんどは兄弟子たちの蒲団をたたんで押入れにいれる、といったことのくりかえしてした。一年くらいは——。

で、朝は七時から作業はじまります。寒いとき、ストーブ使用しているばあい、手を洗うお湯を、当時は「がながん」といっておりましたがね、18リットル入れの油罐で沸かして、(兄弟子たちに)手を洗ってもら。洗うものは、藁でした。縄で結んで、たわしの代用ですね。石鹼だけでは手(の油)が落ちないから、製材所から漆屑^{しつくず}ですか——大鋸屑^{おがくず}をもらってきましてね、大鋸屑と石鹼を混ぜて塗るわけですね。

陽気がだんだんよくなってくると、バケツに日向水^{ひなたみず}をつくっておくわけですね。そうするとお昼ころは、やや温むんです。それで手を洗う。

その当時は、仕事が忙しかったんです。もう十時、十一時ころまでやるときもあったんです。早いときは、銭湯屋さんに行くんですね。風呂に行くにも、脱いだものを入れる籠を、五つなら五つ、この人たちよりひと足先に行って、確保しなきゃならなかったんですね。兄弟子の背中をこすって——。四人も五人もおりますからね。帰ってくると、私のおやじの実家がお菓子屋なもんで、飴だとかパンとかそういうものをよこされておったんです。そうすると兄弟子が、「またあのパンないか、飴ないか」とかいわ

3) ここに出てくる「荒鍛冶」は、都沢さんの祖母・つるよ(旧姓は荒)の生家にあたるが、荒家については不明である(前出図1参照)。

4) 涌谷は仙台藩の支藩として、領内の軍事・政治・経済・文化の中心としてつくられた城下町である。藩政時代は、伊達安芸の居住地であった。『涌谷町史』等を参照。

れましてね、機嫌をとらなきゃならないから、それをあげたりしておったもんです。

寝るころになると、みんな蒲団を敷いてね。みな、住み込みです。部屋の奥のほうから年長順に蒲団を敷く。私はいちばん入り口のほうです。夜なんかは、しらみがわいておってね、虱取り、蚤取りのみをしたり、兄弟子のきび絞りをやらされたりしたことがあります。

その当時は忙しかったもんですから、朝は五時に起きる、夜は十二時、一時ころまでやらされました。私も、兄弟子たちが寝てるあいだ、工場のほうにきてモーターまわしたり、難しい仕事はぶっつけ本番やれないもんだから、職人とか兄弟子に見つけられないうちに前加工してみんです。これならば大丈夫だなと思ったら、その削った材料が見つけれられないように、隠しとくんです。自分の仕事を、いくらでも覚えようと思って――。

師匠のこと

くところで、その佐藤和市さんという師匠は、どうやって身を起こして鉄工所をはじめたと聞いてますか。

現在の石巻市湊町字新町あらまち、ここに長兵衛家やという屋号の農家の財閥がおったんです。師匠は、その当時の豪農の次男として生まれたわけなんです。でも、長男が家を継ぐ関係上、うちの師匠は、北海道の室蘭製鋼所⁵⁾に働きに行ってたってんですね。むこうで、旋盤を習ったっていうんです。この室蘭が、当時の日本でただ一ヶ所しかなかったという、大きな百尺っていう、

百尺旋盤を使って、戦艦の鉄砲を作ったというんです。

それから、そこを辞めて東京の本所に行くと聞いてるんですが、そこに何年いたかわかりませんが、石巻に帰ってきて、渡辺鉄工所というところに入ったんですね。室蘭に行って、軍需産業ていえばおかしんですけど、そういうものをやって、東京に行って旋盤を習ってきたっていうのは、石巻には一人しかおらなかったそうです。

その当時は、石巻では旋盤っていうのは、あるにはあったけれども、高度な機械はなかった。それでも、高度な機械でなくても、東京からきた職人というので、師匠は、相当みんなから注目されたといっておりました。

渡辺鉄工所において、まだ独身時代だったから、夜はエンジンのセールスをやったというんです。そういう金をためておって、給料を合わせた金で佐藤鉄工所の誕生ということにもっていった、ということをお聞いておるんです。本人も遊ぶ暇もなく、自分の工場を大きくしようと思う気持ちが、若かったころにあったんでないですか。夜も寝ないで、とにかく渡辺鉄工所の二階に泊っておいて、昭和十二年か十三年に独立したんでないですかね。

〈その師匠の人柄は……〉

そうですね、なんていうんだろうか、まあ、むかしですからガリガリやられた時代ですけど、師匠は人に手をあげる、弟子にたいして手をあげるというのはなかったんです。ふつうですと、よその師匠は、ハンマーなりスパナ、

5) 室蘭の日本製鋼所。明治40年11月に、北海道炭礦汽船とイギリスのアームストロング・ウィットウォーズ社、ピッカース社との共同出資で設立。明治44年1月、わが国で最初の民間兵器工場として室蘭で操業開始。大正8年に北海道製鉄を合併、昭和25年12月、決定整備計画に基づいて、新たに資本金2億円で日本製鋼所を設立した。『北海道大百科事典』(下)、北海道新聞社、1981年、313頁、参照。

あるいは手にもっていたもので弟子を殴りつけたということを何回も聞かれましたが、うちの師匠はそういう暴力的なことはなかったんですね。その点においては、温厚だったんです。

物にたいしては、道具、家財から石鹼のはてから、消耗品のはてから、うんと丁寧に扱えというような教えかたをしたし、うんとマデ〔丁寧〕なひとなんでしょう。技術的なことも、マデに教えたんです。

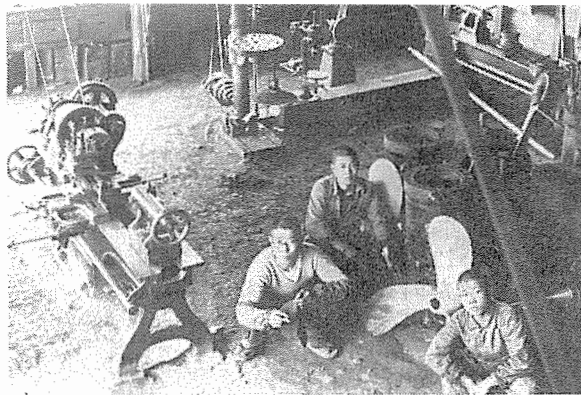
むろんお金のほうは、ガツッと締めたんです。とにかくお金を欲しいというせいか、休ませるというのはしなかったんですね。ふつうですと、ガミガミいいながら、道具で叩きながら、あるいは手で叩きながら働かしたものですけど、うちの師匠はそういうこともなく、もう休ませることなくやったひとなんです。

師匠の奥さん、オアネちゃんのほうは、「休みは休み、休ませなさいよ」というんですけれども、師匠のほうは「休ませないでやる!」、とそういうタイプだったんです。

〈師匠の家庭というのは、どんなふうでしたか〉

師匠の奥さんなるひと、私たちは、「オアネちゃん、オアネちゃん」と呼んでとったんですね。大姐さん——それを石巻ふうのことばでは、オアネちゃんていっておりました。

私なんか、師匠夫婦に「お前は、いっしょうけんめいやるから」なんていわれて、——兄弟子たちが土曜日の夜なんか家に帰るときあるんです——そうすると、師匠夫婦に町につれてかれて、外食したり、服だとかシャツ、履き物、そういうものを買ってもらうのいちばん楽しかったですね。これを買ってもらうのがよくて、いっしょうけんめい働いたのかどうか、それが励みになっていましたね。師匠には、子供は、おら



佐藤鉄工所（左・師匠、中・中川さん、右・都沢さん、昭和16年）

なかったんです。

私なんか、そういう（涌谷で乱闘事件を起こした）事件があったもんですから、なるべく家に来ないようにしておったんです。まわりの見る目が、白い目、黒い目で見られるので——。

私は、（休みの日は）どこにも行かないで薪を割ったり、工場以外のとこの片づけだとか——。それから、兄弟子たちが洗濯物を置いていくんですよ。その洗濯物が四人も五人分もあると、けっこう半日、二時、三時ころまでかかったんです。むろん、蒲団もちゃんと日光浴させなきゃならないしね。虱取りしたり、蒲団の裏にたまっている虱の卵つぶしたりやっておったもんだから、兄弟子たちが（自分たちの）家へ帰ると、なんとなく涙が出ました。

兄弟子たちにはなんでもやりましたから、喜ばれました。洗濯でもなんでも——。頼まれなくてもやっておりましたんでね。人のなかなかとつぎにくいところを、好んでやっておりました。いまでも、そういう傾向があるんです。

兄弟子たち

〈その師匠の、一番弟子はどなたでしたか〉

佐藤幸男さんて方です。

〈佐藤さんは、師匠と親戚かなにか……〉

いや、関係ないんです。この人は、宮城県の登米郡豊里町字赤津^{あこおづ}の出身です。旅館の次男で、

頭の進めぐあいていうか、学校はおそらく成績良かったと思うんです。当時、私たちにも、夜ね、自分の経験あるいは学校で習ったことを教えたり、『三国志』をもってきて読めといて、読ませたんです。「何ページまで読んだか」、なんていわれて——。

〈どういう性格の人でしたか〉

師匠と似て温厚で、案外、義侠心というんですかね、人の面倒をうんとみるひとだったんです。勉強のこと、仕事のこと、ことに勉強とか、ものをご馳走するだとかっていうのは、私たちからいわせれば、親以上のようなタイプだったようですね。

ただ、この方も、弟子を中途半端にやったんです。この人も、東京へ出ていったんです。まあ、逃げて行ったんですねえ。兄き、つまり旅館をやってる兄きのほうがね、石巻に居たって技術もよくならないし、金もとれないんだというので、東京にやらせられたというんです。本人は行きたくなかったということ、いうんです。逃げて行った先〔東京の神田〕から、たまたま忙しいときには、（石巻の佐藤鉄工所へ）手伝いにきておったんです。その過程で、東京で買ってきた本とかいろいろなものをもってきては、勉強あるいは仕事を教えてられましたね。その当時『機械の友』という本があったんです。石巻になかったんですけれど、これ、かなり勉強になった本なんです。

この方は二十一歳で兵隊に行ったんですけど、兵隊に出征する半年くらい前に、豊里に帰ってこられましてね、そのあいだ石巻の師匠のところに泊まっては手伝って、そして（出征の）一ヶ月くらい前に家に帰って出征していったんです。そして、当時の支那、重慶作戦に参加して、最後はビルマで戦死しました。

〈師匠の、そのつぎのお弟子さんというところ……〉

高橋清治さんですね。この方は、年齢がいちばん上で、職人できたんです。弟子でないから、給料取りですね。この方の給料が六十円くらいだったですね。私の聞くところでは、その師匠の遠縁にあたるようです。滑稽な方で、夜なんか、「踊り見ろ！」とか、「浪曲やるから、聞いてればいいんだ」というタイプでね。私はいちばん下ですからね、このひとの浪曲も講談も聞かなきゃならなかったし……。〈それを聞かせたあとで〉「なんぼか（金）出せ」、なんていわれたひとなんです。『三国志』なんか、見ることはないからね、この方は。〔宮城県桃生郡^{かんなん}河南町^{かのまた}鹿又^{かまた}の出身なんです。

〈ほかにお弟子さん、都沢さんの兄弟子というの〉

古川誠一さん、斎藤文夫さん、高橋宣伸さん。

古川さんという方は、石巻の当時の山城町、いまの泉町というところに家がありましてね。お父さんが船乗り、船長だったんです。古川さんのお父さんは、昭和の何年ころだかわかりませんけれども——支那事変〔昭12. 7. 7〕の前に、石巻からかぼちゃと米を積んで、エンジンをいれないで南洋に行ったそうです。石巻からバスで二時間くらいで行くと、〔牡鹿半島の〕鮎川^{あゆ}というところあります。あそこは、金華山沖の捕鯨船の基地で、そこから出港したそうです。途中で嵐に遭って、漂流っていうか、難破して、音信不通になったわけなんです。

それで、私が弟子入りしまして、大東亜戦争が勃発したわけですね。その当時、その南洋方面の無人島から、何年か前に遭難した船のひとたちの名前が、新聞だとかラジオで報道されたんです。それで、毎日のように、その無人島から誰それが出てきたとか、難破船の船の名前と、

乗組員が何人いて何人が残ったという、髪はザンバラ髪で、一尺も二尺も伸びておったという報道が出たんです。古沢さんのお父さんも、あるいは（見つかるのではないか）……、ということでおったもんだからねえ。

その古川さんも、お父さんのためにというので、金はほとんど使わないで、一銭でも二銭でも「なんでもいいから、買って食せろ」なんていわれて、「買って食せねんであれば、その金、けろ〔くれ〕。／＼」なんてね。「（仕事を）教えだ分、けろ。／＼」なんていわれて。「なにすんのさ？」っていうと、「おやじが帰ってきたとき、うまいものご馳走する金だ」というので、私もたまたま、そういうのに小さいときから同情したもんですから、（金を）あげたこともあったんです。やっぱり師匠と同じに、お父さんがいなくて、お母さんの手で育てられた関係よね、金も人も大切にしておったですね。

その船はついに行方不明で、古沢さんのお父さんも、大東亜戦争始まってから、その名前も、船の名前も、姿消しておりました。

私の記憶では、古沢さんは真面目に（仕事を）やっておりました。ただ、この人も弟子入りなかばして、逃げて行った——当時は、「逃げ犬」といったんですね。この人は、船乗りになりましたねえ。むろん弟子ですから、給料はもらえませんから、お父さん（のため）に金を貯めて、家を建てて、というので、船乗りになって、よけい金を取るという考えだったんでしょうね。

〈斎藤さんという方は……〉

この方は、石巻市の渡波^{わたのは}の出身で、実家は加工屋さんというか、水産加工ですね。この方は、

ふつう一般のようなひとだったんですね。斎藤さんも、逃げまして、残ったのは私だけ。職人もぜんぶ逃げてく、逃げてくってというより、当時の職人は辞めていくほうが多かったんです。

〈こんどは、都沢さんの下にも、弟子が入ってくるんでしょう〉

ええ、十六年ころでしたかね。こんど、私にも下弟子が入ってくるようになりましてね。戦争に入ってきますんで、そういう機械産業だとか、造船業がうんと伸びるというので⁶⁾、人がどんどん入ってきたんです。その当時は、学校の卒業式の前に、一時休みがありますね、そのとき既に入ってきておりました。

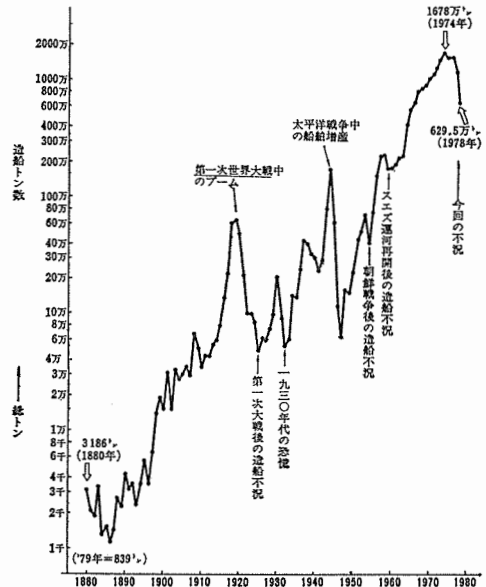


図3 日本の船舶建造量の推移（軍艦を除く）

（出所：全日本造船機械労働組合編『未踏の挑戦——造船産業再編合理化の航跡——』労働旬報社、1981年、65頁）

私なんか、下弟子が入りまして、朝に早く起きて、早いときは二時、三時に起きて仕事やっ

6) 造船業の景気は、戦前では第1次大戦中に最初のピークが現われ、ついで太平洋戦争中の船舶増産で最大の頂点を迎えた。戦後は、昭和35(1960)年に生産量は飛躍的に拡大し、昭和49(1974)年に戦後最大のピークとなった(図2、参照)。

てましたねえ。私も、涌谷におった（少年のころに）、その喧嘩したときの（ことを思い起こして）ね、こういう子供さん〔下弟子たちに〕、警察に呼ばれるようなことだけはさせたくないと、気をくばりました。私も涌谷に帰りたいけども、こういうこと〔喧嘩したこと〕があったゆえ（帰れないでいる）と思ひましてね。

〈鉄工所では、それぞれのひとが、仕事をどう分担してたのですか〉

はっきりした分担でなく、小さな分担というんですね。例えば、私が旋盤やるとか、あるいはセーバー——片削り盤でいうんですけれども——これをやるとか、一年か二年そうしてやるわけです。そして、いちおうその期間が過ぎると、こんどは船舶に行って機械のエンジン、つまり内燃機関の分解、陸上げ、整備、点検、検査、取付け、復旧というようなかたちになっていくわけなんです。そのばあいには、多少グループを必要とするわけです。一人ではできませんで、まあ、三人、四人というような状態で仕事をやってるわけなんです。

私が入って一年経つようになってから、分担になってきました。こんど戦争サ入ってきましたんで、師匠から「ああ、最後の責任は俺もつから、とにかく、自分のやった仕事には責任もたなきゃだめだ」といわれるようになりましたね。セーバー仕事は誰だとか、旋盤の大きいものは誰、中ほどの仕事であれば誰、小物であれば誰というように、各分担責任に分けられましたね。「明日の朝、船が出航するんだから、今晚のうちに（仕事の段取りを）決めとけ。明日やるんじゃ、だめだ。寝る前に決めとけよ」といわれるような工程でしたね。

〈それで、都沢さんはどういう仕事を分担したのですか〉

加工のほうでしたね。エンジンのピストン関係、それからボーリング関係。

その当時のエンジンは、いまのような何千馬力というのはなかったもので、大きいのも、七十馬力くらいだったんです。いちばん最初、私が行ったときは、それが最高大型のエンジンだったんです。いまの言葉でいうと、セミ・ジーゼルエンジンというわけなんです。^{やきだま}焼玉エンジンと呼んでました。

焼玉っていうのは、エンジンを始動する前に、軽油バーナーあるいは重油バーナーで、この焼玉ていうのを焼くわけなんです。十分か十五分ぐらい、あっためるんです。あっためたところに燃料噴射させて、爆発させる。つまりエンジンを機動する前の段取りっていうか、そういう装置なんですね。そういうものを加工したんですね。

その焼玉エンジンの前に、注水焼玉エンジンていうのがあったんです。水と油をまぜて爆発させたんです。あったかいとこさ、水、霧状態でやると爆発力が多くなるために、馬力が出るんですが、機械の金属的な抵抗力がもちこたえられなかったんですね。それから改良されて、無注水焼玉エンジンという名前がでてきたわけなんです。これがセミ・ジーゼルと変わるわけです。これが、^ツ二サイクルなんです。その後、^{フオ}四サイクル・ジーゼルエンジンに代わってくるわけですね。

〈ピストンの加工というのは……〉

鉄工所から注文されますと、木型屋さんで、その機械に合った木型をつくりまして、そして鋳物屋さんにまわされまして、鋳物屋さんから出てくるものを、こんど鉄工所に移ってきますね。これを鉄工所内で、加工、仕上げに入るんですね。加工、仕上げしまして、船に取りつけ

をしまして、運転となるわけです。

その当時は、石巻が、こういう船舶にたいする技術というのは、いちばん進歩しておったんですね。むしろ、塩釜もありますけど、宮城県ではいちばん、東北ではいちばんでなかったでないでしょうか。

こういう仕事のくりかえしで、その合間に、風呂屋さんのタンクだとか、水産加工屋さんの機械類だとかを作ってくれ、修理してくれというのをやりましたね。そしていううちに、風呂釜なんかも作りました、鉄板で——。日本の鋳物屋さんも、戦争が入ってきたので、風呂釜を作る余裕なくなってきたんですね。軍事産業の一部の部品を作り始めてくださったんで……。

鉄工所の買収、山西造船へ

戦争が入ってきたので、うちの佐藤鉄工所は、山西造船の下請け負的な存在になってきたんです。山西では、消化しきれない仕事が出てくるんですね。佐藤鉄工所は、独自の仕事をやっておったんですけれども、山西造船さんも軍事産業に切り換えてきたもんで、⁷⁾（その下請け仕事が増えてきたために）たとえば風呂屋さんとか、水産加工屋の仕事はやれなくなってくるんです。山西から仕事をもらって、それで手一杯になってくるんで……。

それで、下請け負的な存在に変わってきたんですけれども、軍のほうからは、山西造船の工場じたいが（海軍の指定工場となるには）小

さいんでないか、こんな小さいとこ指定工場にできないという問題がでてきたわけなんです。そんでこんどは、山西造船が工場を大きくするために、佐藤鉄工所の買収にかかってくるんです。十六年の末期でなかったでしょうか。それで、佐藤鉄工所と山西との買収交渉が、ここで生まれてくるんですね。そして、私が、自動的に山西籍が移ってくわけです。

〈鉄工所にいたひとは、みんな山西造船へ移るかたちですね。師匠はどうしたんですか〉

佐藤和市さんなる師匠は、石巻造船という新会社に、移っていきました。石巻造船所、これは旧松谷造船を⁸⁾ 山西の社長さんが買収してつくったわけですね。もとの松谷造船を、石巻造船と名を改めたわけです。これは、石巻市門脇町にできるんですね。石巻の松谷さんてひとは、自分で造船所をやっておったんですが——合資会社でなかったでしょうかね——、こんど改名して、石巻造船株式会社社長に、山西の社長である西條芳次郎さんになっていったわけなんです。

松谷造船では（軍需工場として）やれないというので、西條芳次郎さんが社長になって、つくったんです。石巻造船所のほうでは、計画造船、運輸省の軍事物資をはこぶ運送船をつくっておったんです。現在の運輸省の指定工場に変わったわけですね。

新しい、この石巻造船もね、終戦になりました、もとの松谷造船に返すことになったんです。

7) 山西造船鉄工所は、大正 9 (1920) 年 3 月 23 日に石巻運輸造船株式会社として、西條芳三郎氏によって設立されたのであるが、昭和 15 年に現在の社名に改め、「あすへの飛躍」に備えた。昭和 16 年 12 月 8 日、太平洋戦争下に入って海軍の管理工場に指定され、戦時計画造船や艦艇船の建造にあたった(『山西造船鉄工所創立五十周年記念誌』, 1970, 14 頁, 参照)。

8) 昭和 5 年発行の『石巻商工案内』(石巻商工会)によると、門脇町にあった松谷造船は松谷悦右衛門の経営となっている。

〈師匠は、どういう待遇で、その新会社へ行ったんですか〉

こっちは、いちおう重役のかたちで行きました。株主で——。佐藤鉄工所の財産をもって、移動したのだから。

〈それで、都沢さんの兄弟子たちも、いっしょに山西に移った。すると、鉄工所時代に兄弟子が「逃げていった」というのは、山西造船に買収されたあとのことになりますね〉

ああ。山西に行きましたけど、兄弟子たちは、ふた月くらいで、この山西を辞めていきましたね、ぜんぶ——。当時、いまふうにいえば、任用試験テストっていうんだろかねえ、任用期間があるんです。兄弟子たちは、山西にふた月ばかりおったんだけど、その期間中のために、山西の籍には入りませんでしたね。

結局、東京あたりに出たかったんですねえ。若い人の夢っていうんでしょうか。

あとは、私だけ残ってしまったんですね。師匠の家に残りましたね、そして、ずーっと五、六年先まで山西に行ってたんです。私は、山西から兵隊に行ったんです。兵隊も師匠の家から出て、帰ってくるのも師匠のところに、帰ってきたんです。

私が、東京に出る（という意志があったとしても、そのこと）についてもねえ、ここに帰ってこなきゃならん、つまり、なんていうんだろかねえ、むかしのことでいえば宿命的なものがあったんでしょう。兄きが満州に行っておりましたもので、家の留守を守っているのは、姉一人になったんですよ。

〈都沢さんは、山西では、やはり任用期間が二

ヶ月あったわけですね。すると、本採用になったのは……〉

十七年の春ごろでなかったですかねえ。

〈山西に入って、最初の仕事というと……〉

だいたい同じ系列、仕事の内容はほとんど同じでした。

山西造船は、石巻造船でつくっている計画造船のエンジンをつくりはじめたんです。ピストンとか、一台の機械の部品を製作するようになったんです。いまの運輸省の、むかし海務っていった所で設計した、計画造船の図面をもらいまして、エンジンをつくったんですね。

〈本採用になって、職場はどこに配属されるんですか〉

第二造機というところで、船のエンジンのほう専門に、機械加工それから仕上げ、取付け、運転と、こういうの四係が集まっている工場なんです。あ、鋳物屋もありましたね、五つ部門ですか。五部門の、いまふうにいえば係に分かれるわけです。これを総括したのが、第二造機となっておりましたね。

〈そのころ、山西ではどんな船をつくっていましたか〉

海軍の駆潜艇つくってましたね。百トン型と三百トン型⁹⁾ 木造船でしたけれども、うんと速力の速い船でした。それには、爆雷なんか搭載するね。それから、機関銃、機関砲を搭載して、日本の沿岸警備で、むこうの潜水艦が浮上したときの、その攻撃用でした。潜水しているときは爆雷投下でした。そういう船を専門につくってました。

それから石巻造船でつくれなかった大型な、

9) 100 トン型としては木製駆潜艇（海軍）、300 トン型では木鉄貨物船（産業設備営団）を建造している。ほかに鋼製橋船（20 m・横須賀海軍工廠）、木鉄海防艇（200 トン・海軍）、木鉄哨海艇（15 m・海軍）等を建造していた。

四百トンから五百トンくらいの大型運送船もつくってましたね。むこう（石巻造船所）は、敷地が狭いもんで……。

当時の山西造船は、軍需産業一本槍でしたからねえ。民間の仕事も多少やっただすけれども、ほとんど軍需産業だったもんですから、もう隆盛の一途をたどったんです。山西造船は、鉄部門も木材部門も、どんどん軍のほうから資材が供給されますし……。

なかには、天皇陛下から拝領のマスト（の用材）なんかね、¹⁰木曽杉、木曽^{ひのき}の檜ですか、それを二本贈られて、マストをつくるあれなんかも入ってきて、造船所はまったく活況を呈して、各地方におる大工さんたちも、ぜんぶ船大工さんたちのほうに変わりましたね。

〈都沢さんの同期生というか、同じときに山西に入ってきたひとには、どういうひとがいたんですか〉

徴用が怖くて入ってきたひともあるし、あるいは酒屋の主人、あるいは雑貨屋さんの主人、そういうひとたちも徴用が怖くて山西のほうへ入ってきたんです。

同期生では、同年配が十人くらいおりましたねえ。いま臨床技師やっている小川正一、石巻の内燃機器にいる高橋昭、石巻の鳴瀬町で自転車屋やっている小野、相原というひと、それから元木っていうのありましたね。船の機関長やってる福島県の高橋良助、それから高橋直人っていうのありましたね——この人は亡くなりました。そういうひとたち、記憶にちょっと薄らいでるんですけれども、まあ十人ほどおりましたね。

〈その当時、とくに親しくつき合っていたのはどなたでしたか〉

木工の製材係におりました佐藤栄郎さんなんかは、同年輩で、長いおつき合いでずっときましたね。この方の家庭は複雑だったんで、山西の寮サ入っておったんですね。たまたま山西の寮と私のおった佐藤鉄工所が、向い同士なもんだったから、友だちだったんです。

私、涌谷のそういう（大喧嘩をした）事件あったもんで、石巻にきてからは、親とか兄きたちに心配させてはだめだということで、友だちづき合いも、それをきっかけにだいぶ変りました。いままでのような荒々しいことばもなくなったし、年齢的には分別のつく年に入ってきたし、友だちとは仲よくしましたね。とにかく、世間のひとに迷惑かけてきたから、なんとかよそのひとをあつといわせるような、「よく辛抱したな」といわれるように、あるいは辛抱してこのように直ったんだというのを見せてやりたいもんだと、そういうこと佐藤さんに話してましたねえ。

佐藤さんとは、復員してからも、将来の建設場の話とか、結婚してどのように土地を求め、あるいは家建てっかなって話ばかりでした。

召集、入隊

〈召集になったのは、いつですか。そのころのことをすこし……〉

二十年の二月ですね。

一年生のときから、「非常時」（の歌）をうたわされて、¹¹とにかく、国のために命をおとすのがいちばんの、親サも孝行であり、天皇陛下サも忠義であるということの教育が、一本槍でし

10) その帆柱は、産業設備営団から受注した「第一正幸丸」（300トン・貨物船・昭和18年）に使用されたという。

たから、それがあたりまえだと、思っておったしね。その当時、私、喜んで(石巻から涌谷の)家に帰ってきました。

涌谷の駅に、私のおふくろの姪で中沢^{はじめ}っておるんですけど、その家の旦那^{はじめ}さんで中沢^{はじめ}一^{はじめ}っていう人おって、私が帰ってくるっていうの聞いて、駅で待っておりましたね。「来だぞーっ」ていわれて、私、喜んで涌谷の駅から、そこの家まで(中沢さんといっしょに)走ってきましたね。喜んで――。

戦争のとき、召集かけたとき、いやだっていうひとがよくあったけど、いやだっていうひと、ほんとうにおったのかなあ。おったんであれば、これは最初から戦争に反対したか、あるいは親から戦争のこと聞かされて、なんかのショックで、いやなんか、とにかくあの若さで、戦争反対っていうひととは、ほんとに日本におったのかなあと思うくらい、現在も不思議ですねえ。私たちの年配であれば、そういう教育訓練されたひとですからね。それが、終戦になってあたりの、いろんな民主教育とか労働組合問題がでけますんで、前のこと忘れて、そのことだけが頭サ入ってしまって、しゃべるのが事実と違ってしまったんでないかと、私、いまでもそこに疑問をもってるんです。いまでも。

あの当時の訓練うけたひとで、年齢で十八、十九、二十くらいで戦争反対っていうことは、ほんとうだったろうかなと、いまでも思うんです。

私は、喜んで行きましたね。兵隊は――。

兵隊にいくとき、私のおやじも、中風に倒れておりましてね。それで、私、おやじに泣かれ

たんです。「かならず、生きてこい」と。こういうことばでいったんでないんですけど、「生きてこい」という、まあ、中風ですから、ことばが濁っておるから、よそのひとには、ちょっと聞きとれないんですけどもね。私は、

「チャン、死んでくるんだよ」

と、私はおやじのこと、「チャン」で呼んでおりました。それで、うちのおやじも涙ながしましたね。「かならず、生きてこいよ」ということいわれましたけれど、私は、まあ、

「戦争だから、生きてはこれないんだ」、ということいいましたら、おやじが、おんおん泣いてましたね。

男は、私ひとりになってしまったんです。そのとき、兄きはもう、生きてるもんだか、死んでるもんだかわからないから。満州のはてですからね。まあ、そういったようなことで、戦争サ入っていきました。

〈石巻では、まだ師匠の家におりましたね。涌谷へ帰るとき、師匠はなんと……〉

とにかく、師匠は「生きて帰ってこい」、といいましたね。「かならず、生きて帰ってこいよ」と。それで私は、師匠には「死んでくっから」ということは、いいませんでした。「はい！」といて……。おやじより恐いような感じしておりましたからね。

〈山西の会社では、召集にかかったひとを、どうやって送ったんですか〉

八八幡^{やっぺん}かけ、してくれました。まず、八幡さまのお参り。お宮で、八幡さまを八つかけると、武運長久だと。健康で、軍の手柄もたてるにい

11) 都沢さんの少年時代の口述のなかに、つぎのような憶い出がある。「学校時代も、一年生に入ると毎朝の朝礼で、非常時の歌をうたわされましたね。『へ非常時、非常時、国難きたれり……』とね。むろん奉安殿で、天皇陛下の御真影を毎日拝まされまして、校長先生、次席の先生が生徒を講堂に集められまして、全員でうたったんです。」

いんだというならわしがあったんです。会社の各職場、木工、鉄工、機械、造船、建具——その造船所内の各職場のうちから、なん人がずつ呼び出されて、そんで八八幡かけていただきましてね。

そして、餞別を各職場からいただきまして、日の丸の旗には、会社の社長はじめ、事務、支配人、あるいは同僚、上司の人の、そういうひとたちの名前をいれてもらいまして、見送りしていただいてね。その見送りが、学校の応援団のふうな、見送りだったんです。

〈入隊したところは、どこですか〉

静岡県の駿東郡清水村（現・清水町）沼津海軍工作学校¹²⁾というところに入りました。そこにおいて、飛行機の脚、油圧式の脚を専門につくっておいましてね。

工作学校は、ぜんぶ訓練ですね。工作学校には、光学、要するに飛行機から写真撮るとか、天測とか、魚雷雷撃——飛行機から魚雷を放してやるやつ、爆撃落とす訓練、あとは砲術ですね。それから、潜水もあるんです。軍艦、艦艇が、敵の弾が当たって破損したばあい、その修理作業なんですね。あとは、板金。それから、木工——船の部屋が壊れたばあいの修理、それに無線、陸戦隊の養成なんです。学校長は、少将でしたね。

〈期間はどれくらいでしたか〉

三月くらいで、みな配属になっていきました。〈その三月のあいだ、ずっと飛行機の脚をつくってたんですか〉

はい。私は、残されましたね。その飛行機の脚のほうに——。

そしてこんどは、実戦部隊として、岐阜県^かに郡戸田村第四方面隊工作部ってところに、行きました。そこで、脚専門につくりましたね。そこで脚つくってるうちに、アメリカのグラマンが墜落しまして、これが低空できてその第四工作隊サ送っている高圧線さぶつかったんです。鉄でつくった送電線の塔ありますね、あれに自爆したんですねえ。

あとは、まあ、空襲だなんだかんだをうけて、終戦になりました。

〈ずっと、この岐阜にいたんですか。戦地には行かずに……〉

配属の命令が下ったんですけれども、船がなくなっちゃったんです。名古屋まで行って、船に乗組む支度して……、ところが、何時間待っても船がこないんです。当時の、愛知造船の駆逐艦。一夜を明かして待ってたら、船がこなかったんです。あとからになって、船がなくなった、やられたんだと思いました。それで、またもとの第四方面サ移れ、というので、移ってきたんですね。

復員、福島県^{ふくしま}四倉港へ

八月の二十四日、兵隊から復員しまして、(石巻の)師匠のところに帰ったんです。そして、(涌谷の)実家にはひと月か、ふた月。ふた月おりませんでした。そのとき、うちの実家に農家するひと、おらなくなっちゃったんです。姉(二女・やえじ)が、お婿さん(春吉)もらいからです。当時、(実家の農業といっても)水呑み百姓という、田んぼもいくらも無かったんですが、二ヶ月のあいだやっておったところが、師

12) 海軍の横須賀鎮守府所属の術科学校として昭和19年6月1日設置。昭和20年7月5日廃止となっている。防衛庁防衛研修所戦史部編『戦史叢書・陸海年表』朝雲新聞社、1980年、522頁、参照。

匠から連絡ありましてね。

師匠に呼ばれまして、師匠がむかしたいへんお世話になった、石巻の南町に、伊藤貞之助さんて方があって、こんどそこに行ってくれないかといわれましてね。うちの師匠が、その方になりたいへんお世話になったということは、私も小さいときから、聞かされておったもんですから。福島県磐城市の四倉町ていうところに、その伊藤貞之助さんの所有する「不動丸」って船の本拠地があったわけなんです。

この伊藤さんて方は、^{かみ}加美郡^{なかにい}中新田の出身で、私の聞いている範囲では、十九歳のときに地主のうちに住み込みで手間取り——まあ、手間稼ごっていうんでしょうか——、そこに行きまして、農家ではだめだというので、おにぎり二つもって、石巻に逃げてきたそうです。そして、石巻の羽木村善也商店というのがあるんですね。その当時の塩特売、特約店ですか、あるいは石巻でも一、二を争う水産加工屋さんをやっておったところに奉公しまして、草鞋を脱いだそうです。そこで辛抱、最高に辛抱しましてね。朝に早く起き、魚市場に行って、魚一匹、二匹、市場のところに落ちておったのも拾っては売っては、夜は遅く寝て、辛抱したひとなんだそうです。

当時の伊藤貞之助さんのあだ名も、泥貞というのをもらいまして、こんどは、自分で独立したんですね。独立して、やっぱり、水産加工業やったんですね。家号は、株式会社④商店です。独立して、港一の財閥にのしあがったんですね。八十二だかで亡くなったんですけれどもね。それまでの子供は、男が九人、女が一人。

佐藤鉄工所は、伊藤さんの世話で工場でしたんです。この貞之助さんのお世話で、うちの師匠が資本だしてもらったんですね。

それで、私、兵隊から帰ってきてから、「この方にお世話になってんだから、この方の家サ何年か働いてけんねか」って、師匠からいわれましてね。そんで、伊藤貞之助さんがもっていた、四倉港の「不動丸」という船の仕事を、いいことばでいえば、「担当」てことになったんです。④商店さんは、お父さん〔貞之助〕は水産加工場やってあって、この「不動丸」は、次男の長介さんにやらせまして……。長男の徳男さんという方は、支那事変で亡くなっていたんです。

〈その不動丸というのは、どういう船だったんですか〉

いまでいえば、巻き網ですね。大きさは40トンクラス、百二十馬力で、五艘あったんです。五艘で一船団、いまのような進歩していない時代ですから、機械で網あげんでなく、五艘くらいで、人の手で網を、巻いて網をひっぱっては、^{まぐろ}鰯とったり、^{いわし}鯛とったりしておったです。

〈で、不動丸では、どんな仕事をやっていましたか〉

その当時は終戦後なもので、油もなにもなかったんですね。そんで、コールタール、クレオソート、重油、魚油——そういうのを釜で混合しまして、船のエンジンの燃料に使ったんです。そういうものを、私、やっておったんです。

〈ところで、復員して不動丸の仕事をやるようになったということですが、召集されたときは、まだ山西に籍がありましたね〉

山西には、戻ったんです。その時、いま常務やっている八木田謙治ってひと、当時は労務係長ですけれども、この方に、

「辞めねでけろ、やめねでけろ」

って、うんといわれたんです。

「やめないで、なんとかうちにていてけろ。会社にいたほうがいい。よそにいったって……」と

いわれてね。ところが私も、師匠の（伊藤貞之助さんのところで働いてほしいという話と、八木田さんの話との）、中にはいって、どっちからもういわれるし、迷ったわけなんです。正直なところね。

それでも（自分としては師匠との恩義が深いので）、

「あと（になって、また石巻に戻ったら）、また来るから、八木田さん」といって、十月三十一日付で辞めて、すぐ福島県に行ったわけなんです。

その八木田謙治さんから、私、福島に行っておった当時も、「辞めてこい、やめてこい」っていわれたんです。私は、「おまえは、退職したんでないよ」ってばかり、いわれておったですね。それで、不動丸は、二十六年までおりました。

〈その当時の四倉は、どういうところでしたか〉

四倉の町そのものは、ふんどし町と称して、一本の通り……ほんとうの海の男の町ですね。海岸には瓦工場があったんです。あすこは、海の砂を使って、屋根瓦をつくっておりましたね。瓦工場は軒並み十五、六軒あったんじゃないでしょうか。男は瓦工場か、磐城セメント工場、あとは船、この三つ（が主な働き場所）だったようです。

〈都沢さんは、伊藤さんの家に住み込みで……〉

はい。（私）一人だけですな。

〈従業員というか、乗組員はどのくらいですか〉

五艘で、六十人くらいです。若いひとばかりでね。年も十四くらいだったんでないでしょうか。

上の船頭から、船のデッキを洗うとか、いろんなこと教えられたんだけど、小さい子供だし、覚えも体も小さいもんですから、船頭のいうなりには、なかなかいかなかったんですね。そう

すると船頭、あるいはボスのひとたちは、海サその子供たちを投げたんですわね。十二月ころでも、一月ころでもね。

それでも、福島県の四倉というところは、親もおじいさんも、そのように育ったせいか、逃げるということ、しないしね。いまのことばでいえば辛抱っていうか、我慢っていうか、耐えたんです。上のひとのいうことは、よく聞く子供が多かったですね。むかしのひとは、よく、獅子が千尋の谷に落として、登ってくる（子）ば（か）り助けたっていうんですけども、あれとまったく同じなことでしたね。

そういう関係のほかに、^{もや}舳取り——船が岩壁に接岸するときも、やっぱり50メートル、30メートル離れたところから、細い舳、^{もやづな}舳網を取りまして、一月でも二月でも（その寒いときに）泳いでくるんですよ、岩壁に。

その細い網の先には、太いロープ、当時のマニラ・ロープが結んでおって、岩壁の舳取りの柱、——船着きの杭に結んでは、震えながら船の接岸するのを、待っておりましたものねえ。

〈その不動丸の船頭さんというひとは、どういうひとだったんですか〉

船頭さんは、佐藤慶次郎さんで方で、船頭やるくらいのひとですから、もう、几帳面な方でたらのめの最も嫌いな方でね。乗組員が、ぜんぶ、おっかねがってたんだもんね。怖がってたんだもんね。えらい気合かかった、船頭でしたね。「でんび、でんび」っていいましてね、おでこの出っ張ったひとのこと、このへんで「でんび」っていうんですよ。

当時の乗組員っていうのは、ぜんぶ刺青でしたからね。^{しほ}波で染めるとか、コールタールで染めるとか……。そして、この金玉の先を葉あるいは網の糸で縛りましてね、網をかついで砂浜

の網干し場にもっていったもんですよ。パンツでものはなかったもんだから、それだけ貧しかったんでしょね。

それをその、船頭というひとは、長い羽二重の着物ですものねえ。ほんと、船頭だけでしたね、絹の着物に、海のしぶきがあがったような（模様の）織物染めで、もう、ほんとにたいしたもんだなと、私びっくりしておったんです。船一般乗組員は、年に二回、木綿の反物をもらうんです。

当時、船頭さんとは、あまりつき合いはなかったですけれども、ひとつ年とる、二つ年とるうちに、うちに泊まったり、泊められたり、いまでもおつき合いしてるんです。その船頭さんは、亡くなったんですけれども、奥さんが達者なもので、四倉にいくと寄ってくるんです。喜んでおりましたね。

石巻の④商店のほうは、伊藤貞之助さんも、二代目の社長さんも亡くなりまして、いまは文助さんという〔貞之助の〕弟の息子さんが社長やっておりますね。

その四倉には、二十六年の三月三日までおりましたね。その日は、大雪が降りましてね。そのときの夜、お暇いただいて、石巻（の師匠の家）に帰ってきたんです。荷物なんかは、師匠のところに、置いておったんです。石巻地方も、大雪、15センチくらい降ったんですね。

〈都沢さんは、福島県四倉から山西造船に戻り、すぐに結婚なさったんですね〉

そうですね。二十六年の三月三日にお暇をいただいて、山西に行ったのが三月五日、そしてすぐ四月に結婚したわけなんです。縁の日でしたね。家内は旧姓菊地っていうんですけれど、うちの実家に隣りだったもんですから、うちの兄きから、「どうせなら菊地の娘、もらってしまえ

といわれてね。（佐藤鉄工所の）師匠が仲人をやってくれましてね——。その前の二十五年の年に、師匠（自分の家の）うしろに家を建てろっていわれまして、私が建てたんです。その当時、四万円でしたね。そのお金がね。私、四倉に行っておったとき、もらった給料を二千円だ、三千円だって、師匠のところに送って、オアネちゃん（奥さん）に貯金してもらっておったんです。私、十六年から現在まで、一ヶ月に一回か二回は、かならず師匠の家に行っておりましたが、師匠の奥さんは去年〔昭56〕の三月二十二日、師匠は今年の六月の十六日に亡くなったんです。

〈結婚した当初、生活の面で苦勞なされたということは……〉

（苦勞が）あったところではないんです。うんとありました。まず、食うに困ったわけですね。給料は、結婚した当時は、四千円くらいでしたがね。

石巻港の伊藤貞之助さん——その四倉に行ったときの大社長のところに、山西（の仕事を定時に）終わってから、魚、鮮魚を入れる箱をつくりに行ったんです。何百枚って板——横板、縦板、底板があって、それを組み立てて、釘をぶちつけて、一つの箱をつくるわけなんです。あの当時、二食ぐらいで生活した時代が続いたんです。うちの家内サは、むろん三食たべさせておったんです。

伊藤貞之助さんに、「ご飯たべてきたのか」といわれるんですが、まさか毎日「食べてこなかった」ともいわれませんか、（嘘をいって）「うん、きょうはたべてきた」というんです。山西は四時しまいでしたから、（ときどきは）三十分くらい遅らせて、四時四十分ころ（貞之助さんのところに）着くようにするんです。「きょうは、すこし遅かったな——」っていわれると、「うん、

うちサ行ってご飯たべてきたから」というふうにするんですね。実は、ご飯たべてないんです。ま、一週間のうちに二、三回はご馳走になるんですが……。

とにかく毎晩のように、夜の十時から十一時ころまで、その箱だけをつくってたんです。それぐらいやらないと、お金にならないんです。その当時の釘が、いまのような西洋釘でなくて、日本釘だったもんですから、ぶつけるのがちょっとしんどいんです。たまたま会社のほうにも忙しいときあるんで、そのときはお昼休みに自転車で行ってね、「きょうは、来れねえから」と断っておくわけなんです。そこのところには、朝から晩まで箱専門にぶつける女の人们がいるわけなんですから、私一人くらいいなくなつてよかったんだけど、そういうふうに連絡とりましてね。食うや食わずで、一年半くらいはやったんでないですか。

たまたま、うちの家内は、私が出社に行っているあいだ——これも後から聞いた話ですけど——自分の実家に行つてね、米だとか、馬鈴薯だとか野菜をもつてきて、私が出社から帰る前に、その夜の料理、あしたの米の段取りをしておつたそうです。(涌谷の)私の実家と家内の実家は、八十メートルか百メートルしか離れていないもんですから、うちの実家に見つからないように、線路伝いに運んで、汽車で石巻に帰つたそうです。

でも、私も弟子時代から、四倉の人たちの船をだいぶやっておつたもんですから、石巻にいるときは、四倉の人たちが魚をもつて行き来してたんです。魚をご馳走になって、魚はほとんど買わなかったんです。

2. 山西造船鉄工所の職場と経営

職場における人間関係

〈話は戻りますが、都沢さんは、昭和十七年の春に山西造船に本採用になりましたね。それで旋盤の班に入っていたということでしたが、その当時の旋盤の仕事というのは、どういうものだったのでしょうか〉

当時としてはですね。船のエンジンのピストンが、一分間に三百も四百回転も往復するわけなんです。それ、ストロークていうんですけれども、そのピストンにリングが入っておるもんで、そのリングで、シリンダーなるものが、竹の子を反対にしたような、逆に減るわけです。それをボーリングといって、その修正するわけです。要するに、シリンダーを削るわけなんです。それから、新しく鋳物で増えてきたピストンが、削られてオーバーサイズになりますから、そのピストンを、シリンダーにたいして新しくなきゃならないんです。例えば、30センチのシリンダーが3ミリくらいまで磨耗すると圧縮圧力がなくなるので、その太いところを削るわけなんです。

その削るの(ボーリング)も、ひとつのシリンダーが、三回くらい削られる。三回削るとなると、最高で9ミリ削るわけなんです。そうすると、ボーリングを三回やると、ピストンも三回新しくとり替えなきゃならん。ピストンが大きくなるわけじゃないからね——。

しかし、そういうピストンの加工を、年から年じゅうやってるわけじゃないから、こんどはウインドラス、つまり、船が岩壁にきたとき、その船をつなぐ継船装置ですね。錨を下ろしたり上げたりする機械、揚錨機の部品をやっており

ましたね。あるいは、船で使うワイヤーを巻きあげるとか、ロープを巻きあげるローラー。そういうものを……。

私、山西に入って、12 フート旋盤という大きい機械を使っておったんです。こまい〔小型〕のは、(佐藤鉄工所)の弟子時代にやったんですけども、(山西造船では)大型の、石巻地方の(の基準)でいう、大型の機械で、加工やっておりました。

〈その当時の第二造機部という職場では、機械の配置はどのようにになっていたのですか〉

〔ここで都沢さんは、工作機械の配置について、図4のような図を書いてくれた。第二造機部の

工場は二棟から成っており、都沢さんは北側の12 フート旋盤の担当であった。〕

〈そうすると、この第二造機部の職場では、班とか組などの作業グループはどうなっていたのですか〉

船のエンジンの機械を専門に、鋳物屋、加工、仕上げ、組立て、運転と五つの部門の班に分かれるわけです。これを総括したのが、第二造機となっておりました。私は、機械加工のほうです。

その班から、また小さな班が分かれるわけです。例えば、旋盤の班とか、セーバー〔形削り盤〕の班とか、穴あける〔ボール盤〕の班とか、プレーナー〔平削り盤〕の班、とかいったように……。

で、こんどは、組というのがあるんですね。機械加工のほうと組立てと合わせた組、組立てと取付けを合わせた組——こういうの合わせたやつで十五、六人のグループができるわけなんですね。そこに、組長がおるわけです。それで、組立ての班は、よその班とくみ合わせるというかたちですね。こんど、組と組が合わさって、その上には工場長、当時は職長ですね。青森県出身の滝沢という職長でしたかね……。

この組織は、私、辞めるまで、ずーっと、この組織で行きました。

〈その当時の職場の、都沢さんの上司という方、高橋金吾さんは、どういう役目だったんですか〉

旋盤の班長兼組長です。組立ての班長と、加工と組立てを合わせた組長と、ですね。

〈高橋さんは、どういう班長だったんですか〉

石巻の出身で、鉄工所関係から軍隊に行った、在郷軍人ですか、軍隊あがりの方で、かなり温厚でした。仕事もていねいに教えてくれましたし、あの当時の軍人あがりのひとはガミガミだっ

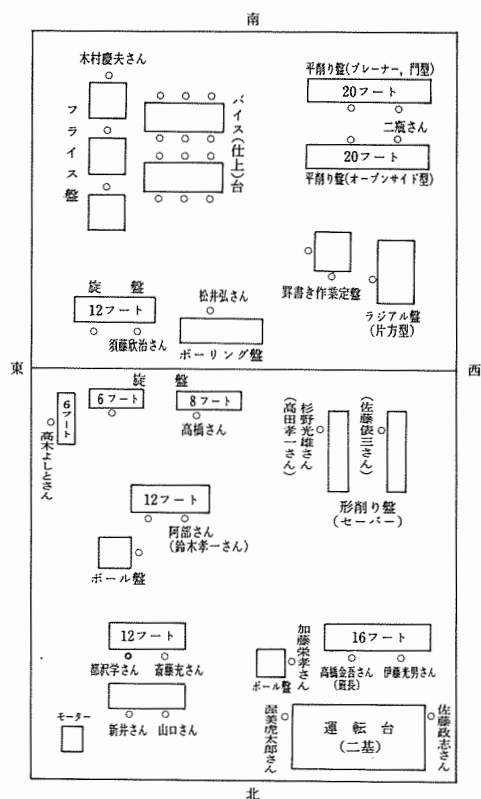


図4 山西造船第二造機部の機械・人員の配置 (昭和17~19年頃)

() 内は、戦後入職した人。

たんですけれども、このひとはほんとに温厚だったんです。

ただ、ふつう、軍人の経験のある班長というのは、技術的には私たちより悪かったんです。一等兵とか上等兵とかいうひとたちは、(部下の職工たちに) 気合いをかけるということを主力にしたんですね。

〈その気合いのかけかた、というのは……〉

私の記憶では、電気工事のとき——要するに、工場を大きくする夢においての、トランスとか電気設備の工事がはじまったんです——そのときに、片づけかた悪いかいわれて、第二造機のトイレのところで、往復ビンタ、パカパカやられましたねえ。技術的には私たちよりおちてるんですけれども、その気合いのほうは、軍隊式にやられました。

ただ、私は、そんなに叩かれはしなかったんです。というのは、私は(上司にたいして) なんでも(よく尽くして) やったために、案外うまくいったんですね。たまたま、(涌谷にある本家が) お菓子屋で、お菓子のもの、飴とか砂糖でもなんでも、私たち身内のものに分けてくれたんで、それを(上司などに) もって行って、その恩がえしってというか、ご馳走したりしたもんだから——。(だから) ビンタ殴られるときにも、同じ殴られるんでも、少なく殴られたというようにね。

その当時は境にして、鯉ぶしとお菓子の交換なんていう話がもちだされてね。涌谷のほうでは、鮮魚とか干ものなんか買えなかったもんで、そういうものとお菓子の仲介役したこともありました。山西の会社の偉いひとに、「都

沢くん、ちょっと」だなんて呼ばれると、水揚げの魚が造船所にくるもんですから、その魚をもってきて、「お菓子を頼む」、といわれたようなことで……。

〈そのほかに、当時の職場の上司というとき……〉

佐藤政志さんという、組長——。当時でいえば、学校の級長で、成績は石巻で一番だったんです。学校を卒業して、内務省に入ったそうです。いまの建設省ですか¹³⁾ 建設省工事というのは、いまの一級河川とか、特級河川とかいう川の橋梁つくったそうです。橋だとか大きな工事は、当時の内務省の直営でやったそうですが、石巻地方の橋なんか、ぜんぶ工事完了したので、自動解散して、山西に入ってきたそうです。

で、この方が軍隊に行ったのが、十八とかだったそうです。むかしは、待遇が伍長だけれども階級は上等兵という、伍長勤務上等兵というのがあったそうです。だから、上等兵でも伍長くらいの頭の、人を教えるていどをもっておったというひとなんです。これは、まず、何万人に一人しかいないそうですね。

そういうタイプのひとですから、会社にきても、そういった総括的な役目をしておった。朝礼でも、この方がいちばん長くしゃべっておったし、この人の教育で、各班長さんたちも、みな動いたんですね。

〈すると、その上の職長は、どなたでしたか〉

滝沢さん——。名前は忘れちゃったけれど、青森県の出身で、東京の工業学校出なそうです。なんか、東京のほうの鉄工所にいたのを、西條芳次郎さんがひき抜いたんです。そして、山西に職長として、入ってきたんですね。

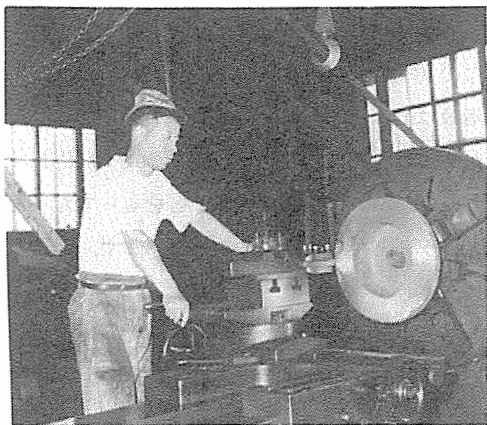
13) 正確には、建設省は内務省(明治6年設置)が占領軍の命によって解体したとき(昭和22年)に、新設されたものである。

〈高橋金吾さんのあとで、班長になったのは、どなたですか〉

今野正一郎さんて、山西の弟子で、のちに弟子あがりしまして、海軍の機械課のほうに入りまして、船のエンジンの技術を、マスターしたひとなんです。階級は海軍機関兵長だったんですが、肋膜炎を患って、兵隊を退いて、療養生活してから、山西に戻ってきたんです。

〈ところで、都沢さんが班長になったのは、いつごろですか〉

三十二、三年ごろでなかったでしょうかね。で、仕上係の係長になったのが三十九年だと思いましたね。



作業中の都沢さん（昭和30年ごろ）

その当時は、班（という組織名）は残ったんですけれども、組はなくなってきたんです。係長になると、こんど、その下請け業者も、その各班に一人か二人ずつ参加してくるんです。そのぶんも、面倒みるようになってくるんです。係長が管轄する班は、六つくらいありますね。甲板機械組立て、エンジン・ルーム内の機械、油圧配管、一般配管、エンジン・ルームの配管、電気関係と、こう分かれておりますね。

〈すると、都沢さんが班長になってから、上司に当る方といいますと、どなたですか〉

小林敏三さんて方が、中瀬時代——四十六年くらいまでの職長だったんです。

この方は、国学院高校の設計科出なんです。弟さんも、いっしょに入ってきたんです。弟さん、戦死したんですけれどもね。小林さんは、口のたつのは嫌いなほうでね。黙々とばかりひとりで、機械の設計——いろんな機械の付属品の設計では、もう1ミリの百分のなんぼもピタッと設計したひとで、神経的にも、こまいひとだったですね。

それで、自分の課のひと、あるいは工場のひとが、子供さん生れても、このひとは全員サ御祝儀だしたひとでね。小林さんがくる前の人は、誰もそういうことしたことなかったんです。私たちは、そういうのされてたもので、「あの人のためなら、すこし無理しても、いうことをきかなきゃない」というかたちになっていくんですね。なにかもらえばお返ししなきゃないのに、この人は、人にいただくてのは、うんと嫌ったひとです。

その反面、そういうタイプの人ですから、仮に、つくるものに失敗すると、「この仕事は、私がまちがって言い伝えた」とか、「（設計図を）まちがって書いた」といって、上司サ報告するひとだったんです。だから、（自分の部下にたいして）「お前が失敗したんだよ」ということは、絶対にいわなかったんです。ただ、一対一になったときは、「こんどは、気をつけてやれよ」ということは陰ではいうけれどね。失敗の責任は、かならず自分でとったひとなんです。自分の部下をいじめるとか、よその課から部下がいじめられるというのは、最も嫌ったんです。

私たちが失敗したこともあるですけど、仕

事ということになると、「小林さん、小林さん」で、かならず相談してね。仕事は、とんと堅くやったひとなんです。この人が、最後には、造船部生産部長までいったひとなんです。

〈都沢さんが係長の時代は、上司というと課長ですね。どの方ですか〉

八木四郎さん。高橋金吾さんが、山西に世話してよこしたんです。仙台の県立工業高校を卒業して、私たちといっしょに働いておったんです。それから、現場から設計課に行きまして、あと現業において課長代理やったひとなんです。

歳は私と同じだし、私たちの課長の課長だったけれども、私の師匠の工場で働いていたことがあるので、私なんかにも、うんと遠慮するところもあったようです。

大型船の建造

〈都沢さんは、兵隊から戻ってこられて、福島県四倉町で「不動丸」の仕事をなさってましたね。それで、その伊藤貞之助さんの会社を辞めて、山西造船へ復帰したわけですね〉

二十六年の三月五日から。前にいいましたね、山西の八木田謙治さん。八木田さんは、(私が四倉にいて、石巻に立ち寄ったたびに)「(山西)

帰ってこい、帰ってこい。暇やったんじゃないんだ」といわれてたんです。

〈山西に戻ったときの、会社の状態はどうでしたか〉

営業状態は、景気が最低のときに入ってたんです。四倉港から石巻の間を航海した船で、船の悪いところなんか、山西で修理しておりましたし、しじゅう行ったり来たりしてましたから、(二十四年くらいから景気が悪くなっていたことは)知ってたんですね。そのときは、なにせ、みな辞めていったんですね。景気が悪くて、人が減る一方だったんです。(辞めていったひとたちは)石巻でなく、静岡あたりに出稼ぎに行ったんです。大工さんたちは、暇とりましたね。その二十六年の三月二十三日、この日が山西造船の創立記念日だったんですが、¹⁴⁾景気が悪くて、行事を延期しておったんです。そして、六月に、三十周年の創立記念式典やったんです。

二十五年から六年にかけて、船(の受注)がなくてね。当時、「大寿丸」って船があったんですが、その船主さんが金なくなって、賃金が续かなくて、この船、放棄してしまったんです。

(ほかに)百六十トンの木造船も、やっぱり不

14) 昭和24年から26年にかけて、山西造船鉄工所は戦後恐慌と造船の不振で、受注が大幅に減退し、工事費の回収も進まなかった。昭和24年度は「新山丸」(鋼製鮪漁船・135トン)、「第二十八海鳳丸」(木製鯉鮪巾着網漁船・95トン)、「第二清徳丸」(油送船・10トン)の三隻、25年度は「第十一大慶丸」(木製鮪延縄漁船・109トン)一隻を建造したにとどまる。以後、朝鮮戦争を機に、資金・資材不足がどうにか克服されていくのである(『創立五十周年記念誌』、前掲、24頁)。

15) 創立三十周年記念式典。中瀬工場内で行なわれた。「当会社は創業以来、経済情勢の変遷により時に幾多の経緯と隆替とを繰り返したるも、代々の重役諸氏及び克く初代社長の遠大なる抱負とその意志を護って、一致団結、拮据経営実には春風秋雨三十年幸にして今日の業績を挙ぐるに至った。是れ偏に關係官廳御愛顧船主を初め江湖各位の絶大なる御指導、御支援と全従業員諸氏の精勤榮の賜にして本社の感謝措く能わざるところである。然るに事業の前途尚遠なるのみならずこれが盛大躍進を期せんとすれば更に新たな覚悟と大なる努力を要するは言うまでもなく、茲に創業三十周年を迎え、全社一同、社業の興隆を期して勇往邁進を誓うと共に併せて大方各位の御眷顧に報ゆべくいささかの催しを計画し記念行事とすることとした(『創立三十周年記念誌』、15-16頁)。

況で、放置したひとがあったんですね。それで山西の従業員は、遊びに入ったわけです。

そのときに、先だって亡くなりました、山西の会長である西條芳次郎さんは、

「心配することないから、七カ月ぐらいは、遊べ。遊んでも、お前たち〔西條家にやっかいになった子飼いの弟子たち〕だけは、食わせっから、しばらく遊んでけろ。(遊んでいいから)どこさも行かねでけろ」

って言って、仕事の無い毎日が続いていたわけなんですえ。

仕事がなかったというよりも、新造がなかったんです。修理のほうとか、木造船はあったんですけれども、その当時を契機に鋼船と変わっていく時代だったんです。その鋼船(の仕事)がなかったんです。要するに、全従業員をまかなうだけの金が入ってこないことですね。

材料は、当時の軍部の材料で、鉄板、丸棒なんかの鋼材が山ほどあったんです。その材料、電気溶接、エンジンなど軍からよこされた材料の在庫が山ほどあったんです。電氣量だけがくうだけで、あとは分割払いの何年先、といったようなものだったんですよ。

そうすると、別に現金化されなくても、この品物買った値段でやれば、もらったのも同様になるわけです。要するに、つくる船はなかっただけで、つくって、みなさんサ払い金は入ってこないけれども、その材料分は買わなくてもいいだけの材料は山ほどあったわけです。いかよ

うでも、給料払えたわけです。

人がたくさん辞めていったし、二十三年には四十人ばかりの首切り〔後出〕あったんです。だから、人数も少ないわけですね。少ないから、〔給料の支払いも〕楽だったわけですね。会社でも、少しくらい遊んでもいいと——。

たまたま(当時の社長であった)西條芳次郎さんは、戦争中につくっておった船、「桃生丸」と「海幸丸」ですね、それを建造中に終戦になってしまったもので、(それを完成させ、その船を使って)西條海運って会社をつくったわけなんです。¹⁶⁾この船が働いておったから、造船所は暇でも、そっちのほうで、なんとかやりくりしておったんです。

その二艘の船は、石炭運搬船でした。当時の北炭¹⁷⁾大映映画の社長をやった永田(雅一)さん、あの方の石炭を運んでおったんですね。それから、パルプも——。あの当時は、黒ダイヤのおかげで、最高の景気だったんですね。

それから、山西の社長さんは、賢明の策をとるひとだったから、そういう陰では、いろんな方法でなんとかその資金ぐりをやっておったんじゃないねえですかね。例えば、西條海運の船、また魚市場の社長でもあり¹⁸⁾石巻港湾の社長、みんな自分の独自の資本、不動産ですから、そこから集まった利益を、山西の残った従業員サ払うくらいのやりくりできたんですね。私たちは、社長は同じでも、よそから金をもらってことを頭サ入れなかったんですね。

16) 西條海軍隊は、後に西條芳次郎の妹の子供にあたる西條純司に受け継がれ、山西造船が会社更生法下に入る昭和52年まで続いた。

17) 北海道炭礦汽船。明治22年に北海道炭鐵鉄道会社として発足し、幌内炭山と幌内鉄道を政府から払い下げを受け、夕張・平和炭鉱の開発のほか、鉄道建設および社有船舶による回漕業を兼営した。『北海道大百科事典』(下)、前掲、641頁、参照。

18) 石巻魚市場。昭和4年6月創立。石巻の湊田町に本社を置き、中瀬と湊に売場を置く(『石巻商工案内』、前掲)。後に、魚町2丁目に移転している。

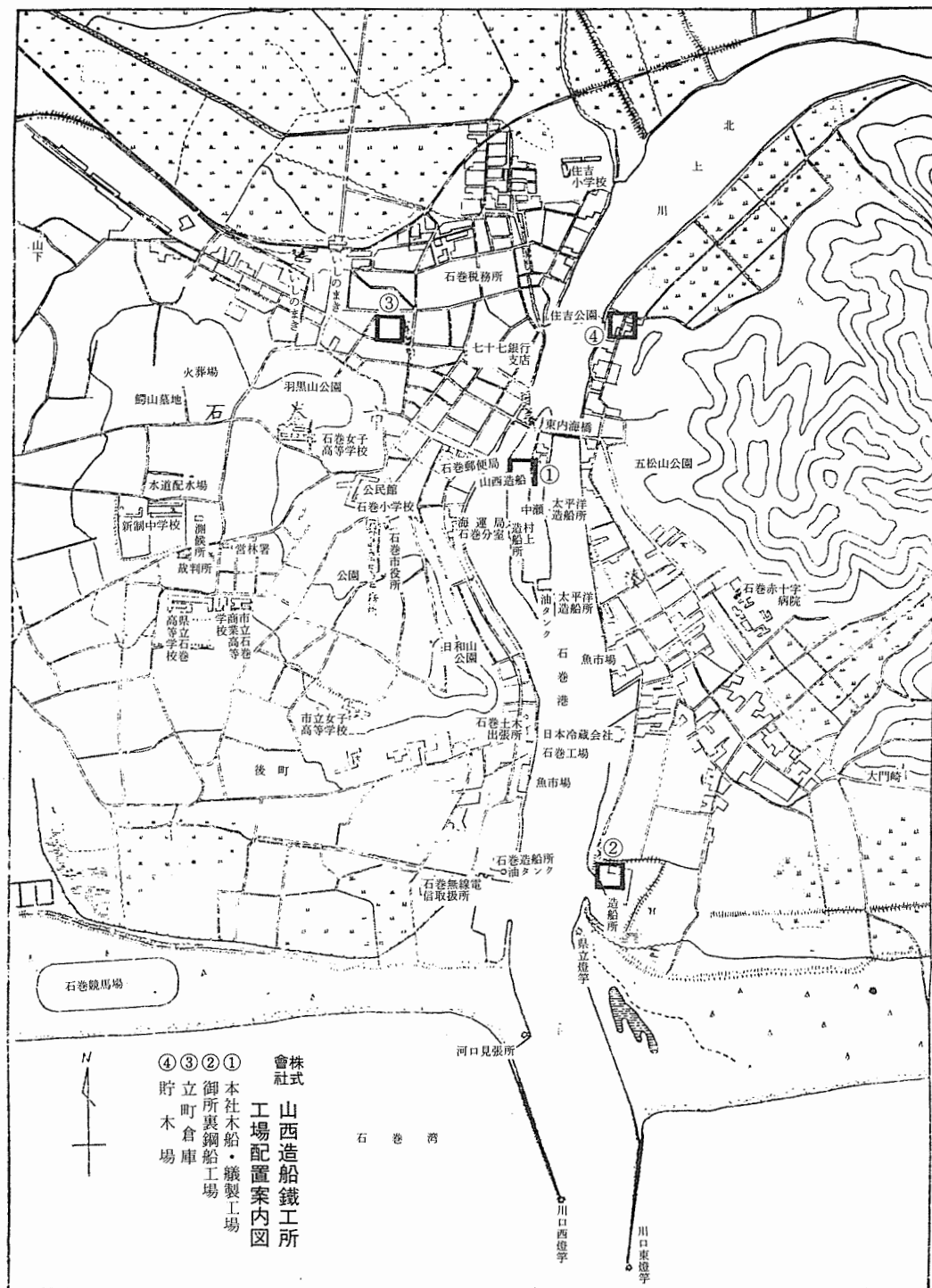
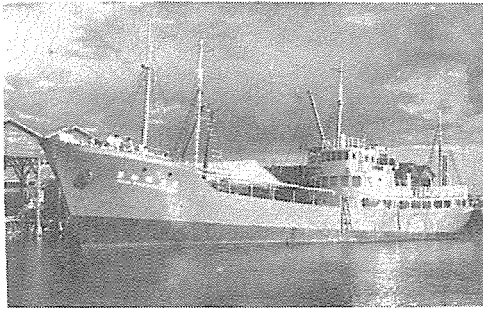


図5 石巻市街と山西造船鉄工所の位置—昭和25年—
(『山西造船鉄工所創立三十周年記念誌』より)

くしかし、昭和二十六年の四月ころからは、大型船の建造に入ってきて、山西の景気もよくなってきたのではないですか

あの「大寿丸」っていう(建造を放棄していた)船、これを神奈川県三崎町の福島福一さんて方がおりまして、「大寿丸」は、この福島さんの目にとまり「第十福生丸」と名を変えましてね……(鮪漁船として建造することになった)。



山西造船が戦後の不況から脱する契機となった「第十福生丸」(昭和26年)

これが320トン積んでましたけれど、石巻地方の船主さんは、「あんな大きな船つくって、なんにもならねえんじゃないか」というのでおったですけど、船が大きいので、インド洋に行つてやろうというので、インド洋で大漁、大漁やったんですね²⁰⁾これをきっかけに、金のもっておった船主さんは、こんど、大型化にでてきたんですね。それが、山西の当たる元になったんです。山西では、なにをやるときでも、この福島福一

さんを招待するんです。この造船界を、不況から立ち直らせてくれたひとで、どんなことあっても呼ぶんです。

そうしているうちに、年代がながれて、二十八年に入ってきたんです。二十八年に、宮城県(から受注)の「宮城丸」っていう船の建造にかかったんですね。宮城県には「大東丸」という水産高等学校の練習船があったんです。その代船に、「宮城丸」建造ということになったんですね。それで、「宮城丸」を建造しておったときに、「第十二明神丸」というのが、でてきたんですね。

当時の「大東丸」改め「宮城丸」は、220トン²¹⁾「明神丸」は370トン²²⁾これは鮪船です。これが当たりに当たって、全国いっせいに大型船の建造サかかったんです。

これからが、こんどは、山西の天下がはじまるわけですね。(山西でつくった)船が最優秀船だったために、全国から頼まれましたね。秋田県の「船川丸」(289トン)、神奈川県の「みうら丸」(160トン)、石川県の「加能丸」(152トン)愛媛県の「愛媛丸」、岩手県の「岩手丸」、福島県の「福島丸」ですか——全国の漁業練習船(や漁業指導船)専門に、山西が一手にひき受けたんです²³⁾

先代西條芳三郎と次男・芳次郎社長

〈山西造船の初代社長は、西條芳三郎さんですね。都沢さんは、この社長のことを覚えてます

19) 正しくは「第十福生丸」(鋼製鮪延縄船・311トン)といい、マッカーサーライン以遠の漁場開拓の第一船として、船主の福島福一が自ら乗船して出漁する。福島は神奈川県三崎町の漁業家。「大寿丸」は、山西造船の自家用船として設計・建造していたが、たまたま福島目の目にとまり、冷蔵設備をもつ鮪漁船として完成する。

20) 同船は、「毎回満船の大漁を続け、全国漁業家の大きな注目を引いた」という(『五十周年記念誌』、前掲、25頁)。

21) 「宮城丸」は鯉鮪船、昭和28年竣工。

22) 「第十二明神丸」は遠洋鮪延縄漁船、昭和30年竣工。

か>

私の聞いている範囲では、先代は宮城県桃生郡中津山字牛田の出身なんですね。四百年続いた旧家だそうです。むこう（西條家）では、いちおう豪族といっておりましたね。だから、もともと家柄がよかったようなんです²⁴⁾

宮城県の県会副議長なんかもやって、衆議院（選挙）にも出たんでないですかね。

私、小さいとき、西條芳三郎さんのお葬式見たことあるんです。お葬式は行列が続いて、小さな町、村のお祭りのような状態でした。千七百人、二千人数かい参列があったんでないでしょうか。たいしたもんだなあ、私、思っておったんです。ちょうど私の姉〔長女・みえじ〕が石巻におりまして、私が（佐藤鉄工所の）弟子になる前から、石巻に行ったり来たりしてましたから、おぼえてるんです²⁵⁾

うちの師匠の道路向かいが、西條芳三郎さんの自宅だったんです。それと、いまの石巻小学



初代社長 西條芳三郎氏

校の講堂付近が、西條芳三郎さんの製糸工場だったというの聞いてるんです²⁶⁾ ほんとの実業家に生れてきたようなひとなのでしょうねえ。このひとの子分で、織野俊吾さんてひと、おるわけなんです、その織野さんをつ分にして、とにかく、みんなのやっていない仕事、あるいは希望のある仕事は、どんどん伸ばしていったら、うまくないと思うと、ビタッとやめてしまうと

23) 昭和 28-30 年には、岩手県および宮城県よりプリストマン台船、北海道南海運から貨物船「第一石巻丸」（32 トン）を受注したほか、10 数隻の底曳漁船、油送船、鮭鱒船、旋網漁船などを建造している。口述にてくる練習練は、昭和 31 年-33 年にかけて建造されたものである。

24) 初代社長・西條芳三郎は、明治 2 年宮城県桃生郡桃生村字牛田で、西條勝治の長男として生まれた。勝治は県内で一番といわれる養蚕家で、蚕種製造・販売の篤農家であったという。芳三郎は、15 歳から仙台の山内道柄のもとで漢学を修め、17 歳に上京して明治法律学校に入学中退後、桃生村で製糸工場「躬耕園」の運営に参加したあと、桃生郡中津山村、本吉郡横山村、秋田県横手町等に製糸工場を設立した。石巻で最初の精米所を設けている。

芳三郎は製糸工場を経営する傍ら、木村亀吉の龍丸汽船会社の支配人となり、工場は妻たまいに委せ、龍丸汽船の発展に貢献する。同会社は、「登米丸」一隻をもつ登米汽船会社（山口仁太郎社長）と合併、芳三郎がその専務取締役となった。大正元年には製糸工場を閉鎖し、龍丸汽船会社の船舶・航路権・造船所の譲渡をうけて、その経営にあたった。大正 9 年には、資本金百万円の山西運輸造船株式会社を設立し、山西造船鉄工所の基盤を築いた。

西條芳三郎については『石巻市史』第五巻（昭和 38 年、191-192 頁）および『山西旬報』（社内報第 70 号・昭和 38 年 2 月 28 日以降）に掲載された、織野俊吾氏の「織野回顧録」にくわしい。

25) 西條芳三郎は、昭和 8 年 12 月 4 日に逝去した。都沢さんが 8 歳のころである。

26) 前掲「織野回顧録」によると、西條一家が桃生村字牛田から石巻に移転したのは、明治 37 年 10 月である。移転先は、当時の石巻町八ツ沢二十三番地で、都沢さんの口述にあるように、現在の石巻小学校の講堂付近に位置した。土地は山口甚之助という人の所有地で、借受けたもの。それ以前に、本吉郡の横山工場の火災に遭ったのを機に、製糸工場を石巻に移している。

というような性格で事業続けておったようですねえ。

〈その子分といわれた、織野さんと西條芳三郎さんとは、どういう関係だったんですか〉

織野さんは、芳三郎さんの番頭役、まあ、いまでいえば官房長官のようなかたちでおったんでないですか²⁷⁾私、聞くとおとによりますと、西條芳三郎さんのお父さん〔西條勝治〕の子、腹違いの子だといわれておったんですね。種違いの兄弟と、先輩からそう聞いておりました。

（芳三郎さんの子供である）西條芳次郎さんが社長時代には、一般従業員から、大久保彦左衛門でいわれて、「大久保さん、大久保さん」ていわれたひとなんです。人柄は、すごく良いひとで、ほんとに恩情的だったし、そのかわり、怒るときはもう、シコタマ怒ったひとですねえ。

〈その織野さんは、昭和十六年のころの記事では、工務課長となっているのですが、どういう待遇だったんでしょう〉

いまでいえば、社長付ですね。会社に籍を置いて、木材関係の仕事をやっておったですね。

（後の）西條容七社長の時代は、会社に常勤しない給料とりだったんです。この織野さんに、

息子〔織野俊男〕がおるんです。息子さんも、いっしょに勤めてまして、現図——船の図面をひいて、みんなにそれを教えながらやってきたひとですね。

〈西條芳三郎さんのあとの、二代社長は板垣金造さんですね〉

そうです。板垣さんは、北炭の東北総代理店したひとと、私、記憶してるんです。この人は、石巻の石巻販売所に、山のような石炭を積んで販売しておったんですね。石巻市中町、いまの中央通りに、倉庫と事務所があって、商売やっておったようです。

〔昭和八年十二月四日に西條芳三郎社長が逝去したが〕その息子である西條芳次郎さんが、まだ若かったために、（取締役であった）板垣金造さんを社長に迎えたようでしたね²⁸⁾その当時、西條芳次郎さんも、いろんな金融関係で、相当苦勞しまして、従業員に払うお金もなくなりましてね。実家の中津山牛田から、そのお金に値する米だとか味噌なんかをもってきて、給料の代償に与えたようですね。そういう時代に、それを乗り切っていくのに、金融関係がうまくなかったんで、七十七銀行の株主であり、実業家

27) 織野俊吾は、先の回顧録のなかで、「私は〔明治〕三十八年四月十日に奉公人として西條家へ来たので年は十三歳」と述べているが、生いたちには触れていない。ただ「日露戦争が始まったので私の家では〔高等科の〕授業料を納める処か食って行く事も困難となり西條家へ奉公に來たのです」と言っている。

この奉公人について織野は、つぎのように書いている。「奉公人になれば年限兵隊検査迄で契約するのが普通で今度は検査終れば、あと一年間は御礼奉公しなければ、あれはろくな者でないなどと云われるのです。……奉公人となれば、どんなにつらい事でも主家より命ぜられれば二言と云わず必ずやらなければいけないのです。寒くなれば奉公人と云う者は旧暦の十月二十日の恵比寿講前に足袋も綿入も主人より渡されないで、いくら寒くても我慢するのです。」〔西條家の奉公人は五人居たのですが主婦さん〔芳三郎の妻たまい〕から一番私が用いられたのです。其のため夜など買物に主婦さんが出かける時は必ず私が御供にされて買物を持つてましたが用が終ると必ず仲町に現在もある高橋そばやの二階でそばを御馳走になったものですが、そばを食べた事は必ず誰れにも話すと云われるのです。……或る時主婦さんに連れられ用達に出懸け今度は東京庵へ行って鍋焼うどんを御馳走になったのです。私は生れて初めて食った鍋焼うどんの事は五十年後の今日も忘れられないので書きました〕（『山西旬報』80号、2頁）。織野は、西條芳三郎のことを「主人」と呼び、自身は「番頭さん」といわれて、山西造船を名実ともに支えてきた人物である。

であった、板垣さんが社長兼任になったわけですね。

〈山西造船の『創立五十周年記念誌』によると、板垣さんは、昭和八年十二月八日の役員会で、社長に推挙され、西條芳次郎氏は、昭和十年四月に、専務取締役役に就任しています。それで、この芳次郎さんが社長になったのは、昭和二十年四月ですね。芳次郎さんは、次男ですが、西條芳三郎さんの御長男もいたわけでしょう〉

なんか、小さいとき、亡くなったっていうのは、聞いてるんです。

〈都沢さんが山西に復帰したときは、芳次郎さんが社長でしたね〉

はい。西條家の家は、道路向かいだったし、私たち、おいしいものつくったときなんか、(社長から)「もってこい」なんていわれて、もっていきましたんで——。

西條芳三郎さんの奥さん〔妻・たまい〕、あの人が、やっぱり相当なひとだったんです。芳次郎さんとしては、その奥さん、お母さんが、いちばんこわかったようですね。

それで、芳次郎さんていうかたは、あだ名はダルマといわれた社長さんですけどね、危い橋は二度も、三度も、四度も、五度もたたいて渡るっていうような、堅実なやり方だった人ですね。板垣さんが(社長を退いたのは)、山西(の経営状態)が、いくらかよくなってきたというので、山西は(先代の)芳三郎さんが建設した

会社であるから、自分が身をひいて、芳次郎さん、専務さんが、当然社長になる、というので就任したわけなんですね。



三代社長 西條芳次郎氏

で、西條芳次郎さん、その人も、お父さんの代から、揉まれに揉まれて、苦勞してやったわけなんです。何百人という従業員をかかえての、揉まれかたでしたんでね。むろん、自分の全財産を賭けて商売をやるんだけども、仕事なんかなかった時代は、売り先のない船をつかって、従業員にいくらかでも働かせて、(自分の経営する別会社の利益で)給料を払っておったということが、一年か二年くらい続いたんでなかったでしょうかね。

その前は、「仕事がなくでもいいから、七カ月くらいは仕事なくても大丈夫なんだ。給料くれっから心配すっことねえ。どこさも行くだねえから」といって、給料くれておったひとなんです〔後出〕。

28) 先代芳三郎が65歳で逝去したとき、その次男である芳次郎は35歳で、社長は板垣金造となったのであるが、芳次郎が事実上、事業を継いだ。その当時のことを、芳次郎はつぎのように回想している。「そのころは、所謂昭和7、8年国を挙げての未曾有の不景気時代で経済不況は絶頂に達し、銀行倒産、企業、個人破産連日数知れない国情のもとにあった時でもありました。会社経営も亦例外ではあり得ません。また運輸部門もバス、トラックの発達による北上川筋の航行不振並びに牡鹿沿岸の巡航も巡航船の事故等による打撃、更には造船部門における宮城丸建造工事の大赤字とが重なって経営は最悪の事態に至った時でありました。大黒柱の父を喪い、まさに危急存亡の時、最早万事休するの感がありました。この時は会社にとって、私にとっても生涯最悪の苦境に立った時でありました」(『五十周年記念誌』、前掲、67頁。)

その当時は、(組合の分裂騒ぎがあって、その後)組合が落ち着いたとはいえ、(組合を結成した当初の)第一組合〔分裂後、崩壊〕の人が残っておったもので、そういう人たちに対処するのにも、うんと苦労しておったですね。

私たちが(復員してから)入った、二十六年ころは、三十年ころまで、景気が悪くて、たまたま建造中の船も、船主さんのほうでお金なくなって解約されたというようなことで、船も二年くらい、ペンキも塗らないで、まっ赤に錆びて、北上川につないでおったんです。従業員のひとは、それを見ながら、自分も生活しなきゃならないというので、辞めてったひとがずいぶんおるんです。

山西が景気よくなってきたときに、山西に戻ってきた従業員もおるんです。それで、山西に再度就職というときに、西條芳次郎さんは、「(会社が苦しいときに)辞めないでいてくれた人は、会社の経営者としては、恩人である。そういう恩人にたいしては、給料もボーナスも、全力を尽くして最優先として待遇するが、一回辞めてって、景気がいいとき戻ってきた人にたいしては、扱いが別なんだ」ということを、組合にも相当説いたひとなんですね。

西條芳次郎さんの奥さんも、社長を、山西造船をよくしてもらわなきゃならないんだというので、従業員にタオルや靴下をくれてやるとか、お菓子を買ってくれたひとなんですね。結局、家庭的な会社だったんですね。面倒見が、最高よかったんです。それですから、従業員の人はみんな、「オアネちゃん、オアネちゃん」て慕っておったんです。

いまのような、経済が伸びきっているときと違って、満州事変、支那事変、大東亜戦争ときで、物のなかった時代買ったものも、みな分

けてやっておったようですね。

西條芳次郎さんも、芳次郎さんも、大工さん、鉄工のほうの棟梁級のひと、それから機械工場の棟梁級のひとを、かならず三人ないし四人は、がっちりおさえておったひとなんですね。そして、つねに自分の家サ呼んでおったんです。なにをやっても、(職場の)トップをがっちりおさえておけば、その下にいる人も、まちがいなくおさえられるという、徳川御三家的なことをやったひとなんですね。

〈西條芳次郎社長が、従業員にたいして、とくにうるさく言っていたことなんかありますか〉

いってましたね。時間をかならず大切に守れ。作業する時間、人との約束の時間を守りなさいと——。会社の中瀬にあったときに、社長室が二階だったんです。二階のほうからは、構内がぜんぶ見えるわけですね。

そうすると、朝に、お昼どきに、終業のときとね。(終業のときは)作業服を着替えて、手、足、顔を洗ってタイムカード押すときね、仮に四時に終業で、四時二分に押すでしょう。社長は、「二分という時間は、どこにあるんだ。四時まで働いて、自分の道具を始末して、そのへんをきれいに掃いて、手を、顔を洗って、服を替えて、自分のお弁当をもってカードのときまで、何十人か並ぶ。その最初の人が、四時一分とか二分なんてことはねえんでねえか。何時にやめてんだ。時間を守れ」と、まあ、商売的にいうんですね。「会社としては、最高の労働と最大の技術でもって、あなたがたに報酬を払ってるんですよ。それを、早く時間やめてきたんでは、最大ではないんだ」というんです。

で、早く仕事をやめていても、タイムカードのところに、いちばん最初に行くの誰もいやがってるんですね。結局、(社長からうるさく)いわ

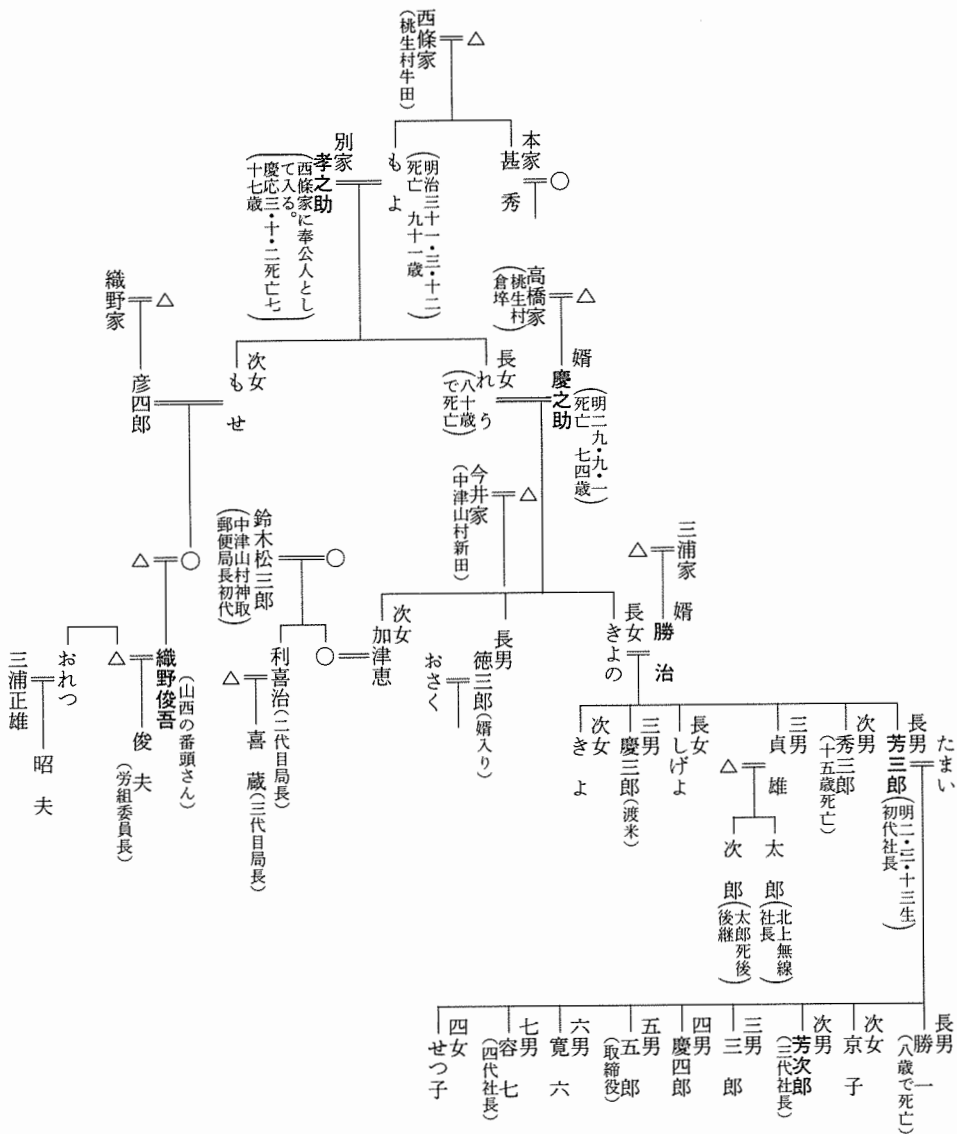


図6 西條芳三郎の生家と親族（「織野俊吾回顧録」等をもとに作成）

れると注目されっから、あちこち、よそ見しながら、十番目か二十番目あたりに行くのを待ってるわけです。

西條家と経営陣

〈西條芳三郎さんの子供では、芳次郎さんのほかに、山西に関係していたのはどなたですか〉
五男の西條五郎さんという方——。その人が、

板垣金造さん、そして西條芳次郎さんが社長の当時の支配人〔取締役〕でしたね。この五郎さんは、後に山西を退きまして、塩釜に東北伸鉄という会社を設立したんです。

それから西條寛六さんっていうひと、おるんです〔後出〕。寛六さんの下に、西條容七さんっていう、いま健康を害しているひと、（現社長の片倉七郎氏の）先代社長ですね。容七さんは、芳

次郎さんが社長時代に副社長、そして芳次郎さんが会長になって、社長になったわけです。

〈芳次郎社長が芳三郎さんの次男、五郎さんは五男、容七さんは七男ですね。三男と四男のかたは、なにをやっていたんですか〉

（三男の）三郎さんは、山西造船所に納める塗装のペンキ、塗装品販売しておったんですね。販売所も山西の造船所内にあったんです。塗装関係と、現在は三郎さんが亡くなって、奥さんが消化器、消化設備も販売してるんです。

（四男の）慶四郎さんは、西條外科でいって、お医者さんをやってるんですね。

それから女の子〔長女・よし子、次女・京子〕もおるんです。

〈三代目の社長にあたる西條芳次郎さんには、子供はいなかったんですか〉

子供はおらなかったんです。西條純司さんというひとがおったんですけど、この人は妹の子、甥っ子ですね——この方を、会社に入れたんですね。

この方は、家がよいせいか、東京の大学を卒業して、山西に入ってきたようですけれども、山西に入る前は西條海運のほうにおったんです。山西にきて、何か月かたって係長にいたしましたね。小さいとき、私も子守りのまねごと、おんぶしてやったりしたことあるんです。柿沼という総務部長は、部長命令で（西條純司さんのことを）「純ちゃんと呼んではだめだ。西條さん、と呼びなさい」といわれてね。各職場に、その回覧がまわったこと、あったんです。

ところが、この純ちゃんは、伯父親である西條芳次郎さんの苦勞もわからないでおったせいか、フォードなんか外車を乗りまわして、自動車狂のような状態になりまして、芳次郎さんの家を出されたんです。そして、別に家を建てて

もらって、その家も棄てて仙台方面に行ったりして、奥さんも泣いたんでないですか。それで、最後は、西條家を継ぐことなかったんです。

三年ほど前、西條芳次郎さんが亡くなる前に、（純司さんは）西條家のお墓を、石巻の墓地から、芳三郎さんの実家である桃生郡中津山牛田に移転させたんです。「俺は、牛田に帰るんだ。親父〔芳次郎さん〕のときさ、帰るんだ」といって——。いまは、西條芳次郎さんは亡くなりました。

〈そのあとは、西條容七さんが後継者になったわけですね。容七さんは、どういう社長でしたか〉

この方は、東北大学の土木科を出まして、陸軍少佐となり、東京都神田猿樂町に自宅がありましてね。（山西造船が）本所あるいは亀戸あたりの工作機械を購入するにあたって、軍籍だったけれども、その仲介人のようなかたちのものをやったようですね。

芳次郎さんと容七さんを、よく比較するひと、あるんです。ところがやはり、小さいときからそういった（父親の先代芳三郎社長の）ところで、長く生活した芳次郎さんとは、私たちみても、雲泥の差がついておったようですね。芳次郎さんは兄きであり、人に揉まれ、いろんな苦難な道を歩いた関係上、ぼんぼんで育った容七さんとは、人柄的にも、商売的にも、格段の上のようでしたねえ²⁹⁾

芳次郎さんは、さっき言った、西條御三家のようなひとをおさえておったけども、西條容七さんは、それをやらなかったったんですね。兄きのやった商売だから、あるいは、お父さんのやった商売だから、（会社の要所要所にいるひとを）自然に、俺の子分コだというような見方でなかったんでしょうかね。自分では、直接（片

腕となるようなひとを)おさえるってのはなかったんです。

ただ、一人だけおりました。柿沼さんて方が、芳次郎さんの代から銀行関係をやって、いろんな裏判だとか、手形だとか、銀行係(担当)のようでしたね。

この人も職業軍人で、本部付陸軍総長しておったひとなんですけど、最初は船架で木工がついで、船を上げたり下げたりしていた仕事なんです。そして、機械工場の記録係をやって、経理にまわったんです。経理係長やって、銀行係をやって、常務取締役総務部長に出ていったひとなんです。

この柿沼さんの下に、芳次郎さんの子分というか、子分と子分であった片倉七郎さんがおったんですね。柿沼さんが亡くなって、営業ビカーといわれた、その片倉さんが、運よく上昇気流に乗ったような状態なんです。

西條芳次郎さん、容七さんの時代³⁰⁾四十八、九年ころのオイル・ショックまでは、(山西は)全盛ムード、破竹の勢だったんです。むろん、東北、北関東から北海道までは、山西造船にまさる造船所はなかったんです。船の建造量もトン数量もね。

〈西條芳次郎社長の、いわば晩年になって、五十二年ころから会社の合理化、そして例の倒産騒ぎ——会社更生法申立て、という事態になったわけですね。それは後でうかがうとして、現在の片倉社長なんですけれども……〉

この人も、職業軍人だったんです。だから前社長の西條容七さんとは、お話がピッタリ合うわけなんです。片っぼう(容七さん)は中佐で終戦を迎え、片方(片倉さん)は大尉で、終戦になって少佐になってきたんでないですかね。

そういった、軍人というところからも、まあ、忠誠を誓うっていうんでしょうか、忠誠主義だったので、そこがたまたま田舎の、この石巻地方で、都会とちがったムードが生れてきたわけなんです。容七さんは、(前は造船部長として)芳次郎さんに忠誠を誓ってきたし、片倉さんは、軍隊で——。いまの社長も、そういう忠誠主義を植えこまなければ、たとえその人に高額な給料与えても、会社のためには微々たる給料というふうに思ってるんでないですか。

片倉さんは、営業の^{ひら}平で入ってきたわけですが、容七さんも軍人で一階級しか違わないから、(片倉さんを)そう粗末もできないわけなんです。片倉さんは主計課の軍人だし、営業的な才

29) これら西條家の人びとに関して、「織野回顧録」にはつぎのように記されている。「西條芳三郎氏一家とは主人と妻たまい長女よし子次女京子次男芳次郎三男三郎女中一人で計七人です。長男勝一氏時八歳にて死亡四男慶四郎氏はお母さんの実家にいるので石巻へは二、三年あとで来ました。現西條外科です」(「山西旬報」71号、昭和38年3月8日)。「何せ西條家としては、子供長女よし子、次子京子、次男芳次郎、三男三郎、四男慶四郎、五男五郎、六男寛六、七男容七、四女だと思いがせつ子、此の人は末子で都合九人の子供を抱へ…」なお、寛六は「住吉町の小堀一郎家へ里子にやられ五年位で家に帰ったと思われ」、容七についても「里子にやりたいが中々里子を取る処がないので困って居る内住吉の小堀さんが来て横町の島津古着店で小供をなくし間もなく亭主も死んだそうだから、その人へ頼んだら如何ですかと相談に来た」とある。島津なる人物は、西條の横山製糸場で芳三郎に使われた人であり、その妻・島津まついは容七の乳母として西條家に迎えられた(「山西旬報」79号、昭和38年5月28日)。

30) 西條容七は、芳次郎社長の昭和20年から取締役の地位におり、当社最初の副社長制を設けた昭和45年1月に副社長となり、昭和47年6月社長に就任した。専務は月本泉、常務は片倉七郎、山本武、梅木春見の諸氏。

能はあったらうしね。で、営業は片倉さんでなければだめなんだと、一般従業員まで、浸透したわけなんです。それで、係長、営業課長までいくわけです。倒産のときは、大曲工場の工場長やって、いまの社長に就任したわけなんです³¹⁾。

この社長さんは、軍人時代からの経理関係(が専門)なもので、仮に百円でできた物は、物価は高騰してるけども九十円にしてくれ、さらに八十円に下げましてね、現在の業者のひとは、しびれを切らしているわけなんです。「よそではね、(八十円くらいの値段で)業者が入りてえ[山西造船と契約したい] てとこ、なんぼでもあるんですよ」と、業者にかけてね。結局、20パーセントは会社の利益にするんですね。

片倉さんはこの山西の倒産、更生下におかれている山西造船を、最短距離で出発するのには、これ以外にないという、つまり会社再建の最大功労者じゃないですか。現在は、グリーンも増やす、船台も増やす、いろんなお得意さんも増やしてね。

ま、とにかく、一も二も、山西造船を再建しなきゃならないんだと、俺が社長だから、ワンマンでもやるんだと——。そのワンマン(経営)は、中小企業の最も得意とするところで、西條芳三郎さん、芳次郎さん、容七さん、片倉さんと(歴代の社長は)ワンマンぶりを発揮しましたね。これは、一歩まちがえば、大変なことになるんですけどもね。

社長は、(会社に)背広着ては、ぜったいきてませんから、もう、朝から晩まで作業服のまんまですからね。ふつうの船主さんに顔出すばあ

いも、作業服のまんまです。

〈話を戻しますが、西條芳次郎社長の時代に、そのとりまきの経営陣、取締役がおりましたね。柿沼信基さんのほかに、梅木春見さん、山本武さん、古谷敬二さんなどが……〉

梅木さんは九州の出身で、海運局のエンジン関係の検査官しておったんです。それを、西條芳次郎さんが、ひっこ抜きかけたんです。この方が北海道方面におったときに、北の稚内、網走、釧路——そういったところの船主さんとながりあったので(それを知って)、社長がひき抜きましてね。それで、山西の造船部のエンジン関係ね——電気関係から、配管、エンジン——こういう型の船には何馬力あればいいんだというような仕事を、その梅木さんがやったんです。

梅木さんは、倒産時の責任をとって、辞めていった人なんです。そのときは、造船部長兼設計だったんですね。

梅木さんと山本武さんは、同じ海運局の検査官学校を出て、先輩後輩の間柄なんです。海運局の本庁勤務でなく、塩釜とか秋田とかいろんな出張所、出先機関の検査官をふりだしにきたひとなんです。山本さんは、いま技術担当部長やってますけれども、いろんな設計の専門で、知らないものないくらい詳しいんです。

西條芳次郎さんは、この人の功績を評価して、海運局からひき抜いて、自分の会社の船体部次長、部長に据えていったんです。社長さんは、「あすこの管区には、誰がどのような業績であるか。あの人と船主さんは、どれくらいつながりをもってるか」てのを、ちゃんと調べたひとなんです。

31) 片倉七郎は常務取締役から、昭和55年8月社長に就任。専務は芳賀幸男、取締役は八木田謙治、三浦巖、山本武、鎌田英一、奥田豊之介の諸氏。

いままでの山西造船ですと、各船主さんとのつながりが、宮城県だけで手一杯だったんです。それが、こういう山本さんとか、梅木さんとかをひき抜きましてね、北海道から、愛媛県から、京都のあたりまでの船主さんを、もつようになってきたんです。

それから、古谷敬二さんは、西條芳次郎さん直轄の子分コといわれたひとなんです。銀行関係におったひとですから、金の操作をうんと容易にやれる、というようなことで、(山西に)呼んだんでないですかね。最後は振興相互銀行の社長になったんですね。

芳次郎さんは、まず、人材集めは最高(に上手)でなかったでしょうかね。かならず、(組織の)どの部分にも、自分の命令したことを完成させる人材を置いたひとなんです。西條芳三郎さんも、そういうことをやったつうのは聞いてるんですが、実際に目で見、聞き、そのやった(ひき抜き)交渉については、相当なものでしたね。

内弟子と通い弟子

くさきほど、今野正一郎さんが山西の弟子といわれましたが、その弟子というばあい、どういう待遇のひとをいうんでしょうか

弟子というのは、内弟子と通い弟子と、こう二つに分けられたんですね。山西の西條芳次郎さんのところで、ぜんぶ寝起きしておったひと、これが内弟子。自分の家から、生家から通った弟子が通い弟子。今野さんも、内弟子なんです。弟子は弟子でも、会社の優先的な方法からいけば、その内弟子を主力にしたんですね。西條芳次郎さんは、それサ、うんと力を入れたひとですから……。つまり、西條御三家(の体制)をつくりあげるのに、それをやったんですね。

〈その内弟子は、要するに西條宅に住み込みでいたわけですね〉

中瀬の西條芳次郎さんの家は、総二階でね。芳次郎さんの住んでいるところは下で、内弟子は、同じ屋根の下の二階に住み込みですねえ。自分が監督、管理しなきゃねえもんですから、別棟サは入れなかったんです。朝も、夜どこサ遊びに行くのも、すぐわかるようなところに、階段ができておったんです。むかしは、鉄工所を経営する主人ていうのは、大きな家を構えておったんです。

後輩は先輩の床をとり、夜は背中を洗ってやる。うまいものを自分で見つければ、点数稼ぎっていうか、先輩たちサ分けてやる。自分の後輩にもいくらかずつ分けてやる——といったようなことでないど、同じ部屋、襖一つおいただけの団体生活に慣れないんですね。慣れなきゃ損する時代でしたんでね。

内弟子のなかには、芳次郎さんの家から、学校サ通ったひとあるんです。織野俊夫さんとか、三浦照夫さん、照夫さんの弟で三浦弘という方——。小さいときから育てたんです。学校も、一年生からね。頭の良い人は、上級学校、旧制中学まで行けたんです。

(西條家に住み込んでいる)弟子たちが、うんと多いもんだから、この人たちの食事をつくるのも、たいへんなわけなんです。当時、アネヤさんて、お手伝いさんが四人も五人もおるんです。山西の従業員の奥さんになったひと、何代か前の弟子の奥さんか娘さんなんか、賄いをやるわけですね。職人でも、お昼ごはんだけは、芳次郎さんの家で食べるひとがおったんです。

お父さんか、お母さんのどっちかが、山西に関係しておった人は、かならずといっていいくらい、内弟子にさせられたわけなんです。西條

芳次郎さんが、「おまえの子供を内弟子にしろ。おまえたちは、俺たちのなに〔経営のやり方〕もよくわかっているだろう」というようなことで、まァ、忠誠の第一歩を、そのようにしてやってたわけなんですわね。(弟子たちが)家に帰っても、社長から「おまえは将来、こっちのほう〔仕事の責任者〕にやっから、一生懸命やってもらわなきゃ、困るんだ。よその人と違うんだぞ」というような教育を、吹きこまれるわけなんですわね。

なんていうのか、ひいきてのがありましてね。何代も、それを続かせたわけなんですわね。だから、この人たちは、組合が生れても、(会社にたいしては)反対だとかなんとかっていうことは、ほとんどそういう発言はしなかったんです。西條芳三郎さんも芳次郎さんも、西條一家を永く守るには、そういう、小さいときからの教育をやったわけなんですわね。

〈今野さんのばあいも、お父さんの代から山西のお世話になってるわけですね〉

そうですね。お父さんの職場は、大工さんでしたわね。(息子の)今野さんは、たまたま機械だったんですが、例えば、お父さんが同じ木工大工の班長さんでも、自分は直接教えることはしなかったんです。あの当時の徒弟生活っていうのは、他人のめしを食わせることを主眼とし、おやじが教えると気ままになる、ということあったんですわね。

〈同じ造機部にいた松井弘さんも内弟子ですね。この人は……〉

この人のお父さんは、三陸海岸の^{おがつ}雄勝町の船主、むかしでいえば網元のせがれなんです。この網元が倒産しまして、松井さんのお父さんは慶応大学の出なんですけど、東京にいないで、網元を継ごうと思って、雄勝に帰ってきたんで

す。奥さんも、雄勝でもらいまして——。ところがお父さんが、たまたま商売に失敗しまして、家も船も山も全財産を取られましてね。そのおじいさんも亡くなる。事業は失敗となったので、松井弘さんが、お父さんと石巻にきたわけなんです。

松井弘て方、私と同級生ですけどね、雄勝の網元は、山西のお得産さんで、取引先だったんですが、その網元が倒産したために、助ける人もなくて山西造船にきたひとなんです。(内弟子といっても)ぜんぶぜんぶ、従業員のせがれではないわけなんです。

〈そのほかに、内弟子という……〉

森昭三て方が、お父さんが山西造船に勤めておって、入ってきた人なんです。私より、三つくらい下でしたかね。

千葉正夫さんは、松井さんと同郷なんです。松井さんのおじいさんに世話されて、入ってきたっていったね。千葉さんの妹も、山西サきてお手伝いさんをやっていましたし、山西にいる渡辺孝ていうひとの奥さんになったんです。

須藤欣治さんは、山西の鹿野又要作さんていうひとの——この方のお兄さん鹿野又要作さんも、山西に入ったんですが——そのお父さんの世話で入ってきましたね。須藤さんは、通い弟子でしたが——。

〈その内弟子のひとが、結婚する、独立する年齢になったばあいはどうなりますか〉

西條家を出るのにも、ただ出すんでないんですね。西條家の、山西の全盛時代には、西條一族の膨大な土地があったもんだから、その土地を区画して、みな安くして、何年か払いで与えたんですわね。石巻でいちばん不動産をもっとったのが、西條家なんです。(最近はともかく)

終戦までは、それから終戦後も、そういうこと約十年くらい続きましたね。石巻の日和山神社から市役所のところまで、(そこに住んでいる)ほとんどの人は、山西の従業員であったという時代があったんです。

〈それは、通い弟子のばあいは違うんですね〉

いや、通い弟子でも同じです。通い弟子のなかでは、やっぱり代の長かったひとが、かわいがられたようですね。造船業界が不振におちいて辞めてったひとでも、(好況期に山西に戻ってから)協力したひとには、給料もボーナスも最高にやれというような——そこは、組合サもきっぱりと語った社長ですからね。(組合の人にたいしては)「あなたがたが、いま、ここでごはん食べてんのもそういう(我慢して協力した)人がおったからこそ、今日の山西も、あなたがたも生活できる」、てことをはっきり言いましてね。

さっきいった渡辺孝くんは、「八龍丸」で船の機関長して、かなり高級な給料もらっておったんですけど、お手伝いであつた奥さんから、あるいは社長から口説きおとされて、山西造船サ就職してきたんですね。

(こういう弟子とりは)西條一族を何百年も安泰にするやり方でなかったんですか。西條芳次郎さんが倒れたときで、四百年続いておるといっておりましたから、四百年後も、構内従業員を二千四百人かかえて、地方の大会社の社長であつたし、それに下請けを二百何十社をもって、あわせて三千人以上の従業員をかかえた社長になった——その点にたいしては、偉かったなと思っておりますね。

各部落、市にも町にも、あるいは一家にも、

そういう立派な人がおらなければ、町も部落ものび悩む——だから、先生〔大山〕の前だからいうんでないんですけれども、いちばん大切なのは家庭内と学校教育だと、私はいうんです。だから私も、素直にハイと聞けとか、礼儀正しくせよとかいうようにいうことあるんです。私のせがれには、「人のために尽くしてやれ。で、自分も尽くしてもらうんだ。飲んで騒ぐばかりでなく、人の犠牲になってやるような友だち、もたなきゃだめなんだよ。自分本位にばかり考えては、わかんねえ」というんです。

3. 造船所の労働組合と労使関係

組合の結成と分裂

〈都沢さんは、二十一年十一月から二十六年三月まで四倉にいて、山西の情況もつかんでいたわけですが、その前の二十一年に組合ができていますね。そのへんのことは……〉

組合(ということば)そのものは、聞いたこともなかったんですね。

西條芳次郎社長の弟で、西條寛六さん、この方が東北大学の工学部を出て、³²⁾ 共産党に入ったひとなんです。学者肌のひとでね。私たちも、図面の見方なんか教わったんです。この方が、組合の育ての親になったわけですね。お菓子屋さんをやりながら、県会議員とか県知事に立候補したとか、やったひとですよ。当時の県民の要望、市民の要望は、とにかく学識者階級でなければだめという——そして、実行力のあるひとでなきゃだめだという——となると、寛六さんをあげるほかなかったんですね。

32) 修繕課の神戸恭司さんの話では、「北大中退」といっているが、東北帝国大学農科大学(明治40年9月1日創立)を指すものと思われる。

〈西條寛六さんは、山西とは直接関係なかったわけですね〉

従業員ではなかったけれども、機械関係や鉄の分析なんかを、(山西の鋳物工場にきて)やっておりました。待遇って、べつになかったです。あたりの従業員は、(寛六さんが)社長と兄弟だというので、あれ(山西に出入りしていても自然)だったし……。むろん組合員は、この西條寛六さんに組合活動なんかも教わったんですね。当時は、「寛ちゃん、寛ちゃん」て呼ばれておったです。

その寛ちゃんは、タンバラ〔気短か〕だけども、人のよい方です。頭のほうも最高でなければ、当時の東北帝大に入れなかったわけなんです。別に悪いこともしなかったし、とにかく(なんにでも)夢中になるひとでしたね。当時は、共産党と自由党がもめた時代で、仙台から機動隊がきたときも、それに対抗したのが西條寛ちゃんですね。市役所を襲ったり、デモやりましたね。その寛ちゃんて一つのことには徹底して夢中になる方ですから、ああいうこと〔共産主義運動や組合活動の指導〕もやったのかなあと、思ったこともあったんですけどもねえ。

社長も(自分の弟だったから、寛六さんは)、ケチつけなかったですし、(兄弟同志が)しゃべることもなかったですね。会社にたいしては、この寛ちゃんというのは、別に害をやったわけではなかったんです。そこがやはり、兄弟かなあと思いましたね。

ただ一回だけ、寛ちゃんがやったか誰やったかわかりませんが、山西造船が、隠匿物資の摘発というのを受けましてねえ。当時、隠匿物資の摘発の委員長は、自由党からでたセコイ〔ずるい〕ひとがおったんです。後の会長になる西條芳次郎さんが、資材の置場に困りまして、実家

のほうに運んだことあったんです。それを摘発したのが、寛ちゃんでないかという、噂が流れたことがあったんですね。

〈ところで、当初、山西の労働組合は、うまく組織することができたんでしょうか〉

なかなかうまくいなくて、二十三年の、いまでいう春闘のときでしたかねえ、大量首切りという問題ができましたね——山西で、約四十人くらい。そのときに、(組合が分裂して)第一組合と第二組合とができたわけなんです。

私は、その当時は従業員でもなかったし、(組合に)入っていなかったから、たまたま船〔「不動丸」〕で(石巻に)きておったときに聞いたぐらいなもんですが、感情的にもむき出しになったんじゃないだろうかと³³⁾

ちょうど朝鮮動乱に入ってきたんで、たまたま共産主義運動が、うんとでてきたんですね。(創立当初の組合は)旧軍人あがりのひと、あるいはそういう教育されたひとが多かったもので³⁴⁾この対立が、第一組合と第二組合の分岐点になったんですね。いろんな(ボーナスや賃金などの)給料問題、それにいろんな組合問題を絡めた運動が展開されてきたときに、その軍人あがりて帰ってきたひとたちと³⁵⁾意見のくい違いがでてきたわけなんです。私は四倉のほうに行っておって、たまたま石巻にきておったんですけど、このときも、むろん賃金未払いで、五十円だ六十円だというのを四回くらい、五回くらいで(分割して)もらってたようですね。

会社の経営も終戦になって(組合ができ)、いろんな関係で、企業が組合に負けるようなかたちになってきたわけなんです。

朝鮮動乱では、石巻では収入も、直接関係がなかったんですね。東京方面に行けば、武器、弾薬、戦争で使われる部品っていうものを受注

しているというので、(そういう景気のいい話を聞いていて) 東京のほうに出るきっかけをつくりながら、組合に反対したひとがいたわけですね。自分たちも三十三、四(歳)になって、将来のことも考えながら東京方面サ出て、金とりのいいところであればなんでもいいんだということで、辞めていききっかけをつくるべくやったわけです。

(組合の運動に反対しているひとたちは) 組合にたいして「(自分を) 辞めさせてくれ。自分で辞める(という) と、退職金ももらえないんだ」とか、「会社から強制的に辞めさせられれば、退職金をもらえる」というようなことで(むしろ会社の首切りの方針に賛成していた)、そういう(東京で働くという) きっかけをつくるという

ようなことでね、田舎のことですから、二つ考え、三つ考えをふくめた組合運動があったようです。

で、むろん、給料も遅配だったんです。遅配だったもんだから、東京サ出て行けば金取りもいいんだ、というのがあったんですね。

退職金というのは、終戦後からばかりでなく、何年か前に兵隊に行った方は、(その分を) 加算されますから、(山西が不況のため) その退職金をもらえねえんだというので、「どうせ(会社は給料を) 遅配してんだから、このへんで(会社のほうから人を辞めさせるの) がいいと考えて) 組合サ反対してやろう」というので、それを絡めながら、(山西を辞めて) 中央に出ていくべく……つまり(組合は) ダンミたいなものだった

33) 神戸恭司さんの証言によると、事情はつぎのようである。「終戦後に、兵隊から帰った人が山西サずいぶん入ったんです。むかし山西にいて、荒くれ者のようになって兵隊から帰ってきたんです。なんていうのか、共産党みたいのが一時ふくれあがったんだね。組合は寛六さんが指示してつくったんですが、とにかく、給料上げるとか、ボーナス、退職金制度とかで、よる夜中毎日交渉なもんで、社長は自宅に逃げて最後は警察サ逃げた時代なんです。組合は、警察の裏表にバリケード張って騒いだんだね。それで社長は、山西は一回解散するというのか、組合つぶすというのか、管理職を除いてほとんど全員、百人くらい解雇したんです。むかしから山西にいた人が、戦争から帰った時点で一旗あげたというか、山西じたいに問題があったわけでないけど、いま考えてみればワンマンすぎたというか——むかしの弟子制度、雇用人と使用人という感じでやってた会社だから……。それで社長は、全員を解雇して、一回辞めさせてから、(改めて) 引き抜きをかけたんだね。あの頃の組合は弱かったし、こんどは会社そのものが組合をつくらせたんでないですか。」このうち「百人くらい解雇」という数字は、都沢さんの「四十人くらい首切り」とくい違っている。なお神戸さんは、昭和 23 年 4 月に養工工として入職し、神戸さんも「解雇」の対象となったが、会社から「引き抜かれ」て再び山西造船の現図係に配属された。

34) この「軍人あがり」については、都沢さんはつぎのように言っている。「その当時の人は、昭和の十二年あたりに支那事変が始まったんですから、国家というものが第一目標で、食べるばかりでなく軍隊に行ったほうが、まちがいがなかったんですね。終戦になって、一般の商社とか商店ではうまくないと、山西に入ってきたんです。アメリカの海軍の船、あるいは航空隊の救療用の小さな船を修理するっていえば、石巻では山西と東北造船しかなかったもんですから、その陸海軍を復員した人は、山西に殺到してきたわけなんです。そして二十二、三年ころに警察予備隊が発足して、そのあと海上保安庁ができて、その船の整備とかいろいろなことするの、すこし優秀な人を置かなきゃならんというので、海軍の管制本部におった人なんか山西に入って、設計課に籍置いたんです。そういう職業軍人の人も、とにかくみな組合には入ってきたわけです。」

35) この争議について、西條芳次郎は以下のように回顧している。「戦後程なく昭和 23 年一部新入従業員の煽動により労使間に紛争が起き、二つに分裂して終結したのでありますが、この間 1 年余の長期に亘り、お得意様始め関係筋に、多大の迷惑を及ぼした為、積年の信用も一朝にして失い、その信用回復には 10 年余を要したのであります」(『五十周年記念誌』、前掲、68 頁)。

んですね。ほんとうの組合活動ばかりではなかったんです。

で、組織の上に、職場の上に立っておったひとが、その（組合の）切り崩し工作っていうんですか、その強硬派を排除しなければ、どうにもならねえんだという——。例えば、トイレの裏のほうとか、工場の片隅とかに行って、「第一組合をやめろ」というような工作がはじまったわけですね。後の第二組合に入るひとたち（へ）の、引き抜き作戦があったんです。

その当時の首切りをやったひとの一人に、古谷敬二ってひとがおるんです。このひとは、後の宮城県振興相互銀行の頭取になったんですが、西條芳次郎さんの腹心中の腹心だったんです。その銀行の株は、山西の社長が70パーセント握っておったんですが、この古谷さんて方が山西の重役で、（社長とともに）組合との交渉をやってたんです。だけど、西條芳次郎さんは十回に一回ぐらいしか、出てこないんですね。不況のどん底だし、朝鮮動乱がはじまったばかりだし、組合は、心理的に、心理作戦でやられたんでないですかね。

そして、もう、大量四十人ほどの首切りが、昭和二十三年にでたわけなんです³⁵⁾。

第一組合と第二組合

その二十三年当時の（組合の）委員長に、私の同級生である山口磨っていうのがおったんです。私、「ミガちゃん、ミガちゃん」ていっておりましたけどね。このひと、共産党サ籍おいたひとで、純然たる共産主義運動に走ったひとなんです。奥さんも共産党員で、石巻の電電公社に勤めておったひとでした。あの当時、電電公社っていえば、もう、共産党のかたまりでしたね。

山口磨さんは、もともと設計なんか勉強したひとで、機械工場のほうにおったんですが、滝沢さんて職長なんかに、共産主義に走ったため、よく見られなかったんです。滝沢さんとは、机をならべておったんですが、滝沢さんはお昼は家に帰って食べる、山口さんは会社で食べておったもんだから、山口さんが、お昼休みにも滝沢さんの机に食いかすなんか置く、冬なんかはストーブに炊く薪を重ねて、いやがらせをしてね。そんで、「誰がこの机に置いたんだ！」なんて（滝沢さんが）いうと、その山口さんは、「私は知りません」なんて、うすどぼけてね——。

その山口ミガちゃんは、何年かたって聞いた話ですけれども、西條芳次郎さんに「土地と家建ててくれっから、委員長ひっこめ。いままでのような（設計の）仕事でいいから（続けてほしい）、共産党をやめろ」っていわれたということをおいっておりました。「おまえ、なぜ、それだけの頭をもっていて共産党サ入ったんだ。共産党だけはやめろ」っていわれたと、いっておいしたねえ。

〈それで、山口委員長は、組合活動から手をひいたわけですか〉

（社長のいうことを聞かないで、会社を）辞めていった——というより、辞められたんです。首になってしまったんです。

〈委員長が会社から出されるとなると、副委員長は……〉

当時の副委員長に、伊藤光男ってのがおるんですね。職場は（私と同じく）、旋盤のほうだったんです。もうひとり、中村なんかという副委員長が、中村っていうのは、鉄工におったんですけど、そのひとたちが先陣切っては、暴れて、ビケ張ったんですね。中村さんも、伊藤さんも、首になってしまう。そこで第一組合は、まった

くの崩壊状態というかたちに、もっていかれたんです。

伊藤さんは、首切りの筆頭にあげられたひとですね。それで、東京に十人くらい(の中間を)ひっぱっていったんです。東京に行って武器弾薬つくる工場サ行くとかいて、そういう兵器関係の仕事をやったようでしたね。

最初は蒲田、それから足立区新明町の池ヶ谷鉄鋼に行ったんですね。(その工場は)工作機械——池ヶ谷チャックって、いろんな加工部品を締める機械の部品をやってたんです。ここに行っただけで、この仕事は精密で、精度が石巻と東京では違うために、いろんな加工物が失敗したようです。それで、東京に行っても、不良品が続出したために、半数は石巻に戻り、三人か四人くらい向こうに残りまして、養子になったひともあるし、伊藤さんのように工場をもつようになったひともおるわけなんです。伊藤さんは、現在、東京におりまして工場の、いうなれば経営者ですね。

〈結局、第一組合は崩壊したわけですね。じゃ、第二組合のほうは、どなたが委員長になったんですか〉

第二組合が残って、柿沼信基さんという方が、その初代委員長になったわけですねえ。首を切るときの参考書を出したのも、柿沼さんだというのを後になって聞いていました。あの人も、あの人も強硬派だとか、あのひとたちは将来の山西のためにはうまくないという発言したのも……。

この方は、現在の石巻市蛇田^{へびた}——旧蛇田村の

出身で、陸軍の参謀本部付の陸軍総長だったんですね。この方が終戦後に山西に入ってきた、職業軍人だったんです。当時、二十四歳くらいで、軍隊から帰ってきたばかりのバリバリでしたね。山西では、私たちのおった工場の記録係、日報の統轄したほうですね。

で、私たちのおった職場から、いまの船渠課、むかしの船課のほうに移りましてね。船の上下課と称しまして、ドックに船を入れたり出したりするほうの係だったんですね。モッコかついだり、南京袋に砂をつめてかついだり、リヤカーでひっぱったり、いまのような機動力がなかったもんですから、この柿沼さんもいっしょうけんめいにやったひとなんです。

それで、柿沼さんは、総務係長、次長、総務部長、最後は常務にまでのぼっていったひとですね。そして最後は、西條芳次郎さんの腰^{さんちやく}巾着といわれたひとなんです。

〈すると、その柿沼さんが指導した第二組合が、その後、会社公認の組合になったわけですね〉

ええ。それが現在の組合サ、ずっと(ひき継いで)きてるわけですね。私たちじたいから、俗にいう、自他ともに許す御用組合と変わっていったわけですねえ。山西の組合も、柿沼さんが委員長の代で、金造船を脱退したわけですね³⁶⁾。

それから、二十四年から、二十九年、三十年くらいまで、(組合のほうは)音なしの構えでしたねえ。

〈都沢さんが、山西に戻ってきたのは二十六年。それで、すぐ組合員になったわけですか〉

そのときは、すぐ組合員にはなれなかったん

36) 組合の結成当初は、当時の全日本造船労働組合(全船)に加入し、全船山西分会と称していたが組合分裂を機に脱退した。ちなみに現在の全日本造船機械労働組合(全造船・総評系)への加盟は、会社更生法下にあった昭和53年3月8日の臨時組合大会で提案された。投票の結果は、賛成350、反対67で可決された。

です。組合のほうは、組合で承認しなきゃなかったんです。だから組合員でない従業員と、組合員である従業員と、またC組合員てのがあったわけなんです。各（末端の）管理職者がC組合員。私たちは、ただの従業員——。

組合員に入れるばあいは、このひとは組合員になっても良いひとであるか、悪いひとであるか、ここでいちおう、（その人柄や行動の）経過をみられたんですね。その勤務状況だとか、働いているとき、昼休みどき、うちに帰ったときの……。組合に関するお話にたいして、否定的であったひとは、組合に入れないわけですね。

私は（山西へ戻って）三月くらい間がありまして、組合に入ったんです。組合でいっても、私は、あの当時は、会社もよくすること、自分たちの従業員もよくなることを主体にしておりましたねえ。

〈話は戻りますが、私の手元の資料には、労働組合発足時の、つまり第一組合の初代委員長には梅沢利雄さんがなっています。西條寛六さんの指導でできた組合の初代委員長に、梅沢さんをもってきたということは、どういう……〉

この人は、船渠課の、この当時のドックマスターですね、人柄がたいへん立派なひとだったんです。当時、私は四倉のほうに行っておったんですが、はじめてでる委員長ていえば人柄が重視されますから、やっぱりこの人になったんでないですか。

寛六さんにしても、梅沢さんは西條芳三郎さん時代からの年長者であるし、労働組合をまとめるという意味においても、若い人たちだけではどうもね。軍隊から帰ってきたばかりの人、軍隊の優秀な幹部候補生の人もおったから、難しかったろうし、天皇制からこんどは、精神が180度転換するわけですからね。それから、若い

人だけではなにを言いだすかわからないと、迷っている時代ですからね。

そうすると、まず、その会社の従業員のことも考えなきゃならん、というふうに、いちばん温厚な梅沢さんをもってのが、妥当の線でなかったでしょうかね。寛ちゃんは、共産党といっても、すぐに極端なことはできなかったと思いますよ。そして二代、三代になってきたときに、はじめて本格的な労働運動にもっていく方法を、寛ちゃんが選んだんでないんですか。

組合のリーダーたち

〈都沢さんは、組合関係の仕事を、なにかやっていたことがありましたか〉

職場委員をやりましたね。最初になったのは、景気が最高に悪いときだったから、二十八年ころだろうと思いますね。

とにかく、会社の建てなおしっていうか、会社の景気をよくしなければだめだったし、それから、われわれ働く者も、それサ協力してこそ労働協約も結ばれるし、³⁷⁾組合ていうのがそうして誕生したんであって、会社もたつ、組合もたつというのが、組合の根本的な姿勢でないか——私、職場におったとき、（このように）語っておったんです。私は、左寄りのほうは、好きでなかったんです。この当時も、給料が遅配だった時代ですから、いつまでも遅配でいったんではまずいし、（組合員の）みんなも、反対ばかりの反対だけではうまくないんだ、ということを語ったので、職場委員に選ばれたんでないんですかねえ。

〈第二造機部では、都沢さんの前は、どなたが職場委員でしたか〉

須藤欣治さんという方で、私より三つ少ないんですが、当時ではお人よしといわれるくらい、

どんなひとのいうことも、みな聴いてくれたひとなんです。石巻市山下の出身で、実家は、お父さんは、籠つくり竹細工の職人だったんですね。

組合活動は、このひとは、あんまり(立場が)はっきりしなかったんです。

〈職場委員の任期は、一年でしたか〉

そうですね。一年ですね。規則としては一年だったんですけれども、留任ていうのがあって、職場委員から二年間できるというの(案)がでてきたんです。一年だけではなかなかむずかしいというので、何年かたって二年ていうのが、組合大会のときに決議されたんです。

〈須藤さんのあとは、都沢さんがなったわけで

すね。そのときの委員長は、どなたでしたか〉

当時、資材課にいた原谷さんてひとなんです。

このひとは、大酒のみですね。頭は切れたひとなんですけれども……。委員長としては、会社にたいしては、相当、対抗したひとりですね。ただ、このころは、大きな問題でことなにもなかったんです。給料が遅配の連続だったんですが、その、御用組合といわれるような時代が続いたわけなんです。

そのつぎは織野さん、織野俊夫さんが委員長で、職場は木工の船体係のほうですね。木造船時代は、船体係の職長をやりましたね。

その当時は木造船で、二十九年から三十年ころから本格的な鋼船時代に変わっていったんで

37) 山西造船鉄工所における最初の労働協約は、昭和 22 年 4 月に締結されている。その内容は、以下のとおりである(一部省略)。

「第一条 会社は全日本造船労働組合を会社内における唯一の自主的団体と認め一切の交渉を組合宮城県支部山西造船鉄工所分会(以下分会と称す)又は組合とのみ行い、これ以外の団体との交渉は総て行はない。

第二条 会社は分会又は組合が特に認めたる場合にのみ非組合員を会社が特に使用することが出来る。

第十条 会社は従業員の雇入、解雇を行うには予め分会の同意を要する。

第十一条 会社は組合を除名されたる者は同時に解雇する。

第二十三条 有効期間は昭和 22 年 5 月 1 日より向う 1 カ年とする。但し期間中でも双方が同意したる場合は改訂することができる。

第二十四条 期限に至って変更の意思表示がなされても新協約が成立するまでこの労働協約は有効とする。」

ところで当時、この労働協約第二十四条をめぐる争議が起きている。組合機関誌(昭 46. 5. 10)に、千葉敬三郎氏(造機課)はつぎのように書いている。「労働協約二十四条をめぐる争議に入り、労使対立再度の団交を重ねたが、遂に交渉決裂、ストライキ宣言でストに突入した。全船本部より三役などの委員来石し応援、会社と交渉を重ねたが、進展する気配なく、会社はこの問題を仙台地方裁判所に提訴仮処分を申請した。その間宮城地方労働委員会の調停あっせんも数度に亘って開かれましたが、総て不調に終わってしまった。組合内部でも議論百出し、分裂の気配が高くなり、遂に第一組合、第二組合に分裂してしまった。この戦争も実に二年数ヶ月という年月を費し、昭和二十四年七月仙台地方裁判所の判決で、会社側の一方的勝訴となつての争議は終止符を打った。」

若干敷衍すると、労働協約は新協約が成立するまで有効であるとする申請人(全船と山西分会)の効力確認請求は、効力が昭和 23 年 4 月 30 日で切れていること、被申請人山西造船は 24 年 7 月 1 日に協約破棄の意志表示をしていることを理由に、退けられている。地裁判決は、24 年 8 月 17 日である。なお会社側は、第一条について判決を求めた仮処分申請を提出したが、それについて仙台地裁は、申請人山西分会が内部分裂し、本協約の前提がもはや失われているとして、会社側の主張を認めている。山西分会の分裂は、こうした労働協約問題も絡んでいたのである。

す。当時は一年に一隻か二隻で、木造船のほう
がはるかに比率が多かったんです。この人も、
鋼船時代になってきたときに、機構が変わって
いきまして、設計課のほうにまわったんですね。
そして、最後は造船部工作部次長までいったん
です。

織野さんは、会社にたいしては、もう、辞め
るつもりでぶつかっていったひとりですね。指
導力もあり、責任感は、最高強かったんです。
もう、ガミガミでね。タンバラ、すごく短気で
手もつけられないような——。社長から学校も
入れてもらったひとなんですけれども、社長に
まで食ってかかったひとなんです。

このひとのお父さん、織野俊吾さんは、西條
芳次郎社長のお父さんの代から山西に仕えたひ
とで、山西造船第二造機部の隣り、山西の所有
地に住まいをしておったんですね。あの当時と
しては、西條芳次郎さんの腰巾着といわれて、
とにかく、部長も専務さんも、このひとにはか
なわなかったんです。このひとサは、辞めたあ
とも給料は払っておったんですね。嘱託とい
うか、別名、大久保彦左衛門といっておったん
です。このひとが、現在の山西造船を築きあげた
ひとなんです。

息子さんの俊夫さん（について）は、おやじ
ばかりが偉いんだって、非難をあげたんです。
会社のほうでは、「このひとを組合サ置いたん
ではまずい。あまり食ってかかるので……」とい
うので、こんど利益代表サあげられたんです。

〈その織野委員長を助けた、当時の副委員長は
どなたでしたか〉

今野正一郎さんと和田正太郎さん——。

今野さんは、組立ての班長兼組長でした。こ
のひとは、海軍の出身でね。日本で兵長制度が
できたときの、いちばん最初の機関兵長だった

と、今野さんからよく聴かされたもんですよ。
巡洋艦「マヤ」ていうのに乗っておってね。今
野さんのお父さんは、小作人だったんですね。
石巻市門脇町の大街道に、石巻市港（町）の船
主さん、魚問屋の所有地、畑がうんとあったん
です。魚問屋と船会社やってる社長がいて、そ
この網干場の留守役をやりながら、その畑をつ
くっておった小作人が、お父さんだったんです。

ただ、今野さんは、山西の（子飼いの）弟子
なために、社長に呼ばれると、やはり頭あがら
なかったです。

和田さんのほうは、職場は電気工具係でした
ね。東北電力の下請けで仕事をやっておったの
を、山西に呼んだわけですね。電気の一級免許
だかをもってたんです。そんで、山西は遅配（状
態）だったけれども、どんどん（会社が）大き
くなってくるというので、呼んだわけですね。
この方については、私、まったくわからないん
です。

私も職場委員のとき、副委員長に推薦された
ことあるんです。二回ほど推されて、七票くら
いの差で破れましたね。

私は、ストライキは、真向うから反対だった
んです。スト権確立のストライキやるのも反対
で、せんだって希望退職するまで、終始一貫反
対してきましたね。これは、組合大会の陣頭に
立ってやりました。私、副委員長にも委員長に
も推薦されましたけど、ストライキは絶対やら
ないという（意見をもっていた）ので、落され
ましたね。その候補のときも、四票くらいで、
いつも落選でした。

執行部総辞退臨時大会

〈そのスト権確立の問題について、組合大会
が開かれたときの模様はどうでしたか〉

ちょうど二十九年から三十年ころは、経済は悪かったんです。山西では賃金未払い、一カ月遅れの十一回払いだったんですね。(組合としては)「ここはひとつ、やらなきゃねえでねか」ということで、スト権を確立するかどうかという問題もでてきたんです。

織野さんが委員長のとときに、現在の湊小学校向かいの石巻市湊消防署二階で(組合大会を)やったんですね。春の大会だから、三十年の四月か五月ころでしょうか。

その大会のとき委員長は、

「私は山西の従業員であって、みなさんの給料集め(のため)に働いているわけでないんだ。それなのに、なぜ、私がみなさんの給料集めるべく、お得意さんまわりをしなきゃならないのか」

という発言があったんですね。委員長がお得意さんをまわって、工事代金をいただいてこななきゃならないようなこと〔状況〕だったんですね。そこで、委員長は、

「私は、こういう(組合員のために集金してまわる)ことをするために、山西サ入ってきたわけでないし、現在もすべきでないと思うんだけど、こういうことさせられるんでは大変だから、(委員長を)辞めます」

といって、役員の総辞退を提案したんです。

たまたま、これより一、二年くらいさかのぼって、宮城県労金でのが誕生したんですよ。そのころ、福島県の労金が一回倒産したということだったんで、宮城県も、給料未払い、あるいは遅配という会社が多かったんで、こういうこと〔労働金庫による共済活動〕やっておったんでは(福島労金の二の舞になる)という声もあったけれども、ぜひやってほしいというので、宮城労働金庫が誕生したわけなんです。宮城県全

域にわたって、こういう運動がもちあがっているときでした。

大会のとき、織野委員長は、

「みなさんの給料集めを、連続させられたんでは、私は、自分の仕事がおろそかになる。私は、給料がたとえ遅配になろうと、もらっているかぎりには自分の仕事を遂行しなきゃないんだ。みなさんの生命を守らなきゃないのも、組合の(仕事の)ひとつだけでも、委員長あるいは執行部を解散します——」

と発言したんですね。

〈執行部のなかでは、総辞退ということについて、意見は一致していたんですか〉

いや、一致しませんでしたね。それでも、最後は一本にしなきゃなりませんからね。私は、「誰がやっても同じだから、辞職しないで、なんとか乗り切らなきゃねえでねえか。どうせ辞職しても、一カ月遅れの十一回払いでいってんだから、とどのつまりは同じだ。それよりも、とことんまでやって、(辞職は)どうにも身動きとれなくなったときでもいいんでないか。船も、新造がつくれる兆しがでてきてんでねえか。まだ本格的な工事サかかってないけれども、兆しがあるんでないかということだから、もう少し待って辛抱したほうがいい」と、それを委員長、副委員長に進言したんです。

ただ、織野委員長は、「執行部、それに各職場委員をふくめた、全員辞退だ」ということを宣言したもんでね、そこまで重大(な決意)であれば、それに従うほかねえんでねえか、ということと臨時大会を開いたんですね。

〈委員長は、その宣言を大会でのべたわけですね。で、一般の組合員はどう反応したのですか〉

「いま十一回払いだし、一カ月も遅れていて大変なので、織野さん、なんとかひとつ、現執行

部でこれを持ち切ってもらえねえか。お得意さんまわりして金集めんのは、委員長の役目ではないんだけど、なんとかこれを持ち切ってもらえねば、わからない[困ったことになる]』というので、いろんな質疑応答があったわけです。

それから、暫時、小休止に入りましたね。三十分くらい的小休止——。執行部全員は、別の部屋でいろんな討議をする。あとの組合員は、一服するなり、雑談するなり、あるいは(大会が)どのようになるかの方向をきめるなり、はじまったわけですねえ。その小休止のとき、私がいちばん言ったんです。

「やはり、辞めるべきでない。辞めるということで臨時大会したんだけど、(大会の空気からみると)なかなか辞やられねくなんでねえべっかや。このままでは、逃げきれねえぞ」それで「もう一回、とにかくやってみよう。時間が三十分ということだから、もう時間だから、席に戻るべ」というわけで、戻ったんです。

で、また再開しましてね。そのとき組合員から、

「誰やっても、結局だめなんだ。あなたがたは、何カ月も(この大変なときに役目を)やってきてることだから、この職場にたいしても、外部団体の組合にたいしても、労金問題に関しても、私たちより、いちばん明るいんだ。だから、ここで辞職されては、ほんとに大変なことになっちゃう。ぜひ、いまの全役員でやってもらわなきゃねえから、再選するから、やってくれないか」

というので、委員長は、

「ひとりひとりが、そういう、せつない気持ち

であるならば、やります。ただし、やる条件として、文句は絶対いわないでくれ。私たちも、全責任をもってやるから。私は、山西造船鉄工所の労働組合のために働いてんでなく、あるいはその給料集めにきてんでないということを発言したが、よく考えてみると、全従業員をリードし、組合員をまもっていくのは、委員長である私の全最高責任であるのに、そう発言したことにはたいして深くお詫びをする。遅配になろうとなるまいと、それにたいしては全精力をつぎこみますから——」

といったんですね。それでこんどは、各組合員から「執行部再選」ということばが、もちあがったんです。全組合員の支持で、結局、全員再選というかたちがとられたわけです。全執行部に一任する、と。

〈すると、さっきおっしゃっていたスト権の問題は……〉

それは、結局、やらないで済んだわけですね。

〈しかし、委員長が先頭になって給料集めをやるというのはいいとして、当の経営者、社長はどうしていたんですか〉

そのときは、社長さんも、会社になくなってたんです。この騒ぎがありまして、(別会社の)魚市場のほうに行って、一年くらいこなかったんじゃないですか³⁸⁾

〈そうすると、組合が会社を経営するというか、従業員のめんどろをみるという話になりませんか〉

そうですね。(組合が)生産管理しなきゃならんでないか、ということもでてきたんです。(結成当時に組合を指導した)寛ちゃんも、後押し

38) 会社としても、片倉七郎さん、柿沼信基さんのほか、営業課にいた桜井寅吉さん、内田茂俊さん、鈴木常雄さん、内田さんなどがお得意先をまわっていたという。

して——。大会のあとさきにも、組合が生産管理しなければ、なんぼ船の修理をやっても、遅配、遅配（が続くの）ではわからねえ〔かなわない〕から、という話でたんです。どっから（かの会社から）、どの集金がきたんであれば、その分を、会社が払うのと自分たちの取る金を、さっぴき勘定して分けねばだめでないかという話が、しじゅうでておったですね。ただ、（生産管理ということに）慣れていないし、相当の決断と勇氣が必要だったんですね——そこまで到達しかけたんですがね。

〈現執行部が再任ということになって、給料の遅配という問題は、どう解決していったんですか〉

この大会終って数カ月後に、船の注文が殺到したんですね。ちょうど、チャンスもよかったんです。この大会が五月ころだったでしょ——七月サ入って、船の建船サ入ったんで、会社もずるいことあったなと、私たちあとからわかったんですが……。

というのはね、船を建造するときは、どこの船主も契約金てのをだすんですが、景気の兆しが見えたにしても、一般的な情報（として入ってくる景気）の兆しだけで、会社からはこういう船をつくる話があるとかないとか、いつてくれなかったんですね。遅配の一方で——。あとから考えてみると、船主さんのほうでは、契約金を支払ってしまえば、船の建造材料を買うよりも、給料のほうさ払われてしまうのではなからうかという（心配をして）、船主さんも（山西造船と契約するのを）迷ったんでしょうねえ。

とにかく遅配を乗り切って、建造船がうんと

注文になってきたんですね。

そんで、毎晩八時、九時までの残業でしたね——それからは。徹夜、残業、徹夜、残業の連続だったんです。私は、そのときに、八月の一月に、徹夜を十五回やっておりました。

二十三年ぶりのストライキ

〈二十三年に組合が分裂し、その後、第二組合が中心になったわけですけど、それからは昭和四十六年まで、争議というか、ストライキはありませんでした。その四十六年ころの状態はどうだったんですか〉

いちおう、あの当時は景気もよくなってきて、最高の景気に入ってきたわけですね³⁹⁾。組合のほうでも、何年もストらしいストがなかったもんで、これでは御用組合でないかと、いう状態でした。それで、「景気もよいから、このへんでやらなきゃだめでないか。すこし、やろうじゃないか」ということができて……。

私じしんは、ストライキあんまり好きなほうでなかったから、松野光男さんというひとと、ストライキやらないで解決する方法がないかと、訴えたんですけども、組合では、いくら働いても働いても、というぐあいだったし、闘争関係も弱体化しておったし、まあ、組合内部にも賛否が、ごうごうと起っておったんですが、なにせ（賛成の組合員は）大勢なもんですから、スト権確立の賛成が多かったんです。

いまでいうと、春闘の一環ですね。あれは、五月の始めだと思えますね。というのは、北海道の函館から北洋に全船団が出航するのが、当時は五月の十五、六日ですから、そのケーソン

39) 山西造船鉄工所では、昭和40年代前半から設備の新設拡充を進めており、20トン塔型クレーン建設（昭和42. 1）、内作工場現図場の新築（同12）、セミドライドック竣工（44. 7、1,000 G. T）、固定ジブクレーン建設（45. 3）、門型クレーン建設（45. 4）などが行われ、建船量も拡大した。

船が石巻から離れるのが八日か九日あたり——その北洋のケーソン船を対象にストライキやったわけなんです。これ以外の船ですと、一艘ずつの独立に、会社対船主という関係になってしまうんですが、これは船団ですから、日ソ漁業交渉でバツと期間がきまっておる船ですから、一年間でいちばんチャンスはよかったんです。そのとき、山西にきておった船は、修理するのを合わせて、四十艘くらいでした。一艘対会社くらいでは、団結集中力が乏しくなるわけなんです。これは、石巻の造船、鉄工、それから船舶に関係した電気屋さん関係も、みな同じですねえ。

くで、そのストライキの様子というか、経過はどうだったんですか

スト権の確立から、二十四時間過ぎてから始まったわけなんです。組合のほうでは、いちおう出勤のタイムカードを押させまして（出勤のかたちをとり）、待機の姿勢とったわけです。組合の執行部のほかうから指令で、最初は時間拒否やったわけですね。一日二回、二時間くらいだと思いますが、十時ころからお昼ころまでも、二時ころから四時ころまで、そして定時が四時なもんですから、帰るというように——。

そのときは、会社のほうでは、保安要員を要求してきたわけなんですね。緊急な事態が発生したばあいの、作業員ですね。保安要員は、ストライキを仮に午前中二時間、午後二時間あるいは休みというときに、十人くらいは認めざるをえなかったんです。それをやらないと、船主さんのほうの圧力も、組合サきたことあったんです。「山西サ、船もってきません」と。「損害賠償は、どうしますか」ということがでてくるわけです。損害賠償の請求が、会社でなく組合にくるといわれたんです。船主には、船主さんの組合があるんですよ。

そのあくる日あたりは、一日は会社におりますけれども、こんどはデモ、構内デモですね。⁴⁰⁾そのデモをやっているときには、よその造船所——日魯造船、鈴木造船、鈴木鉄工さん（の組合）、それから地区労からの応援を得てるわけなんです。仮に、山西の労働組合が五月の一日から五日ころまでの目安で（ストを）やる。その間に回答がくれば、そのストライキを解除するけれども、こんど日魯造船では四日ころにやるとすれば、こっちから応援に行くというように、地区労をとおした応援体制に入ったわけです。

私は、ストライキをやらなくておく方法はな

40) その当時の様子について造船課のある組合員は、組合機関誌(昭47. 4. 20)につぎのように記している。「山西労組も(46年)五月八日(土)職場集会を開催し話し合いの結果、月曜日からの時限スト、H氏なんか入社して初めての経験、全員団結して闘争に没入、手と手を組み合わせての労働歌の合唱、煙りを上げてのジグザグ行進、頭には赤い鉢巻をして頑張った姿が昨日の様に思える。あの時点では何を考えたか、日毎に戦いが伸びて行く、唯長く戦うということはどちらの不利になる可能性がある。その可能性を忘れてはいけないと思う。」

また、当時の執行委員長・阿部謙二氏はこう書いている(同号)。「みんなの財産である団結でもってがっちりスクラムを組んで『ワッショイ、ワッショイ』『要求、貫徹』『団結、がんばろう』と構内をデモった力、あらんかぎりに叫んだ労働歌、組合事務所前で、本社事務所内で、現場事務所前で各職場毎にあの団結があつてはじめて昨年は五ヶタをかくとく出来た。……地域の応援、支援、特に県評に笹原さん、地区労の千葉議長、事務局の中沢さん、木村さん、県会議員の田畑さん、東北造船労組の皆さん。造船鉄工の働く仲間の皆さんの暖かい御支援があったればこそ昨年は二十年ブリと云われるストをブツことができた。」

いか、ということばかり考えておったんです。組合の大会では、三百人も四百人も集まりますから、私はいつもいうんです。よそでストライキやっているばあいに、その仕事を山西造船でとる方法をやったらいいんじゃないか。組合はあくまで組合だから、地区労が中サ入りますから、かたちのうえでは応援したりしなきゃねえけども、自分たちの仕事は自分たちで確保しておかなきゃねんでねえか。たとえ組合活動がおんなじ〔地区労として一本化〕であっても、自分たちの仕事を、日魯造船とか、村上造船にもっていかれるようでは、たいへんだ。ま、持っていかれるより、持ってくるということが、いちばん大事でないか、と。

二十七、八年ころでしたか——ちょっと景気の悪かった時代に、木工関係の大工さんたちが、ほとんど他社に出稼ぎにいったことあったんです。神奈川とか、福島あたりに——。そのとき、西條芳次郎さんは、「辞めていった人は、給料もボーナスも少なく」てことを、宣言したことあったんです。それが私の頭に入ってるものですからね。「どうせ働く組合であれば、会社もよくなり、組合もよくなって、これがほんとの労使のつながりを深める要因でねえか」と、いったんです。若い人は、そういう（過去の山西の経験を）知らないで入ってくるひともありますから、「そんなこと言っても、遠いむかしのことだ」というふうに語るひと、主張するひともおるわけなんです。

それでも私なりに、「過去にこういうことがあった——会社の仕事もなければ、自分たちが泣く番になるんだ。やがて、あんたがたも妻帯するんだから」と訴えたんですけれども、なにせ（ストライキの反対について）発言するのは、松野さんと私の二人、二対何百人ですけれども、同

調するひとも、だいぶおりましたんでね。私は、その（考え方の）線だけは、ぜったい崩さなかったんです。松野さんは、私たち同じ機械工場だったんですが、退職するときは修繕課の担当技師でした。倒産する前の第一回目の希望退職で辞めたひとなんです。

ストライキの結果、結局、組合員の主張のほぼ 75 パーセントか 80 パーセントくらいは通ったんですが、⁴¹⁾あとはまた、御用組合のような状態だったんですね。

〈話はちょっとそれますが、北洋船団の船が、修理のため山西造船に入っていたということですが、会社としては、いろいろなアフター・サービスをしなくてはなりませんね〉

そうですね。私は機関課のほうの仕事で、いちばん多く函館に行ったほうなんですけれども、各船団が函館に集合しますとね、無線メーカー、電気メーカー、エンジンメーカー、それから各船についている工具、レーダー、甲板機械、ペンキ屋、あるいは漁業をする装置のサービスが各社からくるんです。函館の岸壁にテント張りまして、特設無線を据えつけまして、六つか七つのメーカーがみな集まるわけなんです。一艘の船を対象にすると、一艘の船におさめるメーカーは、最低でも六社か七社きてるんですね。

私たちは、自分でつくった船、あるいは自分たちで修理した船の、その現場に行って、異常あるかないかを再確認する——そして、つぎの、来年の出航のとき、その会社の営業も兼ねたわけなんです。簡単にいえば、その船のあらゆる機械、工具のサービス合戦のようなわけなんです。それがつぎの受注、修理受注に影響するんで、その船に何回行ってるか、今年（受注に）来てない船でも、一昨年あたりに来ている船なら行け、というような業務命令がでてる

んです。

大曲工場建設問題

く山西造船は、いわゆる造船不況のあおりで、五十二年の九月二十七日でしたか、百四十九億円の負債をかかえて倒産し、その年の十二月十

九日に会社更生法の適用をうけました。私の聞くところでは、一般的な造船不況というよりも、山西の特殊事情もあったようです。ちょうど四十六年のストライキと相前後して、いまの大曲工場が開設され、工場の拡張を図ったあたりから、倒産の前兆がでてくるんですね。まず、

41) この春闘における組合の要求書と、労使の合意事項はつぎのとおりである。

株式会社山西造船鉄工所 取締役社長 西條芳次郎 殿	山西労発 46-025 号 昭和 46 年 3 月 10 日
賃金改訂並びに昇給についての申入書	
昨年ベースアップ以来経済の発展に伴う大幅な諸物価の値上りは、ここ数年来の例に違わず私達の生活を脅かしていることは論を待ちません。	
又、新工場稼働を目前にして企業の拡張を図る現在、従業員が不安な生活を送っていたのでは、仕事の能率も低下するでしょうし、安心して生活できるという保障があってこそ、はじめて企業の発展がみられるものと思惟します。	
依って私達の生活を支える賃金改訂並びに昇給についての左記要求に対し、会社は誠意ある回答を提示する様申入れ致します。	
記	
一 基 本 給	15,000 円 (定期昇給、是正給は除く)
二 配 分 方 法	一律 70% 本給 30%
三 回 答 指 定 日	昭和 46 年 3 月 24 日
以 上	

協 定 書	
株式会社山西造船鉄工所 (以下会社という) と山西造船労働組合 (以下組合という) は昭和四十六年度賃金改訂並に賞与の年間協定等について左記の通り協定し、茲に本書式通を作成し会社・組合各壹通を保有する。	
昭和四十六年五月二十五日	
株式会社山西造船鉄工所 取締役社長 西條芳次郎 殿 山西造船労働組合 執行委員長 阿部 謙治 殿	
記	
一	組合員四二一名四月一日現在基本給を一人当たり平均月額壹万円を増額する。
二	賞与の年間協定については基本給の五ヶ月プラスアルファとする。
三	通勤手当については算出方法を改訂し組合員一人当たり平均参百七拾円を増額する。
以 上	

その大曲工場建設のいきさつなんですが……」

石巻市が、山西造船の中瀬工場(の土地)を⁴²⁾公園にしたいという案がでたんです。川と川のあいだですから、立地条件からいけば、いちばんいい公園になるわけです。当時、神奈川県川崎の助役しておった、石巻出身の千葉堅弥さんを、石巻の市長に迎えようじゃないか、ということができたんです。たまたま、中瀬を公園にしたいという市民の声もあったもんで、千葉堅弥さんは、それを耳に入れ、心で、頭で判断して、それならばというので、市長選における第一声が、なぜか、石巻市立の公園にしましょうという公約を発表したわけなんです。

当時、西條芳次郎さんは、石巻商工会の会頭をやっておったんですが、「それはいいことだ」と、自分も案を出してきたわけですね。(中瀬工場を)公園化するのであれば、(新工場は)どこか(立地条件の)いいとこをとらなきゃない、というので、私の兄き——私の姉「みえじ」の亭主である、石巻市議会議長の渡辺喜久雄さんとか、市長、県会議員にはたらきかけて、買取というか、石巻の西浜町、いまの大曲工場を手に入れたんですね。

(売却した中瀬工場の)坪数なんです、建設省と市と山西で測量したんです。山西からは柿沼常務と西條昇一君と私が行ったんです。この測量は、前の内務省が明治十六年にやったきりで、その後やってないんですね。(その後)山西は、北上川を勝手に埋め立てして、石垣を組んで、工場に使ったんです。戦時には、(軍の管

理工場に指定されていたため)軍事が最優先とあるので、(敷地を大きくしたことも)内務省が黙認したかたちなんでしょうね。山西では、市に売るとき、(その埋め立てた)土地をふくめて、ぜんぶ売るんだということだったんです。ところが、実際に測定した山西の土地は、ずっと小さいんですね。

いずれにしても、その土地を売って、大曲工場の土地を取得したわけなんです。西條芳次郎さんにすれば、やはり実業家だから、(大曲工場を建設して)どんどん金がかかってくれば、という狙いがあったんでないですか。四十五、四十六年といえば西ドイツの船の建造さかかっておりましたから、まだこのころは全盛時代ですね。社長は、このころを造船所の最高とみた、と私は思うんです。いや、大きな夢と不安の入り混じった時代でなかったんですか。

〈その大曲工場の建設にあたって、組合はなにか対応したんでしょうか〉

あのときは、組合というよりも、私たち班長以上の人が、西條容七さんに呼ばれましてね。山西の御所裏(川口)工場に、教育センターがあったもんですから、そこに呼ばれて「みなさんは、どういう考えでいるのか教えてくれ、率直に述べてくれ」と——。「造船も小型船、中型船だけではとてもやっていけない時代がくる。やがて大きな船の建造をやらなきゃいけないのに、ついでに社長も、ここ(中瀬工場)ではできないから、大曲工場つまり石巻市の西浜町の土地を取得して、造船所を建設したいと思うんだけ

42) 山西造船鉄工所の前身石巻運輸造船株式会社は、創立当初の本社事務所を石巻市仲町に置き、昭和15年に同仲瀬六番地に移転した。終戦後ただちに、北上川河口川口町三丁目一番四号地に鋼船工場をつくり、昭和39年には川口工場(御所裏工場)に本社屋をつくって本社を移転した。他方、以下で問題となる大曲工場は、46年4月から操業を開始する。「大曲」という名称は、石巻市に隣接する桃生郡矢本町大曲地区に近いところから呼称されるようになったが、住所は石巻市西浜町である。



現在の本社大曲工場

(宮城県石巻市西浜町1番地2、『会社概要』より)

ども、今後の見通しをみると、漁船だけではやっていけないような世界の情勢、日本の情勢であるようだし、みなさん幹部としてはどのような意見であるか、聴かせてけれ」と。また、「多くのみなさんが絶対反対というのであれば、従業員のみなさんが大切なんですから、その意に従って取りやめすることもある」と――。

私も、そのとき発言したんです。

「今後の見通しが、実際にそういうのであればいいけれども、いま現在で、毎月三艘ないし四艘ずつ進水してんでないか。そのほかに巻揚船、鮎船、ケーソン船ができてるのに、そんな、向こうサ行かねたってもいいんでないですか」と確認したところが、社長は、「現在は、そうだ。そうだけれども、みなさん御承知のとおり、今後の見通しを考えると、新工場が必要なんだ」といわれたんですね。「みなさん御承知のとおり」っていわれても、(自分たちは)政治家でも実業家でもないしね、今後の見通しなんての、先はまったく暗な読みしかしてなかったわけなんです。五、六人が発言しましたかね。「行かないほうが、いいでねか」という人も、あったんです。社長から、「みなさんの意見は」といわれたって、「そういう(大型船建造をやるという)ことならい

いことだから、賛成してもいいんでないですか」という、私の発言だったんです。

もうそのときは、膨大な土地を取得して、着々と(話を)すすめてったんでねえか――私たちに言うまえにね。

〈それで大曲工場が、だんだん整備されていくんですね〉

大曲の土地は防風林のあるところですから、未開のところに、一期工事、二期工事、三期工事をやっておるんだと思います。完成するまでは、五年くらいかかったんでないですか。(新工場をつくる)その前に、千トン、千五百トン級の船を建造して、テストやったんだろうと思います。まあ朝鮮の船も、台湾の船もつくった。その実績があるていどあって、あるていどの姿ができたところで、よしというので、その船よりもさらに四倍も五倍も大きな船をつくりはじめたんです。

だから、社長も、石播――石川島播磨造船所がバックにいても、いくら金がかかるものだから、先がほんとうに大丈夫なのかっていう、希望の不安が入り乱れたと思うんです――会社の西條芳次郎社長は。

倒産と再建

〈山西造船の倒産問題は、西ドイツから受注した船が、大幅な赤字を出したことから始まりましたね〉

ええ。西ドイツの貨物船を、十艘ばかりつくったんですが、これが、倒産の原因と発展してわけなんです。商社は、日商岩井が入っておったんです。そのうしろには石播——石川島播磨重工がおったわけなんですけれどもね。あの当時は、大型造船化——何千トン何万トンで船の建造は、東北の一漁船メーカーが、ああいう西ドイツの船を相手にして、やれるわけがなかったんですね。そこには当然、大商社と大型船の建造を経験した大会社がいなければ、やれないわけなんです。

〈技術的に、ミスが生じたわけですね〉

ええ。設計ミスが出まして、建造が一日遅れると八十万円ずつの罰金に加わってきたわけなんです。

私の記憶では、船腹を切って、船体のなかから、機械をとり出す作業やっておったんです。「なんだ、いま頃になって。あしたに試運転するって船が——」（と思ったところ）、発電能力が少なくなつてね。エンジンが小さかったんですね。エンジンは小さく、発電機は小さいから、船内で要求される電力がでないんです。それで、船の横っ腹を切って、大型エンジンに入れ替える作業がはじまったんですね。私、「だめだ、これ、設計ミスだな」っていったら、まったくそのとおりなんです。

山西は、何千ボルトというふうに（計算して）

設計たてたんでしょけれども、発電機まわすメーカーも、山西からいわれたとおりのエンジンをつくったと思うんです。ところが実際にやってみたら、それが小さかったんですね。こんどは、エンジン・メーカーに、発電機も大洋電気に大きな発動機を注文しなきゃ、というので、その工事があったわけですね。船腹を切るのはいいんですけれども、こんどは中の機械を出して、丘にあげて、梱包しなきゃならない。こんど（新しい大型）エンジンがとどくまでのあいだ、その切断したとこを、そのままにしておかなきゃならないから、シートかぶせて、と何日間という間があるわけです。エンジン出して据えつけるのは簡単だけでも、十日間の空白があると一日八十万円だから、八百万円の罰金になってしまふんですね。それから、前の（機械をとり）出す四日分と、後の（据えつける）四日分が、八百万円にプラスされるわけです。一艘であれば、それくらいで済むんですが、五艘ぐらいいは、そういうのが出たわけですねえ。こんどは利子がつきますからね。会社のほうが、まいっちゃったんですね。⁴³⁾

〈設計は、山西が担当したんですか。石播では、やらなかったんでしょうか〉

最初は石播がやっておったんでしょうけど、その仲をとった商社では、なにせ儲かればいいというだけで、あとは「これ〔西ドイツの貨物船〕は、あなた（山西造船）の担当ですから」というふうに、突っぱねられたんですね。

会社としては、会社の言いふんとしては、設計ミスではないことを主張するわけなんです。

43)「西ドイツからの受注船が一隻目から、六億五千万円もの赤字を生み、その後の同型船も赤字回避が出来なかった」（全造船山西分会『倒産から1,000日の闘いの記録』、1980年、23頁、以下『闘いの記録』と略する）。

それから、ほかに（載貨重量トン数の不足を理由に）クレームがつけられて、仮に五千トン積む（はずの）荷が、四千八百トンしか積まなかったと。例えば、北海道から九州に行くあいだに、荷が二百トン足らなければ、油も同じ量だけたくさんだから、二百トンより儲けが少なくなるんだと。一航海で二百トン（分の儲けが）足りないば、四百トン（分の損に）なっちゃう——これの保障をどうするか、という問題もでてきたわけなんです。そのどこへんまでが真実なのかは、会社の上層部しかわからないんでないですか。

なにせ、石巻と西ドイツの交渉ですからね。問題は、ドイツとここだから、たいへんなんだと。船は半分（五艘）つくってるし、（残りの分を注文どおり）つくらなければ、金よこさないし、日本では（クレームのついた）船の引き取り手がないことになると、赤字になってしょうがない[どうしてもなくなる]、ということなんです⁴⁴⁾

〈西ドイツの船主との交渉は、日商岩井が当たるわけでしょう〉

ええ。その日商岩井と西ドイツとの電話の連絡時間が、午後三時から五分間だけだったんです。営業上の、金銭面もあるだろうし、船の構

造の欠陥もあったんだろうし、そのやりとりが五分間で、それが過ぎると電話は終わりですね。それで山西の西條芳次郎さんは、これでは大変というので、高橋長生さんを社長相談役にもってきて⁴⁵⁾いろんな交渉やってたわけです。また顧問弁護士の三島さんと相談させながら、計面倒産の案を練ったんですね。

〈結局、山西造船としては、技術的に対応できなかったわけですけど、四十九年から、石播から技術指導などで人を送りこんでいますね〉

技術提携だと思うんです。それに工場長さんとか、現場の管理者も、むこうからきておったんです。あの当時はやっぱり、技術がなかったもんだから、むこうサ頼まざるをえなかったろうし、そういう失敗を重ねる、あるいは失敗後の改造で、（結果的には）いい技術をマスターしたことになるんですが、最後は、十艘ばかり完成して、むこうに引き渡したんです。

いずれにしても最後は、百四十九億っていう負債をかかえて倒産したんです。

〈山西造船が、会社更生法の手続きを仙台地裁に申立てたのが五十二年の九月二十七日ですが、山西の倒産は、一般の従業員にとっては突然の出来事だったようですね〉

はいはい。稲妻のようなことでなかったんで

44) 「会社の説明によれば、日商岩井を通じて西独から注文された9,000重量トンの貨物船が突然、載重量吨数不足の理由で船主より引受拒否の通告を受け、その前渡金の返済を要求され、銀行より借入れ返金し、資金繰りが行詰りとなった。この為、大口債権者である日商岩井に対し、約束手形の期日延期、さらには、銀行借入れに対する保証等を要請したが受入れてもらえず、九月三十日満期の約束手形六億円の決済資金不足となった為、事前に会社更生法の手続きを申し立てた、という」（『闘いの記録』26頁）。51年に受注した西独の貨物船は十隻であり、性能不足が納期遅延で、三隻を引渡した時点で六億九千六百万円の欠損であった。一隻はキャンセルされて別の船主に安値で売却し、その後六隻を引渡した時点で二十七億六千七百万円、西独船だけでも三十四億六千三百万円の欠損となった。

45) 高橋長生氏は、大阪大学工学部を卒業。第2管区海上保安本部海事検査部長を昭和27年に辞め、サルベージ会社を経て、造船業界で専務、社長、取締役営業部長として三社を歴任した。昭和52年2月山西造船鉄工所社長顧問、同年9月28日仙台地裁より、弁護士の三島保氏とともに保全管理人として選任され、12月19日管財人となった（『河北新報』昭52.10.7等を参照）。

ないですか⁴⁶⁾

九月二十七日に倒産となりますと、それから四日ぐらい前の晩に、夜十時ころ、私休んだときに、ある人から電話きたんです。

「実は、山西が危ないんだよ」

「なにを言うんだ。絶対そんなことない！」

と、私が行って、デマや嘘の話はしたんですけど、私も「これは、絶対秘密にしとかにゃ。あなたも語っちゃだめだよ」と口止めして二、三分話をして電話を切ったんです。

九月二十七日の(倒産の)日、私、用事があって、四時の定時で(仕事を)あがったんです。そしたら、夜七時ころにまた別の人から電話があって、「都沢さん。帰っていくとき、何もなかったかね」というから、「いや、何もなかったよ。なんか、会社内がおかしく騒いでだんでねえか」という話したんです。私はその三、四日ほど前に(倒産しそうだという)情報が電話できておりましたからね、「あれ(今日、倒産だと、会社で騒いでいたの)は、本当かな」と思ったんです。

そして、それではたいへんだというので、九月二十八日、私(涌谷から)汽車で通っていったんですが、御所浦工場に七時十五分ころ着きましたら、各メーカーの人たちや債権者が、トラック持っておるんですね。それから、会社の課長たちも。課長っていうよりも、利益代表ですね、三人おりました。それで私に、「いやー、学さん、困っちゃった。いま、パイプで叩かれ

そうになったんだ」というから、「なにして？」ていったら、(その課長の一人は)「(メーカーの人たちが)『山西は倒産したんだから、自分たちの荷物、運びにきた』ていうし、会社からは『その荷物を)持ち出させてはだめた』っていわれてるし」と、こういうわけなんです。

「都沢さんは、古いから(メーカーの人たちもよく知っている)、すこし、なんとか言ってくれんか」

「なんだ、あんたたち、利益代表でねえか。利益代表である人が、おらみたいに係長サ答えてくれているのは、とんでもない話でねえか」

と私、しゃべったんですが、「んじゃ、私が言うから」ていって、「私が全責任をもつから、あれして(今日のところは引き揚げて)くれ」ていったら、そのメーカーの人たちも、「都沢さんが責任をもつならいい」というんで、引き揚げてもらったことがあるんです。まァ、むこうとしても(山西の倒産は)半信半疑。私も、そのようにしゃべったことに自信もなければ、ただ、そのときはそう言わざるをえない立場にあったんですね——。(そんなことがあったために)「山西が危ないって電話きたのも、本当だったんだな」ということ、私、二十七日の朝にわかったわけです。

その二十八日の晩は、私が家に帰らないで、他社から入ってこないように防止するために、こんどは不寝番の班長を、説得したんです。十何人おりましたかね。で、山西の労働組合も全

46)「組合側に連絡があったのは、午後四時終業間際のことであった。これは明らかに労働協約第五条の事前協議制を無視したものである」(『闘いの記録』、26頁)。「朝、会社に出勤して控室に入ったとたん、皆がわいわいさわいしているのです。『おばあちゃん会社が倒産したんだぞ』とその中の一人が言いました。私は『うそ、うそでしょう』と云うと、『本気にしねえんだな、新聞見ろ』と渡された新聞には、大きく『山西造船倒産』と書かれていました。その瞬間、私の胸に毒矢がグサリと刺さったようでした」(新造課・梶原ゆきのさん、同14頁)。

面的に協力すると——。私も、不寝番、二回やりました。

〈その倒産について、組合が連絡をうけたのが、二十七日の午後四時過ぎのようでしたから、都沢さんが仕事を終えて、自宅へむかっている時間でしたね。記事によると、組合では、帰宅した組合員に連絡をとったようですか、翌日の新聞、テレビで初めて知った人もいたんですね〉



鉄工所の構内で集会をする組合員

山西の組合としては、倒産というのは、後にも先きも、一回しかなかったんですからね。

私たちとしては、倒産ではなかったけれども、倒産くらいのつらい経験を山西でなめてきてますけどね。ただ、組合の若い人たちは、倒産という経験がないもんですから、びっくりしたことは間違いないし、たいへんな一大事件だったんでないすか。

私は、このときの倒産は、あんまり不安もなく、安心した倒産だと思ってたんです。会社が更生法を出せば大丈夫だ、という考えでね。

〈現在、山西では、着々と再建されてきてるんですが、倒産してから立ち直るまでの経過はど

うでしたか〉

西條芳次郎さんは、中風で倒れ、十年以上も不自由な生活をしておったんですが⁴⁷⁾高橋長生さんと三島顧問弁護士と相談して、山西造船を残すべく、芳次郎さんの個人所有の財産を、まず処分していったんですね。それに、例えば西條海運、石巻港湾、西條不動産といったような、自分が直接やっている会社の財産をぜんぶ棄てて、解散してしまったんですね。

石巻港湾であれば、日本でも有数な若松築港とかに吸収してもらい、株を売り、その施設も事務所もぜんぶやった。西條海運も数千トン級の船二艘くらい、四万トン級の船四艘、そういう船を十艘くらい整理したと。それから山西造船の名義になっている土地、西條芳次郎さんの個人所有で山西が借りてるような土地も、みな売ったというぐあいだね。社長名義にした口座もあったろうし、上層部の相談で、みな処分したんでないですか。自分の会社をぜんぶ棄ててまでも、(山西を再建しようとした社長は)東北一の大実業家だなァというふうに、私、思うんです。

こんどは、仕事も順調に伸びてきたもんで、下請け負いの単価を、いままでの100パーセント払っておったのを、20パーセント削って80パーセントで仕事をやれと、さらに削って70パーセントでやってくれ、というような方法をとってきたわけですね。合計30パーセントもダウンさせるわけですから、下請けは苦しいわけですね。だから私は、会社の人にも、「下請け負い業者をぜったい粗末にされては困る。いちばん協力したのは下請けの構内業者でありますよ。山西を

47) このとき西條芳次郎社長は、東北大学鳴子分院内科に入院中(79歳)であり、副社長であった西條容七(70歳)は、管財人補佐として出社していた。

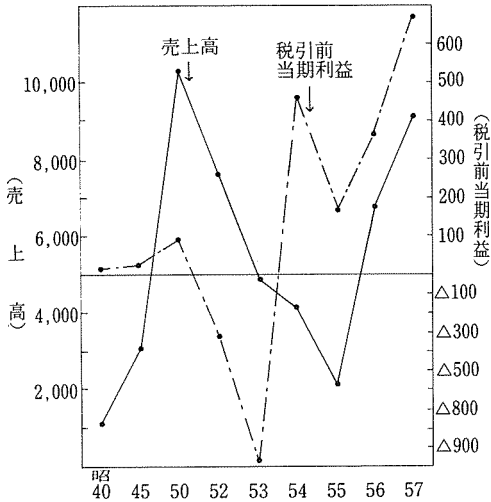


図7 山西造船鉄工所の売上高の推移（単位：百万円）

これまで、立ち直らせたのは」というんです。山西の関係では、下請けの倒産はないんですけども、倒産した会社っていうのは、下請けの従業員のこと考えてくれなかった社長でしょうね。（山西の関係では）山西造船鉄工所下請協力会というのがありますが、社会健康保険とか協力会の組会費の未払いが、一年以上続いたところはありました……。

それから、倒産した時点で、各会社に払うべくした金なんだけれども、会社更生法というので、十年間は払わなくていいって金が出てくるわけですね。それは、十年間のうちに逐次、

あるいは会社がすっかり立ち直ったあとに払いなさいという法律があるそうなんです。その法律に基づいた方法でやってきて、今年〔五十八年〕九月だかで、百四十九億円の負債が、ぜんぶ払われているんです。⁴⁸⁾

最近では四号船台、五号船台をつくる、さらに川口工場にグレン二機を移設、浄化船台の新設、さらにチリ地震の津波で破壊された岩壁の修理サかかって、もう完成するんでないですか。そういう、何億って大工事が完成するわけなんです。

この会社を、これだけにもってきたっていう最大功労者は、まず西條芳次郎さんであり、管財人であり、現在の社長片倉七郎さん、そして下請けの構内業者でないですか。

希望退職に応募

〈山西造船では、会社が倒産する前の、五十二年の春闘と夏期一時金交渉の後で、希望退職者を募集し、第一回目は百四十四名が退職していますね。都沢さんが希望退職したのは、第二回目のときでしたね〉

第二回目、五十三年四月ですね。

常務取締役の八木田謙治さんに、私、希望退職願を出したときに、御所浦工場——川口工場

48) 会社更生法にもとづく山西造船の再建過程は、ほぼつぎのようである。昭和53年2月17日、第1回関係人集会。担保権者・株主・債権者など146社が集まり、更生手続き申請の事情やその後の経過、同鉄工所の財産評価や賃借対照表、今後の経営方針などの説明を受けた。今後の経営方針については、漁船の建造を中心に、過去の実績の30%を新造、特殊貨物船を年二、三隻建造して債務を弁済すること、事業を陸上鉄工物に拡大すること、技術を活用して漁業建造コンサルタント事業を行うことが明らかにされた（「朝日新聞」石巻版、昭和58. 2. 18、「河北新聞」同日、「石巻日日新聞」同日、参照）。昭和53年5月31日、本社工場を川口工場に移転。これにともなって機構改革、1室22課から1室14課に縮小した。大曲工場は、貨物船の受注があるまで修理船と事業転換の鉄工部門を残すだけとなる（「石巻日日新聞」昭58. 6. 1）。昭和53年11月14日、運輸省諮問機関の海運造船合理化審議会造船対策会が、造船安定基本計画を告示した。山西造船鉄工所はこれに対応して11月15日、本社を再び大曲工場に移転、安定基本計画にもとづいて6,500トンドックを54年末までに廃棄することを決めた（「石巻日日新聞」昭53. 11. 16）。なお人員整理については、別掲脚注49) 50) で触れる。

から本社に二、三回呼ばれまして、うちのせがれが山西におったものですから、「心配することねから、息子だけは辞めさせないで、置いてけ」っていわれたんです。息子が「父さん辞めたら、辞めっから」っていうので、いしょに辞めたわけですね。

あんときは、二十五年以上だか長く勤めた人は、特別功労金と退職金が多かったんです。倒産した会社が——もう明日にも倒産するっていう会社が、退職金のほかに功労金出したって話は、聞いたことないんです。この点は、私も、社長は偉いなと思ってます。

〈希望退職は、ふつうの定年退職とちがって、いろいろ迷いもあったと思うんですが……〉

私は(再就職するばあいには)、知り合いもおったし、財産もすこしはあったので、あまり迷わなかったですね。東北造船とか、よその造船所でも、そういう(倒産の)騒ぎがあったもので、うちの会社もあるいは、とは思ったんですけども、時間がたつにつれて、「(第二回目の)希望退職(の募集)がくるな」と思ったわけです。第一回は、やってるわけですからね。⁴⁹⁾ 八木田さ

んも、会社のほうはこういう手続きになってるから大丈夫だ、心配するなといっておったし、あとは、組合がどのていど騒ぐか、ということだけが心配だったんです。

ふつう定年で辞めるとなると、送別会とかやってくれるんですが、人数が多かったもんでね。

(希望退職者が)五人や十人であれば、「私ばかりが大変なことになっちゃう。信用なかったんだな」というふうに、淋しさも増したんでしょうけれども、なにせ希望退職は百以上、というのが、救いになったようですね。⁵⁰⁾

家でも、(倒産の)つぎの日起きて家内とも話したんですけども、「なに、父さん、心配することねえから」っていうもんだからね。家内は、私よりも、せがれのほうを心配したわけなんです。

〈五十三年の三月十三日の団体交渉では、指名解雇という提案が会社からありましたね〉

まあ、いまふうに国鉄関係でいえば、肩叩きみたいなありますね。勤務状態から(評点が悪いひととはともかく)、会社に協力した人、長年いて不況時代を乗り切った人、途中で辞めて帰っ

49) 第1回希望退職は、会社更生法手続き申立て前の昭和52年春闘時に募集され、143名が応募した。以降、第3回までの希望退職者数は、下表のとおりである。

	第1回(昭52・7)	第2回(昭53・4)	第3回(昭54・1)
事務職	29 (24)	22 (19)	7 (6)
現業職	114(109)	159(151)	46 (44)
合 計	143(133)	181(170)	53 (50)

()内数は組合員数

なお、都沢さんが応募した第2回希望退職者の内訳は、大曲工場147人、川口工場34人であるが、年齢別では20代80人、30代40人、40代34人、50代19人、10代1人となっている。

50) この第2回希望退職募集前の53年1月6日の団体交渉では、管財人より指名にもとづく123人の一時帰休が提案されている。組合側は、指名に依らず全従業員が協議して交替制で実施するよう要請したが、管財人との交渉がまとまらないまま、123人にたいし文書で社内待機を命じた。これに抵抗した組合は、翌日から全面ストを実行したため、管財人は提案を即時撤回している(『闘いの記録』, 34頁)。

一時帰休の実施は、同年2月1日より69名について行われている。一時帰休者にたいしては、溶接・配管・塗装・鉄工・造船工学の5項目に分け教育訓練が続けられた。また、第二次の一時帰休は同2月21日から実施され、対象は136人であった。第三次は希望退職の問題が発生したため、中止となっている。

てきて一生懸命働いた大工さんなんかは、外さ
れたらうしね。ただ、(一般には、会社から指名
解雇されるとなると)外聞があり、名誉もある、
体面もあるだろうから、それより、(自分から希
望して)辞めるというほうが、多かったんでな
いですか。

〈結局は、組合と管財人との団体交渉で、指名
解雇ではなく、希望退職ということになったん
ですね〉

ええ。(私のいる)仕上工場の職場では、私が
辞めるっていいましたら、「都沢さん辞めたら、
私たちみな辞めます」というんです。「いや、お
まえたちは残れよ」と言ったんですけどもね、
倒産の時点では一人除いて、ぜんぶ私サついて、
辞めてしまったんです。ぜんぶ、若い、まじめ
な人たち——。その人たちは、いろんな職業に
変わっていききましたね。大工さんになった人、
タイル屋さんになった人、それから農家の長男
で家に帰って農家やりながらアルバイトしてい
る人、別の下請けに入っている人もおるわけな
んです。私も希望退職してから、若いひとたち
の就職斡旋に奔走したもんでね。私といっしょ
に働いた人が、もし希望退職、あるいは首にな
るばあいがあっても、その人たちの仕事場、職
場をさがしてやらなきゃねえ、という気持のほ
うが余計あったわけなんです。

だから、私が辞めたその後も、私の家を訪問
してきたり、結婚式に呼ばれたり、夕食ごっつ
おうになったりしておるんですね。

〈第一回目の希望退職者募集のときは、下請け
会社への出向するかたちの合理化案がありまた

ね〉

そうですね。あの当時は、下請けへの出向で
いうのは、発令はしましたがね、実際の
ところは、社長が同じところにやるだけなんで
す。

例えば、山脇木工ですか、⁵¹⁾その社長は、山
西造船の常務であり工場長であった人が、兼任
社長をやっておったわけなんです。山脇木工と
いうのは、もともと山西に協力するという名の
会社ですからねえ。これには、木村八郎さんて
方が、初代社長になったんですね。木村さんは、
西條海運の「第二海幸丸」——あの当時は450ト
ンでしたか——その船の初代機関長をやったひ
とですね。その機関長あがって、初代社長になっ
てきたわけなんです。いずれにしても、その
元締めは西條芳次郎さんですね。二回目のとき
には、石巻の職業安定所の所長さん、課長さん
がおいでになって、国の特別不況対策で(再就
職の)率も、うんとよかったんです。すべて山
西さんが、そのような労をとってくれたんです。

だから私、辞めてからも、西條芳次郎さんは、
まあ、偉かった大人物だと思っておるんです。
その点にたいしては、私は、もちろん感謝して
るわけなんです。また、社長のまわりに取りこ
んだ柿沼さん、それから現在の片倉社長さんあ
たりも、芳次郎さんに協力したことについて
も、偉いと——。やはり、そういう協力者がな
ければ、中小企業が社長独裁をやっても、うま
くいかないばあいがあるんですからね。

〈それで、都沢さんの再就職先、いま勤めてい
る会社のことなんです、そのきっかけという

51) 山脇木工所。社名の由来は、山西造船協力木工所で、山西造船鉄工所の下請け木艀装会社である。昭和42年11月に、木艀装下請け5社で設立した。山脇木工所は、山西造船の貨物船建造部門への進出を機に、大曲工場の下請けとなった。親会社の倒産で、従業員は80人から30人に減少し、山西造船にたいする債権は1,310万円生じている(『河北新報』昭53. 10. 4)。

のは……>

いま、私が行っている協立工業は、その初代社長が、山西がこういふふうになる前から、「都沢さん、うちサ来てけんか」っていってあったんです。

私が山西の中瀬工場に勤務しておった、いまから二十二、三年くらい前でしたかね。たまたま、現在の石巻船舶工業というのがあるんです——業種は、やっぱり船のエンジンの整備で——その社長に三浦初男て人がなって、阿部鉄三郎て人が専務をしてたんです。この二人は、義兄弟なんです。阿部さんの妹を、三浦さんが奥さんにしてるわけなんです。で、この石巻船舶工業をやるべく、阿部鉄三郎さんが、私のところに挨拶にきたんですね。「都沢さん、おら家の会社を、山西の下請け負いのほうサ入れるように、なんとか骨をおっていただけませんか」って——。そんで、むろん、私より偉い人サ通さなきゃいけないので、小林敬三っていう人をお願いをしたわけなんです。

それで山西に手続きをとって、山西の下請け負いに入るんですが、ただし、悪い工事になったばあい、誰がその弁償をするか、保証するかって問題がでてくるわけです。このときに、鈴木鉄工の社長とその一番弟子の方が、石巻船舶工業のバックになって工事を保証するということで、山西の下請け負いに入ってきたわけなんです。

そして、三年くらいたちましたかね。たまたま、その阿部鉄三郎さんと三浦初男さんが、トラブルになってしまったんです。やっぱり義兄弟ですから、奥さんたちも、あわなかったんですね。そのトラブルに、私が仲に入って、より

をもどすのに十日ぐらいかかりましたかね。もどしたところはよかったんですけども、それも束の間、半年ぐらいたってから、またトラブルが出てきましてね。それで私は、別会社をつくりなさいって、協立工業という会社をつくり、その社長に阿部さんをもっていったんです。そのとき会社の名前は、まだでてなかったんですが、私と阿部さんと三浦さんと、三人で力を三つ合わせて十の力にしようというので、協立工業という名前がでてきたわけなんです。

<二十数年前に協立工業を興したというのは、なにか成算があったわけですか>

そうです。たまたま石巻地方に、油圧機械の導入が始まったわけなんです。いままでの駆動装置は、ベルトだとかチェーンを使っておったんですが、こんどは油圧式に変わってきたわけなんです。その油圧機械は、西神戸の川崎重工の船に導入されたんですが、むこうの栗岡って課長が「都沢さん、どこか石巻の優秀な人で、うちの油圧を、なんぼか手がけてくれるような人、お世話していただけませんか」て、相談もってきたんです。私は、それではというので、石巻船舶工業をお世話したんです。そしてところが、こんどは阿部鉄三郎さんは、「なーんだ、都沢さん、俺サも、油圧世話してくれ」となったんです。そんで、片方（阿部さん）には、福島県の福島製作所の油圧を、この協立工業のほうに、お世話してやったんです⁵²⁾。そして何年か過ぎて、お互いにとても伸びていったわけなんです。石巻船舶工業のほうは、東北でただ一つの、川崎重工の指定工場となって、現在、繁栄してるわけなんです。

協立工業は、たまたま(四十八、九年ごろに)

52) 都沢さんは、福島県四倉にいたころからの人的つながりがある。

八戸の「正壽丸」の仕事を、山西造船内でやっていたんですが⁵³ そのとき（正壽水産の）常務さんである柳谷さんが阿部社長に、八戸の造船所をやらないかという話を、お茶飲み話にもちかけてきたわけなんです。青森県八戸の沼館というところの造船所の社長さんが、高齢のためにやめるという話があって、あとを引き継ぐ人がおらなかったわけなんです。阿部さんも、山西だけではたいへんだというので、八戸に進出したいという問題がでてきたわけなんです。

私、そのときに、不況サ入っておったのでね、うんと反対したんです。十一月の十五日の夜も、三回ほど電話かけて猛然に反対したんですけれどもね、「どうしても行く」というのだ、「行くんなら行ってもいいから、特急で行ってくれ」といったんです。ところが、その特急とらないで、乗用車でいったんです。で、十一月の十九日七時ちょっと過ぎに、（その乗用車が）正面衝突して、阿部鉄三郎社長は即死してしまったんです。運転してたのが、次男である阿部長吉くん、助手席には現在の社長、阿部勝幸さんも乗ってたんです。

〈で、都沢さんが希望退職する時点で、協立工業の話がでたんですか〉

いや、その前、何年も前から、うちサきてくれとは言われておったんです。ただ、私個人で、それを前もって誰かにいったんでは、会社のほうに信用問題がありますんで、その点は伏せておったんです。これは、うちの家内にも、いわ

ないでおったんです。

私が入ったときは、二十人ばかりおって、その工場長ということで入ってきたわけなんです。工場長で行きまして、まあ、小さな会社でも、いちおう会社組織になってるもんですから、現在は、社長相談役で、行ってるんですね⁵⁴

努めても、努めても

〈少年時代から現在までのことを、ずーっと振り返りかえてみて、いちばん辛かったことといえ、どういうことでしたか〉

やはり、弟子時代ですね。

十六、七年ころの二月でした。石巻（の鉄工所）から登米郡豊里町まで、リヤカー引っぱってね。いま歩いて、五時間はかかるんですが、大きな荷物——鉄だから重いんです——それを積んで、二回ほど往復したことがあります。道は、北上川の堤防を歩くんです。むかし、そこは、"ホイド〔乞食〕泣かせ"っていうあだ名ついてたんですね。当時は、北海道の炭鉱で怪我をしたひとなんか、（身寄りがなくて）このへんに乞食をしてきたんですね。何人も並んで歩いたわけではないんでしょうけど、ホイドが涙を流して、その北上川の堤防を歩いたと——要するに、寒い、厳寒のときに歩くので、ホイド泣かせの道路と——。

当時は、戦争サ入ったのでトラックがなかったんで、どうやって運んだらいいかんべというので、私は、「一人でも苦勞してみたいなあ、なん

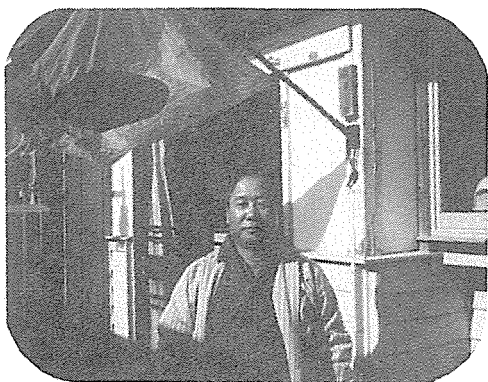
53)「第二十正壽丸」, 349.16 トン, 昭和 48 年建造。「第二十八正壽教」, 349.42 トン, 昭和 49 年建造。ともに正壽水産㈱の注文による。

54)「やっぱり責任者となると、仕事をとって従業員を賄うという気持ちにやらなきゃないし、それをとった限りは責任して納品しなきゃないし、納める品物が確実な製品でないね。それに工期を守らなきゃない——納品するときは、お金の見通しを立てなきゃならないし、相手方にも工賃をいくらでも安くして、他者と競争しなきゃないというような、経営者の代行といったかたちですね。」

か実家のほうサも、涌谷の人たちにお詫びかたがた、なんとか身を立たい」という気持があって、「よし、では、俺行こう」と思ってね。朝の五時ころ石巻を出発しまして、豊里に行ってポンプの修理をして、帰ってくるんです。

〈ポンプの修理というところ……〉

豊里町には、いまでいう土地改良区で、農繁期に田んぼに水をあげるポンプの修理なんです。そのときのポンプとエンジンは、蒸気エンジンで、その部品の悪いところを分解して、整備、取付け、運転というかたちにもっていかなきゃならなかったんです。五月、六月はやれないから、寒いときに（部品を）バラさなきゃならないんです。三月ころからは、福島あたりからくる船の仕事で忙しくなるものですから、それまでに（豊里の仕事）をかたづけておかなきゃならないんですね。師匠と兄弟子は、汽車で先に行って、佐藤屋旅館とどこに泊まって待ってるんですね。



現在の都沢さん（自宅前で）

そのホイド泣かせの道路を往復したのが、いちばん辛かったですね。いまになってみるとね、私、山西におったときも、いうわけなんです。「私たちは、こういう（苦しい）時代を生きてきた。あなたがたはね、組合だとか何とかばり対象としてもね、人間はやはり、すすんで

苦勞しなきゃならん」と。「これは、組合についてばかり言うんでないの。仕事でもね、人がいやがる仕事をやってみる。例えば、油になって汚れるとか、狭い所で一人とか、高くてたいへんだとか、そういうところをやってみなさい。足の一本ぐらい折れる、手の指一本ぐらい折れるような（危い仕事）をやってみなければ、人間としての価値がないようだ」とね。それは、怪我していいとかでなく、仕事はそれくらい、すすんでやるくらいの気持でないとだめだといふんですね。

私が二十一か二十二のころ、伊藤貞（之助）さんの子供さんが、日赤病院に入院していたとき、私、病院に朝晩行っておったことあるんです。そのとき、町会議員の小野さんて方の家族が同部屋だったんですが、その小野さんが伊藤貞さんの作業所——当時は、納屋といっておりましたがね——そこに訪ねてきて、これ書いてくれたんです。「努めても、また努めても努めても、努めたりぬは努めなりけり」と——。私、これ何十年も暗誦してるんです。これ、私の、いちばん印象に残っていることばなんです。

〈こんどは逆に、うれしかったこと。仕事をしていた、いちばんうれしいことはなんでしたか〉

あ、これはうまく取付したな、つくったなというとき、まあ、二時間かかる仕事が、一時間半や一時間くらいでおさめて帰ってね、先輩たちから「ずいぶん早かったな、たいしたもんだな」といわれると、無性にうれしくなりましたね。そういうときは、貯めておった金で、飴っこなんか買って、みなさんサゴ馳走したくなるような感じになりましたね、ご馳走したこともありました。

それから、船が進水したときの感激ですね。

俺たちの同僚がつくったんだ、設計も、たいした設計するもんだなあ、船もうまく、スパーッと立つもんだなあと感心してね。さらに機械、エンジンを積む——エンジンも二十種類くらいあるんです——針がうまくいって、運転しても水もこなかったとなりますね。すると、ああよかったと、ホッとしたという感じですね。

そしてこんどは、艤装中に船の人が何人かくる、いよいよ完成まぎわになってくる、引き渡しになる、出航する準備となる——というふうになってくると、船頭、船長から乗組員の人からね、「こんなに立派な船つくったんだから、魚どっさり釣って、大漁してきてけらんよ」、「うん、こんど大漁して、どっさりごっつおうすっから——」、ということを、お互いに交わすわけなんですね。ほんとうに、ああ、うれしいな、感じいいなと、こう感激するんですね。

で、大漁してくると、これは誰と誰というふうに名前書いてね、魚を蠟紙に包んでもってくるんです。「新造当時は、お世話になった」とか、「艤装中は、お世話になった」とかね。私なんか、いちばん魚もらったほうなんで、こんどは、みんなに分けてやるんです。

〈都沢さんは、五十二年に山西造船を希望退職して、いまは協立工業で働いていらっしゃるわけですが、会社や組合の事務所に、よく顔をだしておりますね。山西を離れても仕事の関係で、あるいは退職者の会合などで、現在も、いろいろおつき合いがありますね〉

はいはい。その退職者の会は、山友会というんですね。希望退職した時点で、これを発足させたわけなんです。みんなが集まって、分散会やろうというので、宴会をやったんです。いつ

会えるかわからないとか、お互いに職をさがしてやろうじゃないとか、その分散会やりながら、そういう相談があったわけなんです。そういうんであれば、会を設けてやったほうがいいでねえか、というので、毎月千円ずつ集めて、納められた会費で、親睦会や冠婚葬祭のようなの〔扶助〕をやろうじゃないか、ということがでたわけなんです。

んじゃ、都沢さんが会長になって下さいといわれて、私が会長で、仕上げにおった佐々木俊男という——いまは、石巻市門脇で後藤漁業部の監督機関長やってますけれども——その方が副会長になりましたね——。年に一回は旅行しようじゃないかと、一泊旅行もやってるわけなんです。

それと、私はいま協立工業に行っておってもね、いちばん幸せな男だなと思うのは、現在の会社——山西造船、そして構内の（下請け）業者の何十者とおる人が、「都沢さん、都沢さん」で、いまでも声をかけられるんです。

どこの職場に行っても、事務所に行っても、「都沢さん、お茶（をどうぞ）」って、すぐにいわれるんです。会社に行くと後輩がいるし、課長連中にも後輩がおるんでね、私は、粗末にされないぐらいがいいんでないかと、思っておるんです。いまは私も油によごれ、汚れて一生懸命働いておりますけれどもね。「都沢さん、そんなに働かないったっていかべっちゃ」なんていわれて、お茶をいれたり、コーヒーをいれられたりなんですよ。⁵⁵⁾

追記

この面接記録の取材にあたっては、山西造船

55) 都沢さんとの面接は、昭和57年10月・11月・12月、58年3月・6月・9月・10月に行われた。

鉄工所総務課の前田英比古氏，全造船山西分会
の川並秀五郎氏・高橋健治氏ほかのみなさん，
神戸恭司氏，都沢小太郎氏をはじめ，多くの方
がたのお世話になりました。ここに記して，御
礼申し上げます。